
魔法少女リリカルなのは?転生者の闘争?

カレーパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは？ 転生者の闘争？

【Nコード】

N1547P

【作者名】

カレーパン

【あらすじ】

死んでしまった青年、皋月みづき 真耶まやは、神であるオーディンに異能を授かり、リリカルな世界でロキの転生者たちとの闘争劇を繰り広げる。真耶はロキの転生者たちを倒せるのか？

この小説は処女作です。私の厨二スピリッツによくわからない火が点き書いたものです。

オリ主 転生物 原作・キャラ崩壊などが嫌いな方は回れ右を、

それでも読んでやるよーって方はどっぞ読んでいってください。

プロローグ（前書き）

祝 初 小 説 投 稿 ！ ！ ！

今までは読む専だったけれど、遂に小説を投稿です。

自分も読み直してはみますが、もし誤字脱字、おかしい日本語、文法などを使っていたらご報告をお願いします。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/13日・編集

ブローグ

「いざいざいざい」

へ？

いきなりこんな始まり方ですまん。こうなった経緯をダイジェストで表すと……。

いつも道理学校からバイトに向かう
赤信号で停止

子供が飛び出す

トラック猛突進

俺が子供に追いつき背中を思いっきり押す

俺オワタ（笑

冒頭へ。

あれ？これでもわかんねえ。思い出してた俺自信がわからない。

とりあえず周りは真白で、目の前に金髪美少女。その後ろにはなんかの槍が刺さった頂点が見えないバカデカイ樹、その根元にはすごく澄んだ泉があるだけの空間で、俺は目の前の美少女へ訝しみの眼を向ける。

「なによ、その眼は。ま、いつか。とりあえず自己紹介しておこうかな」

美少女は頬を可愛らしく膨らませて怒ったような顔をしたが、すぐにそんな顔を引込めて微笑んだ。その笑顔は見惚れるほどに綺麗なものだったのだが

「わたしの名前はねえ……オーデイン、て言うの」

その微笑みも一気に胡散臭くなった。

「オー、デイン？」

「そ、知ってる？」

「知ってるもなにも…」

北欧神話の最高神、グングニルの所有者、スレイプニルの飼い主？、タロットの吊された男、フェンリルに喰われる、等々。昔、北欧神話についてちよいと調べたことがあるから、そんな単語が頭に浮かぶ。

だが、オーデインは多分、男だし、神話の中の存在だ。つまりは俺の執るべき行動は

「とりあえず119番と」

こつなるわけだ。

「え、ちょっと！？なにしてるの！？ その携帯はしまってー
ーっ！！」

美少女に涙目&上目づかいで頼まれたら、俺には従うという選択しかないな。

「ふう、漸く仕舞ってくれたね。できれば信じてほしいんだけどな、
皐月 真耶（さつき しんや）くん？」

「っ！？」

確か俺は名乗っていないはずだ、なのにこの子は俺の名前を言い当てた。つまりは、そういうことなのか？

「しかたない、信じるよ」

「うん、ありがと」

オーデインは嬉しそうに、ニコツ、と笑った。
やばい、ドキッとしてしまった。

「とりあえず、貴方は死んだというのは……分かってる？」

その問いに俺は、首肯して答える。

あんなことがあったんだ、普通の人間は死ぬだろうな。

「で、いきなりだけど、転生してもらいたいんだけど？」

「へ？」

まあ、自称最高神さんが出てきたのだ、なんかあるだろうと思う
たら……まさか転生とは。

「……いいけど、なぜ俺なんだ？」

そこが気になるよ。

「えっとね……君が適正者だったから」

「適正者？」

「そ、転生できるのは万人ではないんだよ。人の中にはその大多数
から外れた、特殊な体質を持つ人が、偶にいるんだよ。その一人が、

あなた」

そんなのがあったのか。

「それで、ちょっと頼みごとがあつてね……」

あれ、なんか嫌な予感がするんだが……。

「転生先でやってほしいことがあるんだけど」

「……何だ？」

ちょっと警戒しながら聞いてみる。

「友達のロキが、悪人の適正者を何人も転生先に送っちゃってね。その退治というか、なんというか……倒しちゃって欲しいなと」

なるほど、ロキね……。じゃ、しかたないか。

「別に、転生させてもらうんだから、それくらいするよ」

と、言つて笑つてやる。すると、オーデインは驚いたように目を丸くさせた。

何故？

「珍しい人がいるんだね。こっちの都合に付き合わせちゃうのに、文句ひとつ言わないなんて」

「そうか？」

困ってるなら、助け合うのが普通だと思っただけだな。

「そうよ。……それじゃあ、転生した奴と戦うことになると思うから、何か能力をあげるよ」

「ん、サンキユ」

そっだな……。

「体の構造を変えて異能を宿す。例えば、眼球を変えて直死の魔眼とか右手をイマジンプレイカー幻想殺しにしたりすることができる、ってやつね」

「ん、わかった。向こうに着いたら使えるようになるから……」

あ、気になることが一つあったな。

「なあ、オーディン「メルでいいよ」え？」

「メル、親しいものにしか呼ばせないんだけど、貴方は呼んでいいわ。呼び難いでしょ？」

「そいつはありがたいけど……なぜメル？」

「もう一つの名前なの。みんなは“オーディン”を求めてるから、公には名乗れないけどね」

そう言ったオーディン……いや、メルは、さっきとは違い寂しげに微笑んだ。

その顔を見たら、不意に俺の手がメルの頭にのり、わしゃわしゃと撫でていた。

「うゆ……。なに？」

メルが不思議そうな顔で見てる。

「いや、撫でやすい位置にあつたから」

ちょうど俺の胸位までしか身長がないからな。

「そう……。……。ありがとう」

メルは、ボソツとそう呟き俺の後ろの方に歩いていき、手を振る。すると、門が現れ開いた。その先は光っていて見えない。

「……。それじゃ、ここから行けるから。」

そういつて俺の方に向き直る。その顔には最初に見た微笑みに戻っていた。

「あ、聞くの忘れてたけど。俺の行くところってどんなところなんだ？」

さっき聞き忘れたことを聞いておく。

「ん〜。貴方たちがいう「魔法少女リリカルなのは」の世界だよ」

「へ？」

ここにきて、何度目になるのかわかんない間抜け声を漏らしてし

まった。

「正確には、平行世界。全部が一緒じゃないよ」

「そっか、けど大きく変わるってことはないでしょ」

「うん、そうだね。もう、世界に馴染んだ大筋が変わることはないから」

「そかそか」

うし、聞くことも聞いたしそろそろ行くぞ。

門に歩を進めてる間に気づいたことがある。

「なあ」

「なに？」

「転生時期を、なのはたちの5年前にするってできるか？」

「できるけど。……なんで？」

「いや。力をしっかりと使えるようになるための修業期間だよ」

「そう。うん大丈夫だよ」

あと一つ理由がある。

それは、俺はなんでも容量よくできないから、しっかりと力を制

御できるようにしてから、原作に臨みたいのだ。

「それじゃ、いきますか」

俺は、右肩をグルグルと回しながら門へと近づく。

「メルの横を通り過ぎるときに」「いつてらっしやい」と聞こえたのは、聞き間違いじゃないと思う。

門を潜り抜けると光が強まる。

その光が収まって、最初に感じたのは誰かに抱き上げられている暖かい感触で、最初に見えたのは、白い天井と、優しげな顔をした女性の顔だった。

「ぶ？（へ？）」

喋れねえorz

プロローグ（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。

拙い文ではありますが、これからよろしく願います。

それでは、次回 第1話 始動 はじまり？

その力は戦うために

第1話 始動 はじまり？（前書き）

次です。

原作に入るまでは、かなり駆け足でいきます。
よくわからないところもあると思いますが、生温く見守ってください
れば幸いです。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/13日・編集

第1話 始動 はじまり？

オーデイン、本名メルに送り出されて5年。

皇月 真耶 5歳です！！

展開が速いと思うかもしれないが、別にこの5年間語るようなことはない。

あれだ、この5年間を知りたかったら自分の親に聞いてみる。みんな変わらないだろう。

違いと言ったら能力を試したくらいだ。

“眼”を中心的に鍛えたんだが。確か3歳のとき、螺旋の魔眼を使って間違ってガラスを割ってしまったときは、マジで焦った。

まあ、モノローグはこの辺にして思考を戻そう。

お隣さん家の高町さんに、女の子が産まれたんだとか。

ついに来たか白い悪魔……。

お隣さんが高町家なのも驚いたが、桃子さんや土郎さんがマジ若く見える。

そして、なぜか家の母も若い。

親父は阿○寛のように渋い人だ。今、海外出張中である。

さて、人の神秘や近況について考えるのは又にしよう。今、考えるべきことは……。

「……このなぎ倒された木々をどうしよう」

山の方に修業しに来たのだが、ちょっとやり過ぎた（汗
木が密集していた筈の場所が、かるい広場になってしまった。こ
れはかなり不味い気がする。

「ここは、逃げるが勝ちだな」

そう結論付けて、全速全身DAAAーっ！。

逃げるようにそそくさと走り、この場所から退散しようとした
のだが。

「へ？」

いきなり上下が逆転したような感覚とともに、意識がブラックア
ウトした。

「はっ

」!

眼が覚めて、最初に見えたのは綺麗な朱色の空と、深い藍色の空。

「……………あゝ。思い出した」

「多分、力の使い過ぎによる過労で打つ倒れたのだろう。
身体が少し怠いし……………」。

「とりあえず体を起こしてみたが、特に痛めたところは無さそうだ。

さて、空を見たところ今の時間は夕方だろう。」

「そして、俺のあの家での門限は、恐らく過ぎている。」

「ヤバい。帰りたくない」

「この後のことを考え、恐怖に震える。」

「俺の今の母親は、基本優しいいい人だ。」

「だが…………いや、だからこそ、怒ると怖い。恐過ぎるのだ。」

「しかし、これ以上遅くなれば更に大変なことになるだろう。」

「よし、即帰ろう。そうじゃなければ、俺の精神が保たない」

「結論は出た。後は行くのみ！」

「出来るだけ速く帰る為に、能力を使おうとしたが、恐らく使い過ぎの反動でセーフティが掛かっているのだろう。」

ならば、仕方ないのでそのままの状態で、全速力で駆け抜けた。

家に帰ってから大変だった。なにがって、母さんの臍月の怒りを鎮めるのだ。

「いったい今まで何処にいったのかしら？」

20代後半なのに普通に学生で通る外見をした母の前で、俺は正座をしていた。

まあ、たしかに9時頃出て行って、何の連絡もないままで昼も過ぎ。18時頃になっていきなり帰ってくれば、怒るのはわかる。

……だが、問答無用で、椅子に縄で縛りつけるのはやめてほしい
もらいたい。

「……今まで、山の方にいました」

「山に行くのはいいけど、何故こんなに帰りが遅かったのかしら？」

「迷ってました」

「ほぼ毎日行ってるどころで？」

「まだ、行ったことがないところに、迷い込んだんです」

「……………そ、じゃあ仕方ないわね。今度から気を付けるように」

終始笑顔の美人と向き合って、お話をしている。と、字面だけみれば羨ましがる野郎どもがいるかもしれないが。

それが母親で、笑顔の裏に黒いオーラが視えなければ俺も嬉しいよ！

とりあえず母親のOHANASSIを、でまかせを交えて乗り切り、夕飯を食い、風呂に入り、寝る。

明日、あの場所を見に行ってみよう。あの木々をなんとかしないとな…。

第1話 始動 はじまり？（後書き）

おかしい…。

何故か原作キャラより先に出してしまった。

ま、まあ、彼女の順番はA、Sまでの予定なので、問題ないはずで
す。……たぶん。

編集入って、ある子の登場を辞めました。

それでは、また次回 第2話 学校？やりなおし？

その力は戦うために

第2話 学校？やりなおし？（前書き）

次です。

判り難い表現などがあるかもしれませんが、生温く見守ってください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/13日・編集

第2話 学校？やりなおし？

更に時間は跳び……。

聖祥大学付属小学校、小学3年生になりました。

二度目の小学生です。

面倒臭いが、法律じゃあ仕方ねえよな。そうだ、しかたないんだ。仕方、仕方ない。

そう、自分に言い聞かせないとやってらんないよ……。

一応、原作のなのと同じ年齢になったわけだが……。

やはり、小学3年生であんなに精神年齢が高い子なんていないから、特に話す相手も居ないから、マジで苦痛でしかない。

同い年にしてもらった方がよかつただろうか。む。

「なあ、真耶」

訂正。こいつの精神年齢は、なのは達に近いものがある。

「どうしたんだ、恭介」

隣の席の男子。棗 恭介。自分で遊びを提供して、自分が一番楽しむようなやつだけど、一緒に遊ぶやつのことをしっかり考えて遊ぶやつだ。

それに、確か2年の4人と一緒によく遊んでいるから、年上として精神が成長したのだろう。

「わりいんだけど足んとこの消しゴム、取ってくんねえか？」

「ん？ ああ」

今は授業中なので、恭介は小声で言うてくる。

足元を見ると、確かに消しゴムがあった。それを取り、返してやる。

「ほい、それと……その問題間違ってるぞ？」

「なっ……マジか？」

「……嘘言っでどうすんだよ」

消しゴムを渡すのと同時に問題をみてやると、間違っているものを見つけたので教えてやる。

「サンキュ、助かった」

「……別に、いつものことだ」

それにしても、これ、小3でやるような内容だったか？ 俺の記憶では、小学校高学年の中盤位だった筈なんだがな。

私立小学校恐るべし……。

昼休みになり、弁当を持ち屋上へ行くため席を立つ。

「お前はいつも道理屋上か？」

立ち上がったところで、隣の恭介も立ち上がりながら聞いてきた。

「そついうお前もいつものところか？」

「ああ。お前もたまには来てもいいんだぞ？」

よくこうやって恭介に誘われているけれど、俺は行ったことはない。その理由が……。

「いや、俺と一緒にだと鈴が怯えちまうだろ？」

「……まあ、確かにそうだけだよ」

恭介の妹の棗 鈴。なかなか人に懐かない猫娘だ。

けど、それを差し引いても避けられてるような気がするんだよな

く、なんでだろうか？

ま、そのことは幾ら考えてもしょうがないので、屋上へ移動する。

そして、俺の秘密の隠れ家　　屋上に居る人たちからは見えない位置　　で腰を下ろす。

速攻で母さんの弁当を食い終わり、いつも道理“修業”をするために念のための人払いと防音の結界を張る。

そして、“眼”の構成を変化させて、魔眼を発動する。今日は、直視の魔眼を発動。

俺は一度死んでるからか、死の線を見ても悶えるほど頭痛はこない。精々、爪楊枝で頭をツンツンされているような感覚がする程度だ。

「ふう……」

それでも、“普通”は見れないものを視ると疲れる。だから、実戦でできるだけ維持できるように、昼休み中ずっと発動させておく。

ただただ、視界に入るものの“線”を見続ける。

ずっとそうやっていると時間の感覚がマヒしてくる。

少しして予鈴が鳴ったので、空の弁当箱を持って、結界を解き、屋上から去る。

教室の席に戻るとともに、先生が入ってきて、また退屈な時間が始まる。

「????????きる」

「ん……」

体を揺すられている感覚がする。

「起きる。おゝい、真耶？」

「うん……」

目を覚ますと、隣の恭介が俺を揺すっていた。

「……なんだ、恭介。俺があてられたのか？」

とりあえずあり得そうなことを聞いてみると……。

「いや。ていうか、もう放課後だぞ？」

「……………なに？」

寝ていたら、いつの間にか放課後になっていた。

いつもなら、ホームルームあたりで目が覚める筈なのだが。あ、今日は土曜日か、今週はいつもより修業時間が長かったから疲れが

あつたのだろう。

明日は土曜だから、一日休息に使えるな。

と、すでに思考は明日の予定を考えている。

「真耶、俺はもう行くぞ？」

「お？ ああ、悪かったな恭介」

「いや、いいつて。じゃあな」

「ああ」

恭介と別れの挨拶をし、俺は伸びをした。すると……ボキボキボキという、小学生の腰からは鳴ってはいけないような音が聞こえた。

「……やべえな」

俺は、さっさと体を動かすためにカバンを持ち、教室を出、学校を後にする。

俺はそのまま森へ行く。三年と少し前に俺が広場にしたところへと向かう。

今は、倒した木や、切り株をすべて撤去し、軽く子供たちが遊べ

る位になった。俺の今の修業場だ。

制服から、下をジャージ、上を半袖のＴシャツに着替える。

そして、オリジナルの人払い、防音、光を屈折させる結果を張り、広場の真ん中に立つ。

パシン！ と、拳と掌を合わせて眼を瞑る。

一度深呼吸して、“眼”を開く。

その眼は赤く染まり、その周りには勾玉の形をした黒い模様が三つ、囲むようにしてある。

『写輪眼』?????相手の体術などをコピーでき、ずば抜けた動体視力で高速で動くものへの対応も可能な“眼”だ。

それを発動した状態で体術の練習に入る。

俺のできる体術は、八卦掌や八極拳といった中国武術だ。

なぜ出来るかは、生前……いや、前世で色々な武術をやりそのすべてを免許皆伝した。化け物のように強い知り合いがいたので、その人に教えてもらったからだ。

おそらく、能力を手に入れた今の俺でも勝てないと思う。そう考えてみると、俺の周りは結構やばかったのか……。

とりあえず、『型』を一通りやったので、敵を眼前に投影しての

組手をする。

「ふう　　、はあっ!!」

本当に投影するのではなく、ある意味妄想の域だろう。想像するのは、我が武術の師、生前の知り合いで最強だった人。

「ふうつ　　、っ!？」

負けた。

やはり、生前で勝てなかったことが惜しい。一回でも勝っていれば、自分が勝つイメージを固められたんだがな。

しかし、本当に化け物だ……。写輪眼の死角から攻撃がきたり、たまに写輪眼でも追い切れない攻撃がきて怯んでしまう。

(ふう。まだ修業が足りないな)

能力を得ても、まだまだ届かないとは……。彼女はもしかや転生者か？
……ありえないな。

そんなことを考えていると、後ろから声が聞こえた。

「くうくん」

「ん?…お前か」

普通、声が聞こえればビビるなりするのだが、この狐やろつは動物なので別にしかたない。

この狐の名は久遠。この広場を（不可抗力）で作り上げてしまった日の次の日から、ちよくちよく会うようになった。

とら八の方では確か、妖狐だという設定だった筈だが……この世界の久遠は、人の言葉をよく聞く、頭の良いただの狐として平和に暮らしているみたいだ。

久遠がきたということで、結界を解き、遊ぶことにした。
俺はもう修業を切り上げる。

「久遠、少し遊んでやるよ」

そう言ってやると久遠は嬉しげに鳴いた。

久遠と軽く遊び、荷物を持ち、家に帰る。

「ただいま」

俺は微妙に疲れた声を出しながら家に入る。

その後は、風呂、飯、ベットへダイブとよどみなくこなした。

ベットに寝っころがったまま考える。

おそらく、この二年の内に土郎さんが大怪我を負うだろう。おそらく死ぬことはないはずだ。

土郎さんの怪我をできれば阻止。

できなければ早期治癒。並びになのはのフォロー。……一応お隣さんで妹分だからな。

未だ敵は動かない。少し不気味だが好都合、こちらは好きに修業をさせてもらう。

敵が出てきたらとりあえず潰せばいいだろう。

……メルに連絡ができればいいんだが、生憎そんな手段は知らない。と、言うか、聞き忘れた。

ま、とりあえず今後の方針は、行き当たりばったりだな。

先が思いやられるよ……。

第2話 学校？やりなおし？（後書き）

なぜかノリで出してしまったが大丈夫だろうか？

反省はします。だけど、後悔はしません。……おそろくは。

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

今回は、初戦闘です。私に書けるのだろうか……。

それでは、次回 第3話 初陣？ひとごころし？

その力は戦うために

第3話 初陣？ひとりろし？（前書き）

次です。

真耶の初戦闘です。はっきり言って微妙な出来になってしまいました。

足りないところは、各々の想像力でカバーをお願いします。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/13日・編集

第3話 初陣？ひとじろっ？

あれから一年ちょっと。

警戒はしているが、特に変わったことはない。

そんなある日。今日は学校も休みで、昼飯の後に修業をしようと思いいつものTシャツにジャージという格好で家を出たときに念話ってきた。

『 真耶、聞こえる？ 』

「っ!？」

メルの声だ、いきなりすぎて声が出そうになったが堪えた。

『メル、念話できたのか……』

『あ……、ごめん言ってなかったね。申し訳にやい』

こいつは、反省する気があるのだろうか？

『まあいい。とりあえず、お前から念話が来たってことは……』

『そ、来たよ。ロキの転生者が』

メルは俺の問いを肯定する。ついに初陣である、気合を入れてか
ねば。

『その場所に転移するから、人目のないところに』

『了解』

俺はそう返答すると路地裏へ走りこむ。さらに、念のための光を
屈折させる結界を張る。

『いいぞ』

俺がそう言うと、メルは転移の陣を敷く。

一瞬、光に包まれその光が収まると、違うところに居た。

そこは、砂漠にビルが突き刺さったような世界だった。

「うを!?!」

砂漠なのにまったく熱くないことに疑問をもつ、どちらかとい
うと涼しいくらいだ。

上を見ると、厚い雲が太陽光を遮断していた。

『ここから2時の方向に10?、いや近づいてきてる。……9、9。』
9、8……』

『意外に速いな』

敵が相手から仕掛けにきてくれるらしい。探す手間が省ける。

『私が干渉できるのはこの位だよ。勝つてよ?』

『ああ、当たり前だ』

『じゃ、また帰りにね?』

『ああ』

そう言い合い、念話が切れる。

それと同時に俺は能力を解放する。

魔力による身体強化。

“眼”の構成変化、『写輪眼』の発動。勾玉は三つ。

“背中”の構成変化、烏族の白き翼の出現。魔法による飛行手段のない俺はこれにより飛べる。

今はこの状態で待機する。

少し待つと一人の男が、上空より着地する。

「てめえが……」

「そうだな、オーディンの代行者だ」

短い問答。しかし、お互いの素性を知るには十分。

男から殺気が飛んでくる。

それなりに強い、おそらく人を殺めたことがあるのだろう。

メルは言っていた。敵は、悪人を無理やり転生させたものだとならば、正当な転生者である俺が滅する。

構える。相手に掌を見せるような構えだ。

相手の殺気は、確かに強い……。だが、俺の武術の師の闘気の方が寒かったせいかな、脅威には感じない。

男は、宝石を取り出すとそれが光り、男の姿を変える。

黒い騎士甲冑のようなバリアジャケット、いや、この場合はまなま騎士甲冑でいいのか……。

そして、その手にはデバイスと思しき、黒一色の190cm位の身長の方よりも大きな大剣が握られている。

(あれ、あの太剣どっかで見たことがあるような……?)

そう考えていたら、男は大剣を担ぐように構える。

スキンヘッドで大柄な男には、かなり似合う格好だな。

そして、男の姿が掻き消えた。

いや、正確には第三者から見たら消えたように見えただろう。

しかし、今の俺は写輪眼により飛躍的に動体視力が上がっている。

男は、おそらく高速移動魔法でも使ったのだろう。かなりの速度で俺の背後に回り、その大剣は俺を叩き潰すために、かなりの高速で振り下ろされる。

だが、俺はそのすべてが視えている。

「デリヤア！！！」

「ふっ ！」

大剣をギリギリで躲す。

俺の黒い髪の毛が、数本宙を舞う。大剣は地面に叩き付ける結果になり、大量の砂埃が舞い上がる。

問題ない、既に相手を視界に収めている。一気に間合いを詰める、翼を高速で羽ばたかせてさらに加速する。

「はあっ ！」

「グッツ！？」

肘を突き出し男の水月を抉る。

さらに、後ろに伸ばしていた左手の掌底で顎を穿つ。そこから右足で跳びあがり、左蹴りを顎に当て、男の体を浮かばせる。

着地と同時に振り上げた足を、思いつき踏み出し振り子の容量で勢いをつけ、まだ空中に浮かんでいる男に、限界まで魔力を練りこんだ拳を叩き付ける。

「ハアッ！！！」

ズドンツと、重い音を残し、男が吹き飛びビルに衝突する。砂煙で見えない敵を睨み続ける。

これくらいで倒せるなら、メルは転生者なんて送らないだろう。そして、甲冑で物理的なダメージは軽減されているはずだ。

それに。。。

(拳があたる瞬間に、甲冑よりも硬いものが割り込んできた)

思考していると、奴を吹き飛ばした所から、ガラツと音がしたので切り替えて構える。

「ツテエなあ。今のは中国のか。……それに、てめえの眼」

気づいたか。

俺は油断せずに、立ち上がった男を見る。

「まあ、いいか。いけ　！」

男がそう言うと、大剣を持っていた筈の手の中にあつた、黒一色の楯が歪み、そこから高速で黒い帯のようなものが槍のように飛んでくる、その数は数百を数える。

「……これは!? チツ！」

俺は舌打ちをして、翼を羽ばたかせ上空へ逃れる。

今さっきまで立っていた場所を、黒き槍軍が削り取って往く。

そして、男も跳びあがり、両の手に出現させた黒一色の双剣を振

り下ろしてくる。
俺はそれを後退してよける。

やはりか……。

奴の武器は、ネギま！最強の一角、ジャック・ラカンのアーティファクト、『千の顔を持つ英雄』か。

まさか、デバイスとして使ってくるとは、面倒なことこの上ない。コレといった決まった形を持たない武器。相手に狙いを絞らせない厄介な武装だ。

「メンドクせえ……」

「おいおい、そう言うなよ。楽しんでいこう……ぜっ！」

奴は武器を大剣に戻し、突っ込んでくる。

「悪いけど、殺し合いを楽しむ気は、毛頭ない」

いくら武器の種類が多かろうと、その能力を使いきれなければ、意味はない。

「ふうっ……！」

息を吐き、集中する。そして、右腕の構成を変化させる。

男が振り下ろした大剣を、右腕で受け止める。

ガギンッ！

と、普通なら聞こえることのない音になる。

「な！？　なんだ、その右腕は……」

奴が俺の右腕を見て、驚愕したような声を出す。

今の俺の右腕は、BLEACHのチャドの変化した右腕になり、黒き鎧と化している。

「そう驚くな。楽しめよ……！」

俺は大剣越しに、奴へとイイ笑顔を向けてやる。

「……てめえ」

キレて押し切ろうとするが……

「フンッ……」

俺は軽く弾いてやり、その刀身を掴む。

「な！？　この野郎っ……くそっ！」

奴が無理やり離させようとするが、ビクともしない。

「はあっ　　！」

俺は短く気合を入れて、男を地面に放り投げる。奴は空気の壁を突き抜けて、急降下していく。

それを、翼を羽ばたかせて俺も追いかける。

そして、奴が地面に叩き付けられるのと同時に、俺が追いつき、拳を振りかぶる。

同時に、右肩の出っ張りが開き、ブースターのように水色の魔力粒子が噴射され……。さつき放ったパンチを、遙かに凌ぐ魔力パンチを、男の腹に叩き落とす。

「エル・ディレクト巨人の一撃ッ

！！」

ズドンッ

と、今までで一際でかい音が響き、砂の柱が立つ。

少しすると、砂煙も晴れ。真耶のみが立っており。その足元に、腹を貫かれた男が倒れている。男は、その腹の部分から、血ではなく黒い粒子を巻き上げながら、眠ったように死んでいる。

このまま、時間が経てば消えるだろう。

「……こんなもんか。ふう……」

『お疲れ様』

メルからの念話 came。おそらく帰りも転移させてくれるのだろう。

『確かに、疲れたよ』

『まあ、クレーターを造って疲れない人は、完全にチートというやつだよ』

その言葉に、周りを見てみると、俺を中心に地面がすり鉢状のクレーターになっていた。

そんなことを話しながら、出現した転移魔法陣に乗る。

転移した場所は、俺の鍛錬場の広場だ。

『サンキュ』

メルに礼を言ったら。

『ううん、お礼はこっちがいうもんだよ』

と、笑われた。

笑うことないと思うんだけどな……。

『ま、いいや。また今度な』

『うん。……次も、お願いね?』

『了解』

そう、言い合い念話が切れる。

「さて、どうしたもんか……」

とりあえず、周囲を確認し、帰ることにした。今日の修業は休むことにした。てか、初陣後即修業とか、やるやつの気がしれない。

今の俺の能力の限界は、三つ同時発動の1時間の戦闘が限度だ。しかも、魔力を節約してだ。さっきの戦闘では、三つの力を発動し、かなり魔力を使ったから俺の体は、結構限界に近かったりする。

俺は、だるい体を引きずり歩いていく。

「　　っ!?!?」

そんな時、町の　　おそらく商店街の方で、急激に魔力が収束したのを感じた。

そして……。

ズガンッ!

という、ものすごい爆発音がして悲鳴が響く。

俺は、その現場に急ぎ向かいながら、考える。

(なんだ、このイヤな感じは……)

俺の胸に、言い知れない、何か黒い靄のような不安が広がる。

俺のその心のように、空は重苦しい曇天だった。

第3話 初陣？ひとごろし？（後書き）

真耶の初戦闘、如何だったでしょうか？

自分的には「もうちょっとどうにかできたのでは？」と思いましたが…これが作者の限界です。

面目ない…。

今回は戦闘とかは無しです。けど、急展開です。…乗り遅れにご注意を。

それでは、次回 第4話 死？おわり？

その力は戦うために

第4話 死？おわり？（前書き）

4話です。

ここまでが書きためていたものでした。

これからは、週に最低2回位は投稿したいですね。

…できるのだろうか？

遅筆ですので、長い目で生温く見守ってください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/14日・編集

第4話 死？おわり？

爆発地点に到着した。

野次馬が邪魔で直接は見えないが、わかることは、転生者がやったであろうことだ。

さっき感じた魔力の収束。そして、この場に残っている魔力の残滓でそれはわかった。

しかし解せない。こんなことをしても、俺やメルに気付かれやすくなるだけなのに……。

『……真耶』

『メル、敵はどこに居るかわかるか？』

『ううん。ごめん逃げられちゃって……』

仕方がない。一人敵の転生者を滅したばかりなのだ。神でも気が緩むだろう。

『気にすんな。……しょうがない、ここに残っている魔力の残滓のデータを……っ！?』

野次馬が揺れ、一瞬だけ現場を視ることだできた。いや、視てしまったと言った方が正解か……。

『どうしたの、真耶？ ……真耶？』

念話でメルが話しかけてくるが、頭に入っていない。何故こんなことになっている!？

今、野次馬の間から一瞬だけ視てしまった光景が、フラッシュバックする。

土郎さんが大怪我をしていて、救急車に乗せられていた。

土郎さんには悪いが、それは、頭の中でなんとなく考えていたからそれほど驚きはない。

俺の心をここまで揺さぶったのは、その近くで、ブルーシートが掛けられた血だまり。

その近くに落ちていた。俺の今の母親、皐月奈緒美のお気に入りバックが問題なのだ。

そのバックのみなら、まだ否定もできる。しかし、その近くに4年半ほど前に見たことのある。親父、皐月 曹吉(そうきち)のトランクが落ちていたのだ。

そのとき、俺の記憶が昨日のことを思い出させる。

『真耶？』

『なに母さん？』

昨日の朝、母さんはいつもより機嫌がよかった。その理由は……。

『曹吉さんが、明日の午後位に帰ってくるんだって』

そう、約4年間海外に単身赴任していた親父が、久しぶりに帰ってくると言っていた。

『私は迎えに行ってくるけど……真耶はどうする？』

『ん〜、待ってるよ。二人で仲良く帰ってきてきなよ』

そう言ったら照れながら俺をぶっ叩いてきたな。

『それじゃ、ちょっと遠回りして帰ってくるから』

『ほ〜い』

そう言っていた。

そういえば、この道は駅から帰るには遠回りだな。

そんな、現実逃避のようなことを考えていた。

だが、現実が変わらない。いくら凝視しようとも変わらない現実が目の前にあった。

まただ。また俺は大事なときに居なかった。

俺の知らないところで、大切な“もの”は奪われていく……。

『真耶!?!』

「うおっ!?!」

メルの大音量の念話で、泥沼の思考から抜け出す。

てか、いきなり声を出したから、周りの人に注目された。

『なんだよ、メル?』

俺は返答しながら家に向かう道を歩く。

『なんだよ、じゃないよ。さっきから読んでるのに、まったく反応

しないんだもん』

『……わりい。今は家で待機させてもらっ。たぶん、警察からの連絡がくると思うから』

『え? なんぞ?』

メルはこちらの状況が全部わかるわけじゃないのか。

『あの爆発で俺の親は、おそらく死んだだろうからだ』

いや、恐らくなんてのは、たぶん自分の心が認めたくないんだろ
う。

だが、あの場所に敷かれていたブルーシートの面積と、濃厚な血
の匂いから、死んだと断定してもいいだろう。

『え……………？』

メルは、なんとも呆けた声を出した。

『ちよつと、それ本当なの？』

『ああ』

そんな確認すんなよ…………。

『じゃあ…………じゃあなんでそんなに、冷静にしてられんのさ。私に
は判らないけど、親は大切なものじゃないの？』

神さまはどうやって生まれてくるかは知らないけど、いないのか
な？ ただ、大切なものとしての知識はあるのだろう。

『…………はは。冷静でいられると思ったただけだな。偽りの親と言っ
てもいい人だし、それに、これで二度目だからさ、少しは怒れると
は思ってたけど…………』

あー。どんどん俺の心の中から黒いものがせり上がってくる。

これは……。

『ここまで憎むことができるとは、思わなかった……』

……俺が、およそ17年位前に封じ込めたものだ。

『……っ！？』

メルは、俺の言葉を理解したのか、少し声を上げて、黙ってしまった。

『さっきの魔力残滓からサーチを頼むぞ。俺もいろいろと片付いたらすぐに探す』

俺はそう言うと、教えられてもないのに念話を切った。

家に戻ると同時に、家に近所に住んでいる。伯父さんが来て、二人の死を知らせにきた。

その後は、ほとんど伯父さんに任せた。葬式や遺産の管理もお願
いした。

葬式には、自分たちの方が大変なのに、高町さんが来ていた。

数日はドタバタとしていたが、それが終われば静かなものだ。

伯父さんは家に来いと言っていたが、遠慮させてもらった。

俺はその後、学校の終わりなどは、町を探し回った。違う世界は
メルに探してもらっている。

そんな日が数日続いたある日。公園で屈んで泣いているなのはを
見つけてしまった。

それを見た瞬間に、俺の心から吐き出されていた黒いものは消し
飛んだ。

俺は、何をしてんだ……。復讐に意味はないと、“あいつ”に教
えてもらったのに……。また、目の前のものを、自分で壊してしまう
ところだった。

ここ数日、なのはは俺と顔を合わせていない。おそらくは“イイ
コ”をしているのだろう。

俺が、こつやって毎日町を徘徊しているのを知っているから……。その邪魔をしないために……。

俺はゆっくりとなのはへと近づいていく。

「……………なのは」

「ふえ……………?」

俺が声を掛けると、肩がビクンと跳ねて、ゆっくりと俯いていた顔を上げた。

「しんや、おに、いちちゃん?」

「……………ああ」

言葉をつつかえさせながら俺のことを呼ぶ。その、完全な涙声に返事をする。

俺は小さくため息を吐き、自己嫌悪に陥った。

……………小学生間近の子供に、気いつかわせてどうすんだよ。

俺の精神年齢はそろそろ三十路突入だぞ。はあ……………。体に精神が引っ張られていやがる。

とにかく、今は目の前の困った顔をしてる、妹分のお姫様を安心させてやらないとな。

「ほら、んなとこで泣いてないで、帰るぞ」

俺は手を差し出す。

なのはは、その手を少し見て、俺の顔を見て、また手に視線を戻す。そして、ようやく手を取った。その手を引っ張り立たせてやる。

そして、俺は膝を折りなのはと目線を合わせて喋り掛ける。

「なのは、もう俺のやることは終わった。明日からまた相手してやるよ」

「うそなの。いましんやおにいちゃんはいへんだって、わかるの」

まあ、確かに。実際のところ何も終わっちゃねえ。けど、メルがまだ見つけれねえものを俺が見つけれられるわけがねえ、なら。

「大丈夫だ。お前の面倒位なら、その片手間でみれるっつ」

「で、でも」

何かに縋るような、必死な声。きつと、一度でも甘えてしまったら、もう戻れないと思っっているのだろう。

俺が、支えになると、もうそれに頼ってしまうと。

それでいいんだ。原作で、ほんのたかが9歳が、あんなことを背負うことはないんだ。

だから……。

「お前の我が儘位、俺でも聴ける」

俺は、こいつの……。

俺は、なのはの顔を両手で包むようにして挟み。俺と目を合わせる。

「お前は、まだ誰かに甘えてもいいんだよ。その相手は、俺でもいいだろ？」

盾になり、なのはを、護る。

俺の言葉を聞き、なのはの眼に、涙がまた溜まっていく。

「ふえ……ぐす」

「おいおい、なんで泣くんだよ……」

「だって、なのは、ずっとひとりで……」

ようやく、弱みを見せてくれたな。

「寂しかったんだよな。……ごめん」

涙が零れる前に胸に頭を抱きしめる。

「ふえええええええん！」

そのまま、なのはは泣き出した。

おそらく、ここ数日で溜まったものすべては無理でも、少しでも

発散できればそれでいいだろう。

さて、何時泣き止むやら……。

「ハア）……」

これで何度目になるだろうか。

なのははその後、30分ほど泣き通し、泣き疲れて寝てしまった。今は、俺の背中で気持ち良さげに寝息を立てている。

この後が憂鬱だ。

はつきり言って、恭也さんは苦手だ。

二次創作とかでは、シスコンの代名詞としてその名を轟かせている彼が、この状況でどんな反応をするのだろうか。

いや、今は『復讐』に憑りつかれてそれどころじゃないか。とりあえず、恭也さんへお灸を据えに行くか。

ピンポーン

伝統？のインターフォンの音を響かせ、高町家に来客を知らせる音が鳴る。

「はい」

いつもより幾分か落ちたトーンの声で出てきたのは、意外にも美由紀さんだった。

「あ、美由紀さん」

「あれ、真耶君、どうしたの？」

その眼鏡越しの瞳に、俺を捉えて美由紀さんは疑問の声を出した。

「いや、ちょっと……」

と、言いながら、俺は背中であっているのはを見せる。

「わっ、なのはどうしたの？」

「寝ちゃったらしくて、お届けに参りましたよ」

「そうなんだ、ありがとう」

そのやりとりをしている内に、美由紀さんになのはを渡す。

そして、俺は美由紀さんに向き直り、聞くべきことを聞く。

「あの、美由紀さん」

「ん、なに？」

美由紀さんは、なのはを背負い直しながらこちらを向く。

「恭也さんは、今日も……？」

「……うん、そうみたいだよ」

俺の問いに、美由紀さんは庭の向こう、道場に眼を向ける。

「そうですか。あ、俺はこれで」

「うん。ありがとね」

「いえ」

美由紀さんが戸を閉めてから、俺も踵を返して歩きだす。

そこからは絶え間なく音が聞こえる。

手を伸ばし、その戸を開ける。

「ふっ！はあっ　　！」

そこには、なにかに憑りつかれた様に、ただ木刀を振り続ける恭

也さんの姿があった。

「はあっ！……っ！？」

俺をのことをその眼に捉えて、ようやく気付いたようだ。

確かに、俺も気配を消していたが、恭也さんが気付かないほどまで消してはいない。

つまりは、恭也さんはおそらく、鍛錬のし過ぎで、精神が参ってきているんだ。

「……真耶、なにか用か」

恭也さんは、俺だと判るとすぐに向き直り構え、また鍛錬に戻る。うとしていて。

もともと、なにも聞く気などないかのよう。

しかし、俺の次の言葉で、その動きは止まる。

「……はっ。情けないな」

止まらざる負えない。

「……なんだと？」

恭也さんは構えを解き、こちらに殺気の籠った視線をよこしてくる。

その声も、さっきよりさらに低く、腹に響くような声だった。

「情けないなど、言ったんだ。俺も、あんたも」

その眼を、俺は見返す。
憐みの籠った目で。

俺は、相手に聞こえる声量で、皮肉ったように喋り掛ける。

「大切なものを失い、その復讐のために時間を費やし、周りを顧みず、寄せ付けず……」

言葉を紡ぎながら、木刀の入った筒へと歩を進める。

「……れ」

「復讐の相手のことに躍起になり、周囲の人たちを傷つける」

その筒の中の一本を引き抜く。

「……まれっ」

「護ると誓ったのに、その護るべき相手を傷つけ……」

恭也さんの前に立ち、木刀の切っ先を向ける。

「……れっ」

「すべてが手遅れの時になって、ようやく気付き……悔いることになる」

そこから、初めて俺の殺気を飛ばす。

「あんたは、周りが見えていない……いつか、全部なくすぞ？」

「黙れっつっ!!」

恭也さんが吼える。いや、この場合は吠えたのか。

「お前にわかるかっ!!」

こちらを射殺さんばかりの、常人が正面から受ければ卒倒するよ
うな視線を向けてくる。

しかし、俺にはそれが、不安がっている子供の癩癩にしか見えな
い。

「父さんがいない家を守るのは、今、家の中で一人の男である俺
だけだっつ!! 家族を背負う、護らなくてはいけない立場にある、
俺の重圧がっつ!!」

それは、暗に、家族を護るものを亡くした奴は、気楽でいいなと
言っているのだろう。

「……はっ、だから如何した」

いつの間にか、俺の口には嘲りの笑みが張り付いていた。

「……護りたいのなら、なぜ近くに居ない」

自分でも驚くほどの低い声が出た。

「……お前は、護るためにこんなことをしている」

すでに、俺の口元から笑みは消えていた。

「……なのに、何故なのは泣いていた。それは、俺も、あんたも、こんな復讐なんてふざけたことを考えていたからだろうが」

木刀で居合の構えをとる。

「それが、まだわからないのなら……」

そして、俺はこの世界での、マホウの言葉を突きつける。

「俺が……。 “ お話 ” をしてやるよ」

???? 転生者と御神の剣士の闘争が始まる。

第4話 死？おわり？（後書き）

急展開すぎただろうか？

…これが自分の限界です。orz

次回は恭也との戦闘です。

それでは次回 剣舞？いあい？

その力は戦うために

第5話 剣舞？いあい（前書き）

書けたので投下。

サブタイとそんなに合っていないです。

思いつかなかったんです…。

ま、とりあえずいつも通り生温い眼で読んでやってください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

2011年/3月/17日・編集

第5話 剣舞？いあい

Side - 恭也

そいつと初めて話したのは、約7年ほど前だった。

『……………初めまして』

そいつは、歳に似合わないほど礼儀正しく……………。

『……………あんたが恭也さん？』

そいつは、何故か最初に会った時から俺のことを毛嫌い……………
……………。

『……………どうも。……………なのはは？』

そいつは、いつもなのはを気にかけて……………。

『……………鍛錬？ やめときます。俺なんかやれないですよ』

そいつは、何故か俺にはなかなか気配を掴ませず……………。

そして……。

『真耶くんは、恐らく僕よりも強いかもね……』

『……笑止』

そいつは、俺より強く、父さんに負けを認めさせるほどに強い。

そいつの名は……。

『……皐月 真耶……です』

皐月 真耶。

そいつは、今、俺の目の前で木刀を持ち、居合の構えで俺と相対している。

俺は、両の木刀に力を入れる。
手かなりの汗をかいているのがわかる。

原因は、奴の殺気。

歳は俺よりも六つ下で、身長も俺の方が高い筈なのに、真耶の放つ殺気と闘気で何倍にも大きく感じる。

いったいどんな鍛え方をすればこれほどまでになるのか。

この歳でどれほど自分を痛めつけたのか、わからない。だが、ここは退けない、退くわけにはいかない。

俺は再び二刀を構える。

俺たちの、目の前の“敵”を射殺すように向けられた視線が、交差する。

「……………」

「……………」

俺たちは動かない、動けない。

こいつを相手に油断をしてはならない、気を抜けば、一瞬後には俺は地をなめることになるだろう。

ならば……………。

「ふっ
「！」

こちらから切り込む！

s i d e . e n d

「ふっ
」!

短く息を吐き、恭也さんが切り込んでくる。
右の木刀が、俺の頭に向かって真っすぐ振り下ろされる。

「……はあっ!」

短い気合とともに、抜刀術で恭也さんの木刀の鎗に当てて軌道を逸らす。

そこから、逆袈裟に切り上げる。

恭也さんは左の木刀で受ける。

さらに俺は左から右へと横に薙ぐ。

恭也さんはそれを受け止め、その勢いを利用して跳び退る。

また睨みあう。

今度は、俺は脇構えで備える。

体格や基礎体力の差で、俺は持久戦ではおそらく勝てない……だが。

「はあっ!」

恭也さんが俺の動きに怯んでいるうちに決める!

思いつきり踏み切り、木刀の間合いのさらに内側へ踏み込む。
そして、右手で逆手に持った木刀の柄頭で突く。

「っ!?!」

俺が脇構えで構えたのは、この手を恭也さんの視界から外すため。

そして、木刀を持っているから切りに来る。

……これは皆が考える常識だろう。当然だ、そちらの方がリーチが長く、そう教えられたのだから。だが、その認識が今の俺の攻撃への対処のための思考を遅らせる。

恭也さんはそれを避ける。そして、俺は逆手の木刀で薙ぐ。

恭也さんもそれに合わせるように右木刀を振る。

木刀がかち合い???

????俺の体に衝撃がくる。

「……っ!?!」

その場を飛び退き、木刀を正眼に構え思考する。

おそらく今の衝撃は、御神流の『徹』によるものだろう。やつか
いだな。

いくら俺は鍛えてるといっても、今の筋力は精々中学生位だろう。
魔力で強化するのも考えられるが出力を間違えると色々と面倒だ。

このまま打ち合えば『徹』によるダメージの蓄積で、先に打っ倒
れるのは俺の方だ。

面倒なことこの上ないが、打ち合わないように戦うしかないか。

俺が思考から戻ると、恭也さんの雰囲気が変わった。

たぶん“あれ”を使うのだろう。

反則くさいがしょうがない、“眼”の構成を変化させ『写輪眼』
を発動。

「はっ
「！」

その瞬間、恭也さんは“常人”の眼からは消えるような速度で動
き出した。

御神流の『神速』だろう……。

確か、視覚に神経を注ぎ込み脳が他の情報を遮断して、世界がモ
ノクロに見えるんだっただか？

好都合、写輪眼が気付かれなくなる。

俺の眼は恭也さんの姿を捉えている。右からの右木刀の袈裟切り。

俺はそれを防ぐが衝撃がこない。おそらくこれで決めるつもりだったのだろう。だが、甘い。

「なっ!？」

俺が『神速』を見切ったのが驚きだったのか、恭也さんが声を漏らす。

「……ふうっ! はあっ!」

その隙をつき木刀を弾き袈裟がけに切り上げる。が、思考が回復したのか、恭也さんの左木刀で受けられる。

恭也さんが間合いを取ろうとするが…、そんなことはさせない。『神速』を破ったんだ……。次にどんな奥義が飛び出してくるかわからない。

そうなればかなり拙い状況に持っていかれる。その前に潰す!

間合いを詰め右から横に薙ぐ、それに合わせるように左木刀で防がれる。

左に流れる体を、左足を思いっきり踏ん張ることで制御し、振り抜いた木刀を左から無理やり右に薙ぐ。

それを右木刀で防がれるがこれで隙が出来た筈だ。

薙いだ勢いをそのままに、回転して左手で木刀の刀身を掴み、勢いをそのままに居合いで振り抜く。

その時に、出来るだけ弱く強化をかける。

俺の木刀が、恭也さんのギリギリ戻した二刀に当たり防がれ

「……………つぐあ!?!」

?????ずに恭也さんの木刀を粉碎して吹き飛ばした。そのせいでこっちの木刀も罅割れたがまだ繋がっている。

限界まで上げた遠心力と、微妙に多すぎた魔力で吹っ飛んだ恭也さんの喉に木刀を突きつけた。……………その時。

「え……………と、二人ともなにやってんの?」

道場の戸が開かれ美由紀さんが顔を出した。これだけ派手にやったんだ、音が聞こえても可笑しくないだろう。

俺は持っている木刀を筒にしまい。恭也さんの近くを通りながら小声でしゃべる。

「本当に大切なのなら傍にいるべきだろ……………」

一方的にそう告げ、未だ混乱中の美由紀さんが居る入り口へと歩く。

恭也さんは未だ倒れた状態????大の字????で天井を見ている。

俺は美由紀さんの横をすり抜け、靴を履き外に出ながら。

「それじゃ、お騒がせしました」

「……へ？ あ、はい」

美由紀さんに声を掛けたのだが思考が働いていないのか、生返事が返ってきた。

それを気にせず歩いて隣の自宅へと帰る。

「……はあ……。……やっちまった」

玄関を閉めたところでさっきの自分に自己嫌悪した。

いや、確かに俺は前世のときにアニメを見たとき、まるで自分を見てみたいで嫌だったんだが、別にここまでする気は無かったんだがな……。

ま、まあ、今頃悔いてもしかたない。成るようにしか成らんだろ
う。……たぶん。

はあ、こんなんばっかだな俺。

とりあえず今は腹が減ったから飯を作るとしよう。そうだし
よう。

飯を食い終わり風呂に入りベットに突っ込み考えを巡らせる。

明日は学校の帰りにでも病院にでも寄って、“あれ”をやってみよう。

成功するかわからないが、やらないよりはマシだろう。

それにしても、ここ数日保留にしていたことだが……。いったい何のために敵はあそこで爆発を残したのだろうか、あんなワザとらしく魔力の残滓を残してくなんて……。捜してくれ、見つけてくれと言ってるようなものだ……。

まさか。

今予想した通りだとしたら、挑発されている？

俺の両親と士郎さん、会ったら立ち話くらいするだろう。しかし、その両親が“誰の”両親かまでわかるのか？

わかるのだとしたら、明らかに俺への挑発としか考えられない。

舐め腐りおって。

絶対に（メルが）見つけて10分の9殺しにして、二人の墓の前で懺悔させて高町兄妹と土郎さんに放り投げた後、滅してやる。

また、黒い思考が漏れてきたな。

ま、気軽に殺っていくか……。

なに、字が違っつて？合ってるよ、どっからどう見ても合っつて。つて。

「はあ〜」

なんか、これからを考えると自然とため息が漏れる。明日から恭也さんと顔合わせたらどうしたらいいんだろうか……。

ほんとに、成るようにしか成らないんだろうな。

「……………はあ〜」

明日はいい日でありますようにと願いたい。

……………切実に。

第5話 剣舞？いあい（後書き）

まず最初に、恭也ファンのみなさん申し訳ありません。

なんか本編での恭也がやけに弱く書けてしまいました。

恭也はこんな弱くない！

という反論は甘んじて受けましょう。

しかし、それと共に理解してほしいと思います。

これが作者の実力です…。

それでは、次回 回復？にがて？

その力は戦うために…。

第6話 回復？にがて？（前書き）

書けたので更新です。

今回は、特筆すべきことはないです。

いつもどおり生温く見てってください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第6話 回復？にがて？

何故か恭也さんとバトってしまった次の日…。

学校で恭介に、

「…なんか心が和らぐことでもあったのか、表情にでてるぜ？」

と、出会いがしらに言われた。

こいつとは何故か5年間とも同じクラスだ。その性がこいつは何故か俺の顔色を読める。俺はよめないんだがな…。

恭介は俺の両親が死んだことを知っても、全く態度を変えずに接してきてくれた。こいつの精神年齢はどんだけ高いんだか。

「…別に、特に変わらねえよ」

とりあえず素っ気なく返す。すると恭介は嬉しそうに笑いながら。

「そうかい…」

と呟いて俺の隣の席に座った。
たぶん見抜かれたんだろう。ほんと、何者だよあいつは。

授業や昼休みもこの5年間変わらない行動で適当に過ごす。

そして放課後…。

俺は速攻で鞆を持ち恭介に声をかけて走って学校から出る。

向かう場所は海鳴大学病院。数日前の爆発で巻き込まれた土郎さんに会いに行く。

カウンターで部屋を確認する。

そして、土郎さんが未だ眠る病室の前に着く。

少しそこで耳を澄ます。

「……………」

どうやら美由紀さんはいないみたいだな。

それを確認してドアを開く。

そこには頭にも包帯を巻いた土郎さんが静かに眠っていた。

そこに近づき直視の魔眼で視る。すると普通の人よりも濃い“線”が視える。

やはり死にかけたからかな。

そう思い直視の魔眼を“閉じる”。

そして、左手を土郎さんの身体の上にかざし集中する。

俺は攻撃用のものとかなら普通に構成変化できるが、回復系などは変化させるのが苦手だ。

しかも、今から変化させるのはあるゲームで、神の左手的なことを言われていた。

だから、かなり集中力のいる作業だ。

今までのこれの成功率はいい日は三割位だ。

まあ、失敗しても数時間俺の左腕の機能が停止するだけだから、土郎さんへの心配はしなくても大丈夫だろう。

「…ふう」

息を静かに吐き、更に集中。

眼を閉じて自分の脳裏に今から変化させる“左手”をイメージする。

「……………」

少しでも成功率をあげるためにさらにイメージを濃くする。

今から俺の左手は、それに成るためだけにある。
そう自己暗示をかける。

さらに集中…。

「…はあっ」

息を吐き、左手の構成を変化させる。

“左手”に違和感のはしり眼を開けそれを確認する。

「…ふゝ、成功」

そこには、肌が白く変色し、手首に拘束具が付いた、『アブラクサス』の左腕が存在していた。

本当は『デミウルゴス』の左腕にするつもりだったが、少しでも成功率を上げるために、難易度の低いこちらにした。

変化したのを確認し、左手に神経を注ぐ。それにより左手は発光して土郎さんの傷を癒していく。

しかし、やり過ぎも医者が不審がるだろう。だから魔力を調整し出来るだけ少しずつ回復させていく。

「…ふう。今日はこんなもんか」

これから通うことになるだろう。傷から見て五日、俺の能力の成功率を加えると約12日位か、長い…。

「ま、愚痴つても仕方ない。……さて、帰るか」

その日は帰り、なのはの相手とかをして過ごした。

それから六日後、土郎さんの意識が戻ったらしく、なのはも喜んでいた。

次の日からは、土郎さんが寝ている間にやり、気付かれることなく土郎さんは退院。

医者からは驚異的な快復力だと言われていた。

ま、これで原作前にやることは修業くらいか？

あれ？なにか忘れているような……む、まあいいか。

ピンポン

誰か来たようだ。

ドアを開けると……。

「ちよつと今いいかい？真耶君」

土郎さんだった。なんだろうか。

……まさか、気付かれていますワザと見逃された？

「…はい」

居間に移動して向かい合う。そして土郎さんは早速話を開始した。

「真耶君、君に聞きたいことがある…」

「…なんででしょうか？」

とりあえずは冷静沈着冷静に答える。

「…ダメだ、思考が全く冷静じゃない。なんで冷静一回言っただよ。」

土郎さんは少し言いずらそうにしていたが、少しためを作り口を開く。

「君の、あの左手は一体なんだ？」

ハイ、軽く気付かれましたね。

まあ、いいかな。自分になにかされたんじゃないかとか気にしてるだろうし。

「あれは、俺の特殊な技能ですね」

「技能？」

「はい。俺だけが使える…ね」

とりあえず喋るのは能力だけでいいだろう。いきなり転生だ、オーデインだとか言ってもただの気違いだしな。

「俺の能力はただ一つ、体の一部を異能を宿すモノに構成を変化させる、と云うものです」

士郎さんは少し考えて質問をしてきた。

「その異能というのは…」

「はい、士郎さんを治療するために、この左手を変化させて、傷を癒す左手にしたんです」

俺は解説しながら、左手を俺の顔の前でひらひら見せびらかすように振る。

「なるほど、だから僕の傷があんな短時間で治ったのか」

「意外と信じるのが早いですね」

士郎さんに疑問をぶつける。

「いや、もう自分の体で体感してしまったんだ。もう信じるしかないだろう」

「…そうですか、じゃあこの能力ちからのことは他言無用ちからをお願いします」

最後にこれだけは守ってもらわなくては。

「そうだね、そっちの方がいいだろう」

士郎さんも納得してくれたところで俺たちは立ち上がる。

そして士郎さんは、

「お父さんとお母さんに挨拶を、いいかい？」

辛そうな顔でそう言ってきた。

「…どうぞ、お願いします」

この問いへの返答は是しかない。

「それじゃ、悪いね夜中にお邪魔して」

「いえ、あれも大切な話ですから」

俺と士郎さんは今玄関で話している。

「朝や晩御飯のときは好きなきにきていいからね」

「…はい、ありがとうございます」

ほんと、高町家はいい人揃いだ……あ。

「あ〜」

俺は特に意味もなく少し声を小さくして聞いてみる。

「ん？なんだい？」

「そのですね、恭也さんは今どうしてましたか？」

これが気になった。あれから恭也さんとの接触はない。なのははいつも俺の家に来るし、俺の行く用事もなかったし、向こうは向こうで大変そうだったからな。

「恭也かい？今少し“話”をしてきたから、道場で倒れてるかもしれないよ？」

あゝ…恭也ザマア。

たぶん美由紀さんあたりに話を聞いたんだろう。土郎さんの笑顔の裏に黒いモノが視える…。

「ご愁傷様だね、ゆっくり逝け。」

「…そうですか。あ、お停めしてすみません」

「ん、それじゃお休み」

「はい。おやすみなさい」

目の前の扉が閉じる。

「さて、これからは転生者の相手と修業で原作まで潰すか…」

そう呟きながら風呂へと歩いていく。

あ、思い出した。すずかちゃんとバーニングとの友情イベントが
来年あるんだ。

しかも来年、俺はまだ小6だからそのイベントを見れる。ラッキ
ーだね。

第6話 回復？にがて？（後書き）

はい、最後まで読んでいただきありがとうございます。

真耶は回復系の構成変化は苦手です。

基本戦闘用の修業ばっかですしね。

さて、次回で前振りは終了し次々回から本番がスタートです。待っててくれる方、お待ち下さい。

それでは、次回 第7話 友達？たいせつなもの？

その力は、戦うために…。

第7話 友達？たいせつなもの？（前書き）

書けたので投下。

少し短いですが。いつも通り生温く見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第7話 友達？たいせつなもの？

「トレスオン
投影開始」

変化させた弓兵の左腕の魔術回路に魔力を叩き込む。

「????? フリーズ・アウト ソードパレル・フルオープン
停止解凍 全投影連続層射！」

「うふっ!?!」

ありとあらゆるただの名剣名槍魔剣魔槍斧などにより、目の前の男は針鼠になり黒い粒子となって消えていく。

『メル、終わったぞ』

『お疲れ様、転移させるね』

はい、いきなり戦闘でした。いやはや、赤いアンチクシヨウの左腕は使い勝手がいいけど、余り深く使くと俺の記憶も持っていかれ

るから怖いんだよね。

まあ、士郎さんが大怪我してから出てきた転生者は、今のを入れて二人だし、それほど強くないから大丈夫だけどね。

さて、今俺は小6です。なのはやはりと言っか、なんと言っか聖祥に入学しましたよ。

なのはは家ではみんなと普通に接してる。

これは無茶するのは止められないかな？

やはり染みついた“大スジ”は変わらないのか…。

とりあえず転移魔法陣で家に戻り、もう夜中だったのでさっさと寝た。

次の日

「あゝ、ねむ…」

時計を確認するとちょうど6時だった。

昨日は、いや今日の深夜は5時間しか寝てないから眠い。

眠い目を擦りながら制服に着替える。

一階に下りて洗面所で顔を洗い歯を磨く。そして、居間にある仏壇に挨拶をする。

「…おはよ母さん、父さん」

その後は自分で料理をして朝飯を食う。

一応高町家でとらせてくれるとも言ってくれるけど、流石に毎日
は、と言っことで週に2回朝晩の飯を食べに行かせてもらって、あ
とは自分で作っている。

「…ごちそうさん」

飯が終わり食器を洗い掃除、洗濯を終わらせる。

そうしてるといい時間になったので家を出る。

「いってきま〜す」

一人暮らしでもこの言葉は大切だと俺は思う。

俺は一人で歩き、ちょうど来たバスに乗り学校へ。おそろくなの
ははもうちょっと掛かるだろう。

目的のところに着いたので降りる。てかこの時間はやっぱり空い
てるな。

そのまま校門に歩いていく。

「…ふわあ〜あ」

「なんだ、朝からでかい欠伸だな…」

「うめっ？」

後ろから声が聞こえたので向いてみると…、見事6年間同じクラスになった恭介と…。

「……………」

髪に鈴の飾りを付けた、恭介の妹の棗鈴が眠そうに居た。

「恭介、今日は早いな」

「なに、俺も鈴も早めに起きちまってやることもないから…うして学校に来たんだ」

俺の質問に、相変わらず飄々と答えてくる。

「……………」

鈴はまだ眠いのか眼を擦っている。

「おい、あんまり眼は擦らない方がいいぞ？」

「っ!？」

俺が注意すると、何故か跳び退って恭介の背中に隠れてしまった。まだ俺には懐いてくれないようだ。

「ほら鈴、そんな反応したらダメだぞ」

「ウツサイ!」

鈴はそういつと校門に走って行ってしまった。

「ヤレヤレ、相変わらず俺のことが嫌いらしいな」

「…そうじゃないんだがな。まだお前に慣れてないだけだ」

「そうか？俺には避けられるように見えるんだが…」

はつきり言って少し寂しい。

「ま、その内話すことくらいはできるだろう」

「そうなれば良いんだがな」

そんな話をしながら俺たちも校門に歩きだす。

相変わらず俺には何の足しにもならん午前の授業が終わり、昼休み。

俺は相変わらずいつもの場所で結界を張って左手に集中する。

二年後の春には『デミウルゴスの左手』に完全に变化させたい。

できればアリシアに、腐ってなければプレシアも一緒に幸せにな
ってほしい。

子供の心で親が死んでどれだけ傷つくかは理解してるから…。

これは俺のエゴなのだろう。でも、それでもやっぱり救いたいから。

その考えを一度頭から出し左手に集中。

だんだん左手が白く変化していく。

よし！これで成k（パシンツ！）うえあ？

今の音で集中力が切れて左腕の機能が停止した。

「…はあ」

結界を解き左腕をぶら下げて表を見ると。

「いたい？けどとられちゃったひとのこころはもつといたいんだよ。」

その言葉の後うちの妹分と金髪の、おそらくバーニング（笑）だろう。

その二人が取っ組み合いの喧嘩を شدした。

てか今日だったのか…。

とりあえず横の方で困っている。おそらくすずかであろう、少しウェーブがかった綺麗な紫色の髪の子に話しかけてみた。

「ね、その子や」

「は、はい？」

む、急に声を掛けたせいでちょっと驚かせてしまったか…、今度から気を付けよう。

「どうしてこんなことになってるのか教えてくれないかな？」

自分の中ではできるだけやさしい声を出す。
その甲斐あつてか教えてくれた。

まあ原作通りでした。

さて、ここで俺が停めてしまうのも在りなのだが…やはりここは
すずかちゃんに頑張ってもらおう。

「……うん。じゃあ君が停めてみようか」

「…え？」

ふむ、やはり理解できてないようだな。

「君の物がとられたんだよね？」

「は、はい…」

「じゃやっぱり君が停めよ」

「で、でもどうやって」

一応やる気にはなってくれたみたいだな。

「大きな声でやめろ！、て言うだけでいんだよ」

「でも、わたし…」

やっぱり引っ込み思案だね。しっかりと背を押してやんないとな。

「がんばって勇気を出してみな。君には、しっかりとできる力があるんだよ」

「…は、はい！」

少し緊張した面持ちだが大丈夫だろう。すずかちゃんは二人の方に行った。

それを確認して俺はさっさと退散することにした。

「や、やめてー！ーっ！ーっ！」

扉を潜った時にちょうどその声が聞こえてきた。

やれたじゃないか…。

何故かちよつと嬉しくなつて階段を下りていく。

この喜びは妹分に友達ができるからか、はたまた原作までの時間のなさが実感できたからかはわからない。

けど…。

「両方でいいかな」

そんな考えが浮かぶ。

どちらも大切なことだ。

これでなのはに大切なものができた。それはとってもいいことだ。

俺はただあいつとアイツの大切なものを護ればいい。

しっかりアイツの盾になってやんなきゃな。

そして、二年後の春先。

『誰か、助けて……』

運命を加速させる声が響く…。

第7話 友達？たいせつなもの？（後書き）

原作前ラストでした。

やはりオリジナルの話を書くとなると難しいですね。

次から原作介入なのですが…。もう一回原作を見直してきます。

ちょっと時間が掛かるかも知れませんが。

やはり生温い眼で眺めていてください。

それでは、次回 第8話 青い石？まほうしょうじょ？

その力は戦うために…。

第8話 青い石？まほつしょうじょ？（前書き）

テンションが上がって一気に書いてしまったので投下。

む、なのはの口調とかどうなんでしょうか、自分で書いてると判りませんね…。

とにかく、いつも通り生温く見守ってください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第8話 青イ石？まほづしよじよ？

木々がざわめく。

空や景色、すべての色が変色している空間で民族風の服を着た金髪の少年と、水面から少し浮いている黒い“生物”が相對している。

これは、おそらく夢なのだろう。
ボンヤリとした頭の中でそう結論付ける。

そう思考をしていたら黒い“生物”が…、いや、あれを生物だとは言えないな。黒いドロドロな塊が金髪の少年を弾き飛ばした。

そして、黒いモノはどこかにきえ、少年は魔力温存のためにイタチ？へと姿をかえる。

その傍に真紅の宝石が落ちる…。

「……今日か」

目が覚めての第一声が出る。ついにこの時が来た。

なのはが産まれて9年目の春。つまりはジュエルシードと淫獣の到着だ。

とりあえず介入は今日からしちまうか、イレギュラーがないとも言えないからな。

そう考えながら時計を見ると、いつの間にか目覚ましが止まっていて、鳴る時間から40分ほど経過していた。

「まずい、もうやられてるな……」

なにが拙いかは先ずは起きてからにしよう。

あれから約2年、人生二回目の中学校に通うため制服に着替えて一階へ降りる。

いつも通り顔を洗い台所に行く。

ここでいつも料理してるのは俺のだが、そこにはすでにエプロンを着けた、俺より背の低い高校の制服を着た少女が料理をしていた。

「おはよう。レンさん」

「あ、おはような。何や今日は遅かったな」

「ああ、何故か今日に限って目覚ましを止めてしまったみたいだね…」

「そか、あ、朝ご飯もうちょいで出来るから待っててや？」

それに返事をしつつ庭を見るとすでに洗濯物が干されていた…。この分だと掃除も終わってるか。

まあ、何故レンさん??? 鳳蓮飛さん??? が居るかというところ、俺の面倒みてくれていた伯父さんの娘がレンさんで、その夫婦が海外に仕事があるとかでレンさんを俺の家に置いて行っちゃった訳だ。

…いくら俺が使つのが中国武術でも、こんな繋がりを持たせるってのはどうなのさ。

まあいいや、この人が来てくれたおかげで色々と楽になったしね。

「それじゃ、行ってきます」

「ほい、行ってきますや」

レンさんとは道が違ったため途中で別れる。

そのまま歩き中学へ。

校門を抜けて昇降口までゆっくり歩いていると、俺に声が掛かる。

「よ、真耶！」

「……………おはよう」

棗兄妹だ。聖祥は中学から女子中になり、俺や恭介たちは他の中学に行き、鈴も恭介達についてきたのだ。

そして、何故か一年のときも今年も恭介とは同じクラスだ。なんの運命だよ。

「おう、おはよ」

鈴もようやく挨拶とかをしてくれるようになった。そんな妹の成長が嬉しかったのだろう、初めて鈴から俺に挨拶したとき恭介は鈴に抱き着こうとして蹴り飛ばされていた。

それにしてもいい蹴りだった。

三人で適当に話しながら歩き校舎に入る。

途中で鈴と別れ恭介と同じ教室へ…。

「よく俺とお前はこんなに同じクラスでいれるよな」

俺が軽く疑問になっていたことを呟く。

「それはアレだ…」

どれだ…。

恭介は少し溜めをつくり口を開いた。

「運命の赤い七ゴハツ!?!?!」

変なことを言いそうになっていたので殴っておく。

てか、今の言葉を聞いた数名が黄色い声を上げている。

ま、女子だけが…。男子が黄色い声出したら気もいわ。

そんな朝のざわめきも、ほどほどの処で担任が教室に入ってきて
終わりを迎える。

相変わらず屋上で見つからない位置で結界を張り修業。

今日は『白眼』を使い遠くを見てみる。

公園のちよつとした森の中、淫獣（仮）もといイタチモードのユニ・スクライヤを発見、その後ジュエルシードの暴走体を捜すが姿を見せない。

色々な所を見てみたが消息を掴むことが出来ぬまま予鈴になる。

とりあえず早めに見つけて警戒はしときたいのだが仕方ないか。

一応介入は今晩からかな、正体を晒すと後でなのはに何か言われそうだから、『写輪眼』の幻術で姿を変えておくか。

授業中はずっとそんな感じのことを考えて寝たふりをしている。

そして放課後、恭介と二、三話して別れた後、少し急ぎ足で森の方へ。

違う方がなんか騒がしいが、とりあえず、少し開けた場所に打っ倒れているイタチに近寄りしゃがみ眼を見る。

「……………」

二人、いや、今は一人と一匹が見詰め合った状態で固まっているとは、他から見たらシニールだろう。

でも…。

『あの、助けて』

さっきから頭の中に声が響きまくってウゼエ。

もうここに放置するか？いや、結局なのはが連れてくから意味ないか。…分投げるか。

「…あつ！いたつ！」

そんなことを考えていると、林をガサガサ揺らす音と共にうちの妹分が飛び出してきた。

「つて、なんで真耶おにいちゃんが!？」

「偶然だ…」

「そか。そうだそのこ…」

こつ言っしかねえな。

なのは俺の近くに落ちてるユーノを見ている。

「どうかしたか？」

「う、ううん。何でもないの」

知っているがとりあえず聞いてみたら、そんな答えが返ってきた。なんでもある言い方だな…。

そんな話をしていると、なのはの後ろの林がまた揺れて、二人の

少女が出てくる。

「ちよつとなのは！」

「なのはちゃん、いきなりどうし…真耶さん？」

「へ？あ、ほんとだ」

すずかちゃんとアリサだ。

「よお二人さん。とりあえずこの辺で獣医しらねえか？」

その二人にユーノを抱き上げ見せてやる。

「あ、ひどい怪我」

「獣医だったら、確かこつちです」

すずかちゃんが先導するように前を走る。俺たちはそれに着いていき、着いたのは『榎原動物病院』だった。

榎原さんの話を聞き、なのは達は急ぎ塾に走って行った。

「それじゃ榎原さん、お願いします」

「はい、それじゃあね」

槇原さんに別れを告げ帰路に付く。

そして、今晚のことを考え心の中で謝っておく。
それはもうレナ並みに謝りますよ？

夕飯をレンさんと高町家ととり家に帰る。

夕飯のときになのはが士郎さんと桃子さんにフェレットを飼いた
いと言っていたな。

そういえばフェレットっていう設定だったな。

ま、時が来るまでゆっくりしていよう。

.....

.....

...

ちびい、ゆっくりしすぎた。

いつの間にかソファで寝てしまっていて、魔力反応がして跳び

起きたのだ。

…てか、俺はユーノの念話で起きないほど深く寝てたのか。

「…早速しくった」

そう呟きながらも足を動かし続けて走る。

その速度は足を、青い槍兵の足に変化させているからボルトよりも速い。

そして、結界が張られた。

もう一つ角を曲がると動物病院というところで、足の変化を解き、『写輪眼』を発動し幻術の用意をしておく。

ゆっくり角を曲がると…。

「セーリット・アーツプ！」

聖祥の制服をもとにしたバリアジャケットを着た魔砲少女がいた。

間違えた、魔法少女が居た。

杖は紅い球を囲うように金の輪のようなものが付き、そこから白い棒が出ている。

「ふえ、ふええー！？うそっ！？」

なんか本人が一番びっくりしてるな。

なんか色々やっってる間に、ジュエルシールドの暴走体がなのはに迫る。

が…。

《Protection》

そう女性の声が聞こえ、なのはの前になのはの魔力光であるピンク色の障壁が展開されて発光。

暴走体は吹き飛び電柱に衝突し打ったおした。

「お〜お〜派手にやるな〜」

俺はそう言いながらなのはに近づいていく。

「ふえ？…真耶、おにいちゃん？」

……………あれ???

「…お、おい」

「え、え〜となに？」

「まんま俺に見えるのか？」

「ふえ？どついついと？」

一応聞いたがやはりか、幻術が効いてない。まさか俺って幻術も

苦手か…、しつかり修業しとくんだった。

「……」

「え、えくと真耶おにいちゃん？」

落ち込んでいるとなのはが声を掛けてきたのでそちらを見ると、ちよつどこちらに突っ込んでくるところだった。

「…退け、なのは」

「ふえ!?!」

俺はなのはの腕を強引に引っ張り、右腕を前にかざした。

そして、右腕を『変化した右腕』に変化させて受け止めた。

「ふんっ!」

ゴリッ、と靴裏が少し擦れたが問題ないな。

それにしても、この暴走体はさっきのプロテクションで碎けないわ、右腕で掴めるわ。

完全に実態が出来るほど思念体が固定されてるな。

原作よりもちつとだけ強力だな。

「なのは、よく聞け」

俺は暴走体を押さえながら、後ろに居るなのはに声を掛ける。

「俺がこれを吹き飛ばすから、そのフェレットモードキに教わって封印しろ」

「え、そんなの判んなよ〜！」

「だから、教わりながらでいいんだ、って！」

気合を入れて少し弾き、その隙に腕を振りかぶり思いっきり殴りつける。

「ほれ、早くしろ」

「う、うん」

ユーノにアニメ通りに教えてもらっている。

そして、一度気合を入れて杖を構える。

「リリカル・マジカル！」

「封印すべきは、忌まわしき器ジュエルシード！」

ユーノよ、アニメを見たときにも思ったが、自分で発掘しておいて忌まわしきって言うのは酷いんじゃないかねえかなと、俺は思うんだが…。

「ジュエルシード、封印！」

《Sealing Board Set up》

そんなあほなことを考えてる間に封印は進んでいく。

レイジングハートが少し伸び、そこからピンク色の翼が生える。

そしてピンク色の帯が伸び、暴走体を縛り付ける。

「?????!」

暴走体は、そこから抜け出そうともがくがどれだけ暴れても外れない。

その暴走体の額にXXIの様子が浮かび上がる。

《Stend by redy》

「リリカル・マジカル、ジュエルシードシリアルXXI、封印！」

《Sealing》

ピンクの帯が再度伸び暴走体を買いていく。

「?????!」

暴走体は苦悶の声を上げて、浄化されるように本体のジュエルシードを残して消えた。

なのはがジュエルシードをレイジングハートに収めてこちらに向き、なにか言いたそうな顔でこちらにバリアジャケットを解きながら歩いてくる。

「で、真耶おにいちゃん、さっきのはなんなの？」

訂正、言いたそうではなく言うべきことだな。

幻術が失敗したから色々と説明しないとな。

「と、色々と聞きたいこともあると思うが、ここをマズ離れるぞ」

俺はそう言い公園の方に足を向ける。すでにサイレンの音が聞こえている。

「そ、そうだね、あユーノくん？」

今思い出したような声でユーノを呼ぶ。…ユーノ、あはれなり。

「とりあえず、ごめんなさ〜い」

なのはも律儀だね。謝罪しながら何時の間にやら倒れていたユーノを抱き上げて、俺と同じ方向に走っていく。そんなに急がなくても大丈夫なんだがな…。

とりあえず物語が始まったな。

ここからが本番だ、転生者の方も警戒しとかないといけないな。

さて、マズはなにから説明しようかな〜。

転生者の闘争劇が、今ようやく幕を上げた…。

第8話 青イ石？まほうしょうじょ？（後書き）

絶・望・した！

自分の表現力の無さに絶望した。

もっと上手くできたかもしれないませんが、これが作者の限界です…。

o r z

…それでは、次回 第9話 説明？しつけ？

その力は、戦うために…。

主人公設定（前書き）

はい、今頃です。

本文に全然主人公の容姿について触れてないので投稿。

とりあえず真耶はこんな感じですよ。

主人公設定

皋月 真耶（さつき しんや） 14歳 男

153? 49?

容姿は中の上 ちよつと女顔。

髪は黒く、後ろは肩甲骨辺りまでありそれを首のところで紐でとめてる。

眼も黒い、てか逆に黒すぎるほどの黒さ。驚きの黒さ！（某洗剤のCM風）

服装は中学に入ってから私服を買っていないため、基本的に制服か上Tシャツ下ジャージである。

性格は、基本面倒見がいい兄貴肌。しかし前世で両親のことで色々あり妹を亡くしたからシスコン気味。

前世で色々な武術を一通り制覇したという知り合いから中国武術と剣術を教えてもらった。

その人は写輪眼で捉えられないという攻撃を繰り返してくる化物並みの強さの持ち主。

“彼女”と言っていたため女性だ。

前世では、上の人程じゃないけど強い人（もちろん女性中心）に囲まれてたから普通に生身でも強い。

ステータス（Fate風）

筋力 B (EX)
耐久 C (EX)
敏捷 A (EX)
魔力 A A A ここはリリなの
幸運 A

手前のは普通に魔力強化をした場合、()内は能力で腕やらを変化させた場合。

能力

『身体の異能への構成変化』

身体のどこか一部を、アニメや漫画、ゲームなどで見たことあるものに变化させる。

今のところ、真耶の限界は4か所を変化させて節約して1時間の戦闘。

主人公設定（後書き）

ま、こんな感じですよ。

それでは次回お楽しみに。

第9話 説明？しっけ？（前書き）

まったく更新速度が落ちないまま更新。

何故だろう、やはり文字数が少ないんでしょうか？

もっと精進せねば…。

それでは転生者の闘争をお楽しみください。

今回は新キャラを出します。

第9話 説明？しつけ？

あの後、俺たちはとりあえず自己紹介をした。

「それで、真耶おにいちゃんはなんで？」

ま、必然的に俺への質問タイムになるわけだが。

「ふむ、俺も一応魔導師だから…だな」

「…一応？」

ユーノが俺の言葉の端にあつた疑問を聞いてくる。

「正確には違うんだけど、今はあんまし関係ないことだ」

「…そうなんですか」

「ま、レアスキル希少魔法とでも思ってくれ」

「はい」

「え〜と、れあすぎるってなに?」

俺とユーノだけで話を進めていたところになのはも疑問をぶつけてくる。

「その辺の詳しい事情はあとでユーノにでも聞いていてくれ、と
りあえず今は帰るぞ」

全部ユーノに押し付けてさっさと帰ることにした。

「ふえ、ま、待つてよおにいちゃん!」

俺がさっさと家に向かうのを見て、なのはもユーノを抱えたまま
ついてくる。

それにしても、ジュエルシードの暴走体が原作よりも強くなつて
るのは問題だな。

これからもしっかりと警戒しとかないと。

「ねえ、おにいちゃん」

その声が聞こえたので思考を中断する。向くと、今までユーノと
なんか話していたなのはがこちらを、結構真剣な眼で見ている。

「なんだ?」

「おにいちゃんも魔導師さんなら、一緒にユーノ君の探し物、手

伝ってもらえるの？」

その真剣な眼は長く続かず、その眼に不安が宿り、言葉の終わりに向かって尻つぼみになっていく。

原作よりはマシか、たぶん原作なら俺から協力を頼んでも、逆に遠慮してると思うから。自分から協力を頼んでくるのは嬉しい限りだ。

「はあく、手伝うも何も、お前が拒絶しようが無理やりにも付き合っつっの」

「へ？ほんとー!？」

「嘘言っでどうすんだよ…」

そう言ってから、家に着くまでなのはは何故かかなり上機嫌で「おにいちゃんといっしょなの」とか言いながら歩いていた。…こんな想像されているとは、兄貴冥利に尽きるってもんだ。

高町家の前に着いたのでなのはと別れる。

「じゃ々ななのは。…気をつけるよ」

「はい」

なのはが門を潜ったのを見て、俺も隣の我が家へと入る。その直前、美由紀さんの声が聞こえた。

あ、ユーノ捕まったな。南無…。

「ただいま」

「お帰りや」

家に入ると、何故かとても“良い笑顔”のレンさんが居た。ほん
と何でだ!?

「なにも言わずにいきなり飛び出してって、心配したんやで」

その状態で近づいてくる。

ああ、俺も南無…。

次の日。

身体のこと等中がちょっと痛むけど起きる。

「ふあ~~~~」

時計を見るといつもより結構早く起きてしまった。

制服に着替えて家事をゆっくりやっていく。

「あ、真耶くん、おはようさん。今日は早いな」

「ああ、なんだろう、痛みで起きた感じか？」

「あはは〜……」

別に攻めてる訳じゃないのだが、レンさんは少し気まずそうに笑う。

その後は二人で分担して家事を終わらせて、いつも通り学校へ向かい歩く。

日常はただ過ぎていく……。

「……」

授業中、ユーノとなのはの念話がこっちにも流れてきて寝れずにいた。

「今日は珍しく起きてる…臯月、答えてくれ」

「へえ〜い……」

そのせいで当たってしまった。クソ、ユーノだけあとでシバク。

いつも通り授業が終わり下校しようと、校門に向かって歩いていくと…。

「……………！」

魔力反応がした。

確か今日は犬っころだったか？

「はあ、神社までマラソンか」

そう呟き、魔力強化のみで走っていく。

神社に着くと…。

「 ??????????!?!?!」

「きゃあ!」

原作より二回りほどでかい犬が、なのはの障壁に突っ込んでいた。

強烈な発光とともに、暴走体は跳び退る。

やはり、原作よりもタフだな。

「なのは!」

俺はなのはに駆け寄る。

「真耶おにいちゃん!」

「敵から眼を背けるな」

なのはの前に立ち、右腕を変化させて『変化した右腕』にし、跳びかかってきた犬を殴り飛ばす。

「 ??????!?!?!」

苦悶の声を上げて吹っ飛ばす。

「躰のなっていない犬には、“調教”が必要だな…」

俺は右腕を振りかぶり暴走体に走る。

「 ??????!?!?!」

暴走体は俺の動きを見て、俺の右側へと避けようとする。

だが…。

「…ふんっ」

俺の拳速がそれを許さず地面に叩き伏せる。

「?????????!?!?????」

暴走体は絶叫を上げるが、俺はそんなの気にするほど優しくない。

「なのは！封印を！」

うん、ユーノもしっかりと状況を判断できてるな

「あ、うん！レイジングハート、お願いね」

《Sealing mode set up》

昨日と同じようにレイジングハートから翼が生える。

《Stand by ready》

そして、ピンク色の帯が暴走体を絡め捕り。

「リリカル・マジカル、ジュエルシード、シリアルXVI封印！」

《Sealing》

そして、封印される。

残されたのは原作の犬よりも大きい柴犬だった。

やはり、原作を基準に強力になってるな。こりゃ気を付けないと。

その後、なのはと犬の飼い主を見送る。

ほんとこいつは心配性だな。

起きるまで待つとか言われてもな。別になんも問題ないんだがな。

ま、いいか。これでとりあえず今日の非日常はおw『真耶、仕事だよ』俺の非日常はまだ終わらないらしい…。

「なのは、お前は先に帰ってる」

「へ?どうしたの?」

「用事、ちょっと帰りが遅くなるから。じゃな!」

「あ、ちょっとおにいちゃん!?!」

俺は捲し立てるように喋り森の中に姿を消す。

『で、メル今度はどこだ?』

『今日は…』

目の前に魔法陣が展開されてそれに乗る。

そして発光して場所を跳ぶ。

視界が開けると、そこは雪国だった…。ってさむっ!？

「のわ〜!？さむっ!？ビックリだ!？何が一番びっくりかと言つと一言もなしにこんな雪国に放り出したメルにビックリだ!」

『あはは〜、ごめんごめん』

一通り叫んだらメルから念話が入る。

「くそっ…」

とりあえず皮膚の構成を変化して耐える。

「で、どこだ?」

『……………』

あれ、メルからの反応がない?

「お〜い、メル?」

『…反応が二つになって片方が消えた』

…？二つになって消えたってことは仲間を滅したのか？

『気を付けて真耶、いつもと反応が違う！』

「あいよ」

俺はそれだけ返して念話を切る。

そして感じる方向を向くと人が歩いてくる。

「…！？」

そいつは燃えるような長く紅い髪を流し、眼は髪とは真逆で、凍りついたような蒼い瞳。

しかし、その眼には特に何も伺えず、無表情で歩き続ける。

歳はなのはと同じ位かな。

その服は、おそらくバリアジャケットなのだろう、深い紺色の着物を着ている。

そして、その手にはこの白い世界とは真逆、烏の濡れ羽のような色。少しだけ緩やかに反れた刀身、刀身の中ほどまでは両刃で、途中からは片刃という少し変わった刀を持っている。

たぶんあの刀は、『小烏丸天国』草壁五宝の一振り。

「……………」

「よう、確認するが、お前はロキの転生者で間違えないな？」

「……………」

？

少年は俺の言葉に首を傾げた後。

「……………（フルフル）」

と首を振った。

あれ、なんでだ？

今までは確認したら構をとるか即攻撃してくる奴ばかりだったが、否定した奴は初めてだ。

「…違うのか？」

「……………（コク）」

俺の問いに首を縦に振る。てか喋らないな…。

「じゃあなんでこんなところに居る？」

俺はさらに質問をし続ける。しかし、警戒はとらず『写輪眼』を
発動する。

「……………ロキの転生者、倒した…」

……………喋った!？

てか今ロキの転生者を倒したって言ったのか？

「おい！それはどういふことだ？」

仲間割れか？

「……………俺は、ロキでも、オーディンでも、ない…」

なに！？

またもや新事実だ。

「お、おい！もうちょっと詳しく…」

教えてくれ。と言って足を踏み出そうとしたら、少年の小烏丸の切っ先が迫ってきた。

「！？のわっ！」

俺はその刺突を白刃取りする。

「ちょっと待て！ロキやオーディンの他にも転生させてるやつがいるのか！？」

その状態で睨み合い質問を続ける。

「……………（コク）」

肯定のようだ。てか、今間がかなり空いてたな…。

とりあえずは、色々と聞き出さないとな。

と思ったが剣がすぐに引かれた。

そして…。

「……………」

転移魔法陣の上に乗っていた。

「あ！？コラッまでや！」

その声は無駄になり転移を許した。

「……………はあくソ」

メルに確認を取っておかないとな。

『で、メル。どういうことだ？』

『えくとね？』

今、家にてメルを尋問中…。

『なんだ？』

『私もわかんないのよ、ちょっとこっちでも調べてみるからな、』

怒らないですよ」

『はあ、確認できてないなら仕方ない、か。じゃ頼むぞ?』

『はい』

これでメルとの念話も終了した。

あの和服の少年のことも気になるが、そちらはメルに任せているんだ俺が気にしても仕方がない。

今は目の前のこと、これからのジュエルシードのことを考えないとな。

…はあ、面倒なことが起きませんように。

第9話 説明？しっけ？（後書き）

こんな感じですよ。

やばい駄文だ…。

と、とりあえずこれからもよろしくお願いします。

それでは、次回 第10話 覚悟？みじゆく？

その力は、戦うために…。

誤字脱字の報告や感想お待ちしております。

第10話 覚悟？みじゅく？（前書き）

書けてしまったので投稿。

やはり短いですね。

それでも見てくれる人はなまぬる〜くどうぞ。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第10話 覚悟？みじゅく？

「ジュエルシード、シリアルXX封印！」

なのはの言葉と共に、ピンク色の光が輝きジュエルシードを封印する。

「お疲れさま」

「ううほんとにつかれたの」

確かに、俺から見たら暴走体は強くはない、けど、やはり使い慣れていないものをここの毎日実戦で使うと、疲れるのは当たり前だろう。

「なのは、足元が怖いから俺の背中に乗れ」

ちよつとフラフラしていて扱けそうで怖い。

「ふえ！？いいよ、大丈夫だから！」

出たよこいつの悪い癖。

「大丈夫に見えないから、俺は言ってるの。それにお前は実戦にまだ慣れてないんだ、無茶するな」

「う、わかったの」

俺の説得でようやく背中に取りおんぶの格好になる。ユーノはなのはの肩に乗る。

少し歩きながら話しくか。

「あのなのは、お前は眼を離すとすぐ無茶するんだから、もっと周りを頼ってだな…」

「あの真耶？」

「なんだ、ユーノ？」

俺がなのはに話しながら歩いていると、ユーノが小さな声で話しかけてくる。

「なのは、寝ちゃってるよっ」

「む…？」

その言葉に耳を傾けると、確かに寝息が聞こえてくる。

「はあ〜、こいつは」

「まあまあ……」

こんな感じで毎日送ってます。

「……」

高町家の前で、俺は困っていた。

この、背負っている荷物（なの）をどうしたらいいか悩み中だ。

起こすのが一番早いのだが…。

「すう…すう…」

横を向き、この寝顔を見てしまうと起こす気が失せてしまうのだ。

かといってこのまま家に突っ込んで、恭也さんが出てきたりしたら面倒な事になるのだ。

と言うことで、なんとかできないかと困っていたら…。

ガラッ

と高町家の門が開く、そこには土郎さんが。

「やあ真耶君」

助かった。士郎さんならまだ俺のことを知っているので気が楽だ。

「士郎さん、すみませんなのはをお願いします。」

俺のその言葉に、士郎さんは一度俺の背中を見て、苦笑して引き取ってくれた。

「それじゃおやすみなさい」

俺はそのままいこうとしたが…。

「真耶君」

士郎さんの声に止められる。振り返ってみると、真剣な表情でこちらを見ている。

「…どうしたんですか？」

「君となのはが今、何をしているかは聞かない。けど、なのはを頼めるか？」

まあ気付かれてるのは当たり前だな。だけど、大事な娘を他人に任せるってのは驚きだな。

「…だけど、俺はもう…。」

「…頼まれなくても、いや、やめると止められようとも、俺はなのはを護りますよ」「…」

…三年前に誓ったから。

「……そうか、いらぬ心配だったな」

士郎さんはまた苦笑を浮かべる。

「…それじゃ、お休み真耶君」

「はい、おやすみなさい」

そう言って士郎さんは家に入っていった。

俺もいつまでも見てないで帰りますか。

次の日。

今日は日曜日だ。だけど、俺とレンさんは山の中で汗を流していた。

「ふっ、はああー！」

「…ほっ、よー！」

やはり『写輪眼』も魔力強化もなしだとレンさんには勝てないな。

そのまま約30分ほど組手をする。

「じゃーじまでや」

「…ありがとうございます」

二人で山を下りて帰宅する。

確か今日はサッカーの試合があるから、街中での暴走の日だ。

「そういえば、今日は土郎さんとこのサッカーの試合があるんやっ
たな」

レンさんも思い出したようだ。

「はあ、ウチも用事がなかったら応援に行くんやけどな」

「それはもう仕方ないでしょ」

「そうなんやけどな」

「応俺はなのは付添としていく。」

時間になり、なのは達と試合場へ。

そして時間になったようでフェッスルが鳴らされる。

ま、キバって行ってこいや…。

特に面白いところもなく試合は終了。結果は翠屋JFCの勝利に終わる。てか、両チームの監督よ、とりあえず取って付けたようにJFCを付けるのはやめないか…。

その後、土郎さんの奢りで翠屋へ移動。

俺もケーキとコーヒーを買った。

相変わらずモンブランもコーヒーも美味だ。

目の前で、アリスとすずかちゃんとなのはが楽しそうに話している。

あ、ユーノが堕ちた…。

そんなこんなでサッカーチームも解散するらしい、その時なのは何かに気付いたようだ。だけど、ユーノは弄られ、俺はモンブランウマウマしてるからジュエルシードの反応には気付いていない。

でも、今のなのはの反応から持っているのは確実だな。

その標的であるゴールキーパーは、マネージャーとピンクのオーラを出しながら仲良く歩いて行った。
チツ、リア充爆死しろ。

「じゃ、あたしたちも解散」

「そうだね」

お嬢二人はお帰りになるようだ。

「忘れ物などはありませんか、お嬢様方？」

「ないわよ」

「わたしも、大丈夫です」

俺が冗談めかして言った言葉に、二人とも普通に返答する。
さすがはお嬢だな。

そんなことをしていたら土郎さんが出てきた。

「みんな応援してくれてありがとな、なんなら送ってごうか？」

土郎さんは二人に気を使うが、そこは天下の月村とバニングス、二人とも迎えがくるそうだ。

土郎さんはなのはと一緒に帰るそうだ。

「あ、真耶おにいちゃんはどうするの？」

なのはから俺に問いが来る。

ふむ、どうしたもんかな。……あ。

「俺も今から出かけてくるよ」

「…そうなんだ、行ってらっしゃい」

「……気を付けて行ってこいよ」

街に先にいって結界の準備をしてこないと。土郎さんは俺の眼を見て何かを察したようだ。

「そんじゃ行ってきます」

俺は後ろに手を振りながら歩いていく。

少し店を見ながら歩いていると。

「…っ!？」

前方から魔力の反応があり、馬鹿でかい気が生えた。

「……世界樹もビックリ？」

一人で疑問を呟く、てか原作よりデカさも進み具合も早い。

「ふう、結界！」

この町全体に結界を張る。これで現実にはそこまで酷いことにはならんだろう…たぶん。

とりあえず、成長して襲い掛かってくる根っこがござい。

「ふっ、はあ！」

右腕の構成を変えて、『ハンドソニックver.1』を生やして迫ってくる根を切り裂く。

本体から離れながら切り裂いていくと、ビルの屋上になのはが見える。

「来たか」

なのはが決意を新たにしているシーン、俺の結界はユーノのと違って色が変わらないから、現実でこうなっていると思うだろう。

ま、結界張るの遅れたから、発生地点はちよいと荒れてるかもな。

足に魔力強化を多量にかけてビルの壁を蹴り、Fateのセイバーとライダーの如く垂直に上っていく。

そして億条に到着。

「とちやく！」

ダンツと両足で屋上に着地して、体操選手のように両腕を上げる。
なのは達の方を見ると…。

「…ユーノ君、こういう時はどうしたらいいの？」

まったく見てくれてなかった。

グスツ…いいもんきつと審査員（読者）の方たちは点数をくれた
筈だ。それを力にファイトだ俺。

「リリカル・マジカル。捜して、災厄の根源を！」

折れかかっていた心を戻し、なのはをもう一度見ると、エリアサ
ーチをしていた。

少し集中していたようだ。

「見つけた！」

目当てのモノは見つかったようだ。

「出来るよね？レイジングハート…」

《シューティングモード セットアップ》

少々ユーノと口論したが、なのはの願いに答え、レイジングハ
ートの形状が変化する。

その形は、魔砲少女の切っ掛けとなった、音叉型の砲撃モード。
そして、ピンク色の翼が生える。

なのはが構えてレイジングハートに、環状魔法陣が展開、穂先に
ピンク色の魔力が集まる。

「行って、捕まえて！」

主の命に従い、砲撃が真っすぐ大元へと伸びていく。…が。

世界樹（笑）の根っこがその進路を塞ぐ。そのせいで、なのはの
砲撃は何本かを巻き込み消えてしまう。

「な!?!」

「そんな!?!」

イレギュラーだな。ここは俺の出番だ。

「もう一度だ」

「へ?」

なのはがようやく俺に向く。

「もう一度撃つ準備をしろ」

「でもっ…」

さっきのことが気になっているのだろう。だけど。

「俺を信じる」

なのはの眼を真っすぐ見てその言葉を言う。

「……うん！」

なのはは笑顔で頷く。が、すぐに顔が暗くなる。

「でもどうやって…」

「だよね…」

こいつらは…。

「俺も魔法使いだってこと、忘れたか？」

「ふえ？」

俺は右腕を変えて『変化した右腕』にする。

「それで、どうやって？」

ユーノはこれを、ただ殴るだけのものだと思っているみたいだな。

「まあ、見てな…」

そう言い腕を振りかぶる。

「ほらなのは」

「え、あ、はい!」

それをただ見てるだけのなのはに眼で催促する。

「じゃ、俺の後に撃てよ?」

「うん!」

一度息を吐き吸う。

「はああ!」

思いつきり右の拳を振るい、魔力によりコーティングされた拳圧が砲撃のように飛んでいく。

壁になる根っこをすべて退かし消えていく。

「なのは!」

「...う、うん!」

ちょっと茫然としていたがすぐに撃ち、本体に当たる。

「ジュエルシールド、シリアルX封印!」

これによりジュエルシールドの力は封印された。

「わたし気付いてたんだ。…あの子が持つてるの」

バリアジャケットを解除し夕陽に照らされながら、なのはは言葉を紡ぐ。

「…でも、気のせいだって思っちゃった。」

自分への戒めの言葉を…。

「なのは…悲しい顔しないで、なのはは僕の手伝いをしてくれるだけなんだから」

ユーノが屈みこんでしまったなのはを励まそうとするが、なのははさらに顔を俯けてしまう。

夕陽の中で屈みこんでるその姿は、俺がこいつを護ると誓った日の再現のようだ。

「なのは」

俺はなのはの前に胡坐をかいて座る。

「…前にも行ったはずだが、お前はまだまだ子供だ、失敗とか迷

惑をかけるのは当たり前なんだ。だから……」

「ふにゅっ……」

なのはの顔を手で包み上げさせる。

「……それをお前がどうするかが大事だ」

そう言い手を放す。

「これ、提出はしなくていいけど宿題な」

なのはを置いて俺はビルを下りるために階段へ向かう。

「真耶おにいちゃん！」

なのはが呼ぶ、それに振り向いてやる。

「なんだ？なのは」

「え〜と……その、ありがとう」

その時の笑顔は、夕焼けに照らされ少し赤くなっていた。

夕陽が沈む。

また明日上るために。

なのはの心も、ここで一度沈んだ。

なら、また今度上がるだろう。

あのとき見せた笑顔は、太陽のように輝いていた。

第10話 覚悟？みじゅく？（後書き）

グツダグツダだよっつっ!!!

はい申し訳ないです。

もう駄文過ぎて叫ばずにはいられませんでした。
すいません。

それでは、次回 第11話 黒猫？もうふたり？

その力は、戦うために…。

第11話 黒猫？もつふたり？（前書き）

書けたので投下。

今回から劇場版をちよくちよく挟んでいきます。

微妙になるかもしれませんが、生温い眼で見守っててください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第11話 黒猫？もつふたり？

夜の街。あるビルの屋上にて、黒衣を纏う金髪の少女が風に吹かれ佇んでいる。

「形状は青い宝石、一般呼称はジュエルシード」

「グルルルルル」

その近くの、額に赤い宝石が埋め込まれた、橙色の毛並みのいん
…狼が返事をするように低く唸る。

「…そうだね、すぐに手に入れるよ」

まるでその狼の言葉が判るかのように少女は返答する。

ワオオオーーーーン！

その晩、低い狼の遠吠えが響き渡る。

「……あ、一真」

少女の横に、真耶がこの前取り逃がした和服の少年が降り立つ。

「……いく？」

「うんそうだね」

二人は少ない言葉で頷きあう。

少年の紅い長髪が風に流れていく…。

なのはが決意を固めた次の日曜日。

なのはと恭也さんが月村家に行くのだとか、それに何故か俺まで呼ばれ、俺たちは三人バスで移動中である。

月村家の前。

「相変わらずのデカさだな…」

俺はついつい口から感嘆の声が出る。

「だよね」

なのはもそれに賛同する形で声を出す。

「ほら、お前ら行くぞ」

恭也さんが、止まっている俺たちに声を掛ける。

「はあ、恭也さん。忍さんに早く逢いたいからって急かさない
てください」

「なっ！真耶お前は！」

「冗談めかして言うてみると、軽く乗ってきた。」

「ははは、冗談ですよジヨウダン」

「……たく」

恭也さんはジト目で俺を睨んでくる。

この人は、何処か子供っぽいな。それにそんな眼で見るなよ、さ
らに苛めたくなっちまう…。

「（ゾクリ）…！こ、こんなことしてる場合じゃない。早くいく

ぞ
「

「はい」

「はい」

俺らを先導して恭也さんが歩いていく。

そして、玄関に着き呼び鈴を鳴らし少しすると、まさに西洋の館
つて感じの扉が開く。

「恭也様、なのはお嬢様、真耶様。いらっしやいませ」

「ああ、お招きに預かったよ」

「こんにちはわ」

「こんにちはノエルさん…、いい加減様付けはどうにかなりませ
んか？」

「どうにもなりませんよ？」

俺の頼みをバツサリ切ったのは、ここ月村家のメイド長をしてい
るノエルさん。

そう話していると、テラスのような場所に出る。

そこにはもうすずかちゃんとアリサ嬢も来ているようだ。

それにすずかちゃんの姉の忍さん。

ノエルさんの妹で、すずかちゃんの専属メイドのファリンさん。

「こう見ると、月村家のみなさん、髪の毛の色がやはりすごいと思
うな…。」

「あ、なのはちゃん、真耶さん、恭也さん」

「すずかちゃん」

「お招きに預かり光栄です、お嬢様」

「なんかすずかちゃんを見ていると、どうしてもこういつ喋り方に
なっちまうな。」

「いえいえ」

「ま、みんな特に気にしてなさそうだからいいか。」

「お茶をご用意しましょう、何がよろしいですか？」

「ノエルさんが機を見てお茶のことを聞く。」

「任せるよ」

「私も、お任せします」

「はあ、この二人は、任された方はどれだけ大変かわかってるの
かね。」

「…真耶様は？」

「俺はいつものコーヒーで」

お前も十分迷惑だろ。という突っ込みはなしで…。
コーヒーなめんな。カフェインだぜ？

「はい、畏まりました。少々お待ちください」

ノエルさんとファリンさんがおそらくキッチンに行っただろう後、
恭也さん達も忍さんの部屋へ移動していった。

「おはよう」

「うん、おはよう」

なのはは二人に挨拶をしながら、椅子に寝ている猫を抱え上げて
そこに座る。

俺はさっきまで忍さんが座っていた場所、つまりはなのはの正面
に座る。

なのはと二人が何か話しているが、俺は今膝に抱いた猫をナデナ
デするのに集中しているから聞こえない。

二人がなのはを気にかけてるってのはなんとなく察したが、ほと
んどそれだけしか理解してない。

「きゅいーーーーー!!!」

『真耶っ！たすけてっ！』

そんな中、猫に追っかけられながら俺に助けを求めてくるユーノ
の声が聞こえる。

『昔の人は言いました。ファイト　　！！！！いっぱーいっつ
！！！！だど』

『そんなの知らないよーいー！？』

ま、知らなくて当然だけどさ。なんか悲しくなってくる。

「は〜いお待たせしました！」

そんな時に現れたのは、お茶が乗ったお盆を持ったファリンさん。

あほのユーノはその足元を走り回りファリンさんがこけ掛ける。
なのはとすずかちゃん支えようとするが間に合わないだろう。

ということ、俺が瞬動モドキでファリンさんのすぐ近くに移動
し、お盆を下から持ち腰に手を回し支える。

「大丈夫ですか？」

「はわ〜〜！！真耶君、ごめんなさ〜い！」

涙目で謝られても。

「とりあえず、悪いのは逃げる場所を選ばなかったこといつですか
ら…謝らんでください」

そう言ってユーノを掴み上げる。

「キユーー…」

目を回していやがる。てか、ほんとに眼は“グルグル”なるんだな…。

そんなことを考えながら席に戻ろうとすると。

「…なによ、今の」

三人が固まって俺を見ていた。そして、一番最初に再起動したアリサが聞いてくる。

「ん？今のって？」

ま、大方瞬動モドキのことだろう。

「だって今、あたしの隣に居たじゃない。なのになんでなのは達よりそつちに居るのよ!？」

ふむ、ちょっとだけ嘘を交えながら教えるか。

「お前ら、俺が中国拳法やってるのは知ってるな？」

三人とも首を縦に振る。

「今のは、その歩法だ」

「ほほう？」

今度はすずかちゃんが声を出す。

「そ、特殊な足の運び方とかだね。恭也さん達とも偶に手合せし

てるから、こついつのが無いと不便で…」

嘘は、確かに特殊な歩法はあるけど、あんな瞬間移動みたいなのはできないってとこだね。

「恭也さん達と手合せって…」

「かなりハードね…」

すずかちゃんとアリサも、あの戦闘民族の強さを知ってるからなとりあえずの納得はしたらしい。

なのははその話をしている最中は苦笑いをしていたが。

場所は移り外に出た所で三人はお茶会を再開。
俺は猫と戯れている。

すると、ジュエルシートの反応がして、ユーノとなのはの念話が聞こえる。

『そうだ!』

ユーノのなにかを思いついた声と共に、ユーノは森の中に入っていく。

「ユーノ君!？」

なのはも狙いに気付いたらしい。

「あれれ？ユーノどうしちゃったの？」

「なんか見つけちゃったみたい、探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫、すぐ戻るから！」

なのははそのまま走っていく。さて、俺も行かないとな。

「それじゃ、俺はなのはを追ってくるよ」

「へ？けど…」

「なのはの運動音痴を知らないことは、ないだろう？だから、行ってくる」

「そうですね、お願いします」

俺も走ってなのはを追いかける。

追いつくと、そこには…。

『?????????!?!?!』

黒い大型犬ほどにまで大きくなり刺々しくなり翼を生やして下半身が蛇のようになった暴走体の猫と。

「ジュエルシード、封印！」

漆黒の魔導師が居た。

なのはとユーノはそれを下から見上げていた。

………あり？これってなんぞ？劇場版？俺見てねえぞ！？

俺の頭はこんがらがっていた。

「……」

そうしてる間に黒衣の魔導師、フェイトは封印して滞空しているジュエルシードに近づく。

「あ、まってー！」

その姿になのはは声を掛ける。

「……」

それを見たフェイトはなのはにバルディッシュを向け、フェイトの魔力光である黄色の魔力スフィアを三つ生成した。

「っは……」

なのははいきなり戦う気満々のフェイトの姿に戸惑うが、フライ

ヤーフィンを生やして、フェイトと同じ空へと上がる。

「…おい、なの…っ…!!?」

俺は声をかけようとしたが…。

「…………千歳の儂、小烏丸天国」

その静かな、しかし力強い言霊と共に横からの漆黒の剣による刺突が邪魔をする。

「ちいつ!」ハンドソニック!」

それを『ハンドソニック』を両腕につくり交差させて受け止める。

だが、勢いをそのままに森の中に突っ込む。

「…ぐはっ」

「……………」

少し行ったところで気に叩き付けられ、剣の主は飛び退き、俺との距離をとる。

「お前は…」

俺は正面に立つ少年を見据える。

「……………」

真紅の髪に、紺色の和服。その手に握る名の通りの漆黒の両刃造りの刀。

数日前に一度会ったことのある少年だ。

「……フェイトの…邪魔は、ダメ」

「……ダメで…」

出している剣気とは裏腹に、そのユツタリとした喋りで俺の調子が崩される。

「はあゝ、『ハンドソニックver.2』」

両腕の『ハンドソニック』を変化させる、刀身を薄くし少し長くなる。高速戦闘に特化させる。

そして、『写輪眼』を発動する。

「……」

少年もその手に握る『小烏丸』を構え、お互いに共に駆け出し剣を振るう。

「つくー！」

森に剣が交差する音が響く。

「…ふっ」

「はあっ!!」

俺たちはただ舞う、お互いがまだ敵かどうかもわからぬまま、ただ自分の護るべきものを護るために。

「ちっ!」

一度距離を取る。

剣術だけなら向こうの方が上だ。体格とかならこちらの方が上だが、魔力で強化した俺たちの体にはあまり関係はない。

「……………」

「……………」

睨みあう。しかし、その拮抗もすぐに崩れる。

「きゃあああ————!!!!」

なのはが落とされた…。

俺はそれが聞こえたと共になのはの下に駆け込み。

「……………ごめんね」

フェイトの声を聴いた。

その声と共に追撃のフォトンランサーが撃たれる。

それが直撃した。

「くっ！」

加速して落ちてきたのはをなんとか受け止めて背中を強打する。

「てて、おいなのは、大丈夫か？」

「う、うん、だい、丈夫……」

あまり大丈夫に見えないな。

「……ジュエルシールドは、諦めて」

「……………いこ、フェイト」

「うん」

少年も空に飛びフェイトと共に去っていく。

俺たちはそれを見送るだけだった。

「なのは……！大丈夫！？」

あ、ユーノ空気だったな。

「ごめんユーノ君、わたしは、だいじょうぶいたっ！？」

俺はなのはにデコピンをかました。

「なにが大丈夫だバカ、ほら、手見せてみる」

左手を変化させて『アブラクサスの左腕』にする。

「…う、うん」

おとなしく手を出してくる。そこに左手を翳して傷を癒す。

「わあ…」

「ほい終了」

回復中の光に見惚れてたんだらう、感嘆の声が出ていた。

「ちつちと帰るぞ」

「…うん」

やはり少し元気がないが、立ち上がるがふら付く。

「っ！…あ」

それを抱き留める。

「はあ、失礼」

「ふえ？…にやわ！？」

「あー、ジタバタするな運びにくいだろ」

俺がそういうと一応大人しくなり、顔を赤くさせ縮こまる。

今の状況は、俺が無理やりなのはを（お姫様抱っこで）抱き上げている。

一々背負うのもメンドイし、無理やりならこれしかなかったからな。

とりあえずそのまま歩いていく。

「ユーノ、俺の肩に乗っつけ、お前を捜してたことになってんだから」

「……………」

ユーノも元気がないな、やはり自分のせいだと考えてるのかね。はあ、ほんとに9歳かよ…。

月村邸に戻るとさっそくなのはが抱きかかえられてるのを心配されていた。

ま、一応こけたことにしといたけど、やはり嘘はそこまで得意になれないな。

「アルフ、お疲れ様」

『フェイト！それにカズマ！』

電子モニターで二人、黒衣の魔導師フェイトと橙色の髪に犬耳を生やした女性、アルフが会話をする。

フェイトの横にはあの少年、フェイトに一真と呼ばれ真耶と戦った和服の少年が座っている。

「……………」

一真は無言で笑みを作る。

「遅くまでごめんね、そっちはどう？」

フェイトが自分の家族の心配をする。

『発動前のを、さっき一個見つけたよ』

そう言っつて、アルフはジュエルシールドをモニターに映す。

『今夜中にはこの辺一帯をサーチ出来ると思っけど？』

「ありがとう、私は夕方に封印した一つだけ……」

『そっ……』

主の気持ちを察したのか、アルフも声のトーンが落ちる。

「……………大丈夫」

「え？」

その二人の消沈した空気を、一真が励ます。

「……僕も、頑張るから」

「ありがとう、一真」

その一真の姿にフェイトの心も幾分か晴れる。

『ふふ、…それにしても、フェイトとぶつかったこの三人、まさか管理局じゃないよね？今んとこ、追われるようなことは、してない筈だし。』

アルフも、一真の姿に微笑ましく笑うが、次には少し顔を硬くする。

「違うと思うよ？魔法も、ちゃんと使えてなかったし」

しかし、フェイトのその言葉にアルフの顔から陰が取れる。

『そうか……。まあ、いざとなったら、あたしがそいつらぶちのめしちやる、フェイトは心配いらなからね？』

「ありがとう、アルフ」

主従の固い絆がそこにある。そこに一真も加わる。

「……三人の内、一人は、僕がやる」

「『え?』」

いつもはのんびりした感じの口調が、今は、少し真剣になり、指でその相手を指す。

その指の先には真耶の写真。

「……………二人じゃ、危ない、だから、手は出さない方がいい」

「…そんなに強かったの?」

「……………(コクツ)」

フェイトの問いに一真は首肯で答える。

『カズマにそんなこと言われるなんて、こいつほんとに強いんだね』

アルフもフェイトも、一真の強さを知っているから、そんなことを言う一真は初めて見る。

「……………とにかく、いい?」

「うん、任せてもいいよね、アルフ」

『そうだね、一真なら、どんな奴だってぶちのめせるよ!』

「……………ん、ありがとう」

二人からの信頼が嬉しく、一真ははにかむように笑う。

こうして、魔導師たちの夜は更けていく…。

第11話 黒猫？もうふたり？（後書き）

The 駄文！！！！

どうしようもないです…。

映画があまりにもすごかったのと、フェイトがカッコ良かったので
入れてしまいました。
もう勢いだけです。

でも、これからも生温く見守っていてください。

それでは、次回 第12話 温泉？きけん？

その力は、戦うために…。

感想などお待ちしております。

第12話 温泉？おなまえ？（前書き）

出来たので投下。

予告とタイトルがちょっと違います。

書いている間にかわってしまいました…。

そんな作者ですが、生温く見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第12話 温泉？おなまえ？

「だから教えて、魔法の上手な使い方」

はい、いきなりですが、ユーノと共になのはに魔法の練習を教えてくださいるように言われた。のだが…。

「うーん、俺は“魔法”は教えられないぞ？」

「ふえ？」

俺の言葉になのは声を上げる。

ユーノはわかっていて黙っているのか黙っているのか。

「いや、だって俺のは魔法であるけど、その前に希少技能レアスキルだから、それに俺に教えるだけの知識がない」

「あ…、そっか」

「でも…」

下を向きかけたなのは顔が上がる。

「でも、俺は魔法を教えることはできないが、“戦い”は教えられる」

「え〜と…!」

少し悩んだ後、俺の言葉が理解できたのか顔が輝く。

「と言う訳で、魔法の方はユーノに任せる」

「うん」

「模擬戦が出来るようになったら、俺が教えられることは教えるから…。頑張れよ」

「うん!ありがとう、真耶おにいちゃん」

俺はなのは後ろ手に手を振り、早朝の山を下りていく。

そんなことがあった週の内に、世間的にはゴールデンウィークと呼ばれる時期になったわけで。

「…温泉ですか？」

「そうだ、真耶君やレンちゃんもどろろかと思ってるね」

士郎さんから温泉へのお誘いがきました。

「あゝ士郎ハン、うちはちょっと無理や、真耶君は？」

「ん、俺は大丈夫ですけど…」

「そうかわかったよ」

そつ言って士郎さんは帰って行った。

「レンさんはなんでダメなのさ？」

「ん？ウチはちょっと用事や、人に言うことじゃあらへんよ？」

ん？よくわからんが俺のみのようだ。

次の日。

毎年の行事のようなものになった、二泊三日の近場の温泉旅行へ行くことになった。

車は二台、一台は月村忍さんが運転する車に、恭也さんとメイドさんが二人。そしてもう一台は、土郎さんが運転する車、こちらは残りの高町家とアリサとすずかちゃん、そして俺と、俺の膝の上のバスケットの中に入っているユーノだ。

『なのは、旅行中くらいゆっくりしなきゃダメなんだからね』

『わかってるよ、大丈夫』

ユーノとなのはの念話が漏れて聞こえてくる。
はあく、相変わらずというか、なんとというか。

“大丈夫”これはある意味自己暗示でしかない。

『大丈夫』『まだやれる』。こんなのはやせ我慢でしかない。

けど、本人はそれを突き通さなきゃいけない。

「…はあく、難儀だね」

「ん？真耶君、どうしたの？」

「ああ、いえ、なんでもないです」

小さく呟いた声を、隣に座る美由紀さんはその耳に拾ったようだ。

……流石は“高町”か。

それにしても……。

「……」

横目で、斜め後ろに座るなのを見てみると、結構消沈した顔を
している。

ほんと、難儀なことだ。

今度は心の中で呟き、外にはため息のみが出た。

旅館に到着し、初めに感じたのは転生者の気配。
やはりフェイト組も来ているようだ。

俺も、あの紅髪の少年のことがわからないから、今夜なんとか聞
いてみるか……。

「それじゃあ、温泉行こっか」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の手はすかさずユーノを捕える。

「真耶、俺たちも、温泉入るか」

おや恭也さんから誘われるとは珍しい。

「ああ、いいですよ」

「あれ？ユーノ君は？」

後ろでなのはがユーノを捜しているようなので教えてやるか。

「ユーノなら俺が預かつとくよ」

「……え……」

女性陣から大ブーイングをいただきました。

「いいでしょ、こっちは恭也さんと二人とか寂し（気まず）すぎ
るわ……」

ということ、ブーイングを掻い潜り男湯へ。

「……あ、そういえば土郎さんはどうしたんですか？」

俺は服を脱ぎながら聞いてみた。

「父さんなら、母さんと歩いてくの見かけたぞ？」

「そうなんですか……」

会話が止まる。

知り合ったときはまだマシだったが、3年前のことがまだ尾を引いてるようで気まずい。

『…えっと、真耶、聞いてもいい？』

『ん？どうした』

『どうして僕を思いっきり引き寄せたの？』

こいつは、まだ学習できていないようだな。

『お前をあのままにしといたら女湯に連れ込まれていたぞ…』

『え！？あ、ありがとう真耶』

心底安堵したようにユーノはため息を零す。

そんな会話をしてる間に、ユーノを持ち浴場へ。

とりあえず一通りユーノの体を洗う。音声のみを拾うと。

『がぼがぼっ真耶！やめ、息がっ！がぼっ！？』

「おお、おお暴れるなよユーノ」

「お、おい大丈夫なのか？」

と言うものだ。その後ユーノを湯船に投げ落したりした。

『ぶう〜ひどい目にあった』

『わりいわりい』

今ユーノは桶風呂で寛ぎ中だ。

俺も湯船でまったりしてる。そこに少々緊張した面持ちの恭也さんが近寄ってきて。

「背中を流してくれないか」

なにか話があることが一目両全だ。

「…いいですよ」

タオルをもって湯船を出る。

「…?」

ユーノは俺たちが纏う空気が普通じゃないのに気付いたようだ。

『ねえ、真耶は恭也さんと何かあったの?』

なかなか鋭いところを聞くね、こいつは。

『なに、ちょっと捻じれた関係なだけだよ』

俺はそう言いながら恭也さんの背中を洗っていく。

「……真耶、助かった」

「………はい?」

少しして、恭也さんがポツリと呟いた。

「いや、三年前の事だ。こうしてゆっくり話そうと思っても、なかなか…な」

「…そうですね」

苦笑いを浮かべるしかない。俺が避けてたようなもんだからな。

「…こうして改まって言うのもあれだがな。お前のおかげで、俺は護るべきものをしっかりと見失わずに済んだ」

恭也さんは喋りつつける。これにも苦笑いを浮かべるしかない。

あのときは、ほとんど八つ当たりの様なもんだったから、なんと返していいか困る。

「…本当に、礼を言う」

「…っ！」

恭也さんが後ろに、つまり俺の方に向き直り頭を下げてくる。

「ちよっ！？恭也さんやめてください。俺は、俺も気付けたのはあの日、ようやくでしたから。ただの八つ当たりの様なものだったんですよ…」

「それでもだ。それに、謝らないとな済まなかった」

上げた顔をまた下げた。

「…謝られるようなことになりましたっけ？」

なぜ謝られているのかがわからん、いったい何なんだ？

「…いや。護るものは、別に家族と決まってる訳でもないのに、俺は…」

「ああ…」

そう言えば、そんな事を言われたな。確か…。

『お前にわかるか!!!…家族を背負う、護らなくてはいけない立場にある、俺の重圧がっつ!!!』

てやつだったか。

「別に、ほんとのことですよし…」

「いや、いくら俺が一杯一杯だったからと言って、あんなこと

う〜ん困ったな。このまま謝られ倒されても、俺の居心地が悪くなるだけなんだがな…。

「ほんと、いいんですよ。まだ、家族を護ることはできますから」

「……？」

恭也さんが疑問符を浮かべた顔を上げる。

「ぶつ。俺にとってはあんたたち高町家やレンさんも、もう勝手

に家族だと思ってるんですけどね」

「な!?!」

疑問顔が吹き飛び、恭也さんの顔には驚きが張り付く。

「あれ、迷惑だったか?」

それなら拙いな。むくこの空気がさらに悪くなりそうだ。

ここは一発ユーノの入った桶を沈めて笑いを取るか……。……いや無理か。

そんなアホな事を考えていたら。

「はは……はははははは!?!」

「うわっ、なんですか恭也さん」

この人、いきなり笑い出したよ。頭のネジでもどっかに落としたか?

「ははは……。いや悪い。お前の言葉を聞いて、この三年間、俺がなにに悩んでいたのかバカらしくなってな。……はあく家族か」

「いや……ですか?」

俺は自分でも驚くほど不安げな声が出た。

「いいや、全然かまわん。と、言うより、大歓迎だよ。俺は妹が

いるけど弟が居ないからな、嬉しいよ」

「っ！……ありがとうございます」

「家族なら敬語も、名前にさん付けもいらないだろ」

そう言ってくれたのは、本当に嬉しい限りだ。

「そうだな、じゃあ呼び方だけ……」

「じゃあ兄さん、俺はちょっと向こう見てくるよ」

「ああ、気をつけろよ」

はい、こんな感じの呼び方になったよ。一度冗談でお兄さんって言ったら……。『なのはやらん！……』って、本気で怒鳴られて、諫めるのに少々時間を要した。

「真耶、どうしたの？こんなところで」

「ん？待ち人が居るんだよ」

「？」

俺とユーノは今、縁側みたいになつて居る所に座っている。

少しするとなのは達がキヤイキヤイ話しながら歩いてくるのが聞こえる。

「あ、真耶さん、ユーノ君」

すずかちゃんも初めに気付き、こちらに声を掛けてくる。

「よ、お三方。温泉はどうだった？」

「気持ちよかったわ」

「うん」

俺の問いにアリサとなのはが答える。

「そうか、…ん」

俺の後ろ、なのは達の進行方向から、フェイトによく似た、だがちよつと違う魔力が近づいてくる。

おそらくアルフが来たのだろう。

敵が三人固まっているところに一人でくるとは、自殺志願者なのだろうか？

「は〜い、おチビちゃんたち」

そう言いながら近づいてくる。俺は半分だけ振り向き、横目で相手を確認する。

「…君かね、家の子をアレしてくれちゃってるのは」

…頭の悪い日本語だよな〜。代名詞使いすぎだろ。

「え、ええ？」

「あんま賢そうでも強そうでもないし…。ただのガキンチョに見えるんだけどな？」

顔をなのはに寄せるところで、アルフが後ろの方に引っ張られて尻もちをつく。

「うわっ！何すんだ…い？」

「……………アルフ、他の人の、迷惑」

アルフの後ろに、その襟首をひっぱた紅髪の少年が居た。

「あ、あなたは」

なのも気付いたようだ。

「なのは、知り合い？」

アリサは二人を睨むように見てなのはに問う。

「…………ごめん、人違い」

「…ん、ごめん、知ってる子によく似てたもんでさ」

それに答えたのは少年とアルフだった。

「…あは、そうだったんですか」

なのは少し安堵したように呟く。

「…………じゃ、お騒がせしました」

『今のところは挨拶だけね』

今の念話でなのは顔色が変わる。てか、俺は空気に溶け込んでたけどすっかり見つけてたみたいだな。こっちにも念話を流してきたか。

それに、紅髪もこちらを見てから、アルフを引きずってなのは達の後ろへ歩いてく。

『子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね、おいたが過ぎるとガブツといくわよ』

…………アルフよ。紅髪に引きずられながらそんなこと言っても、まったく迫力がないんだが。

『なのは、真耶』

『うん』

二人も、あの紅いのが居たことで気付いたんだろう。フェイトがいると…。

その後、なんだかアリサ嬢がギャアギャア言ってるな。

「アリサ、そんなにギヤイギヤイ騒ぐな。さっきの人と変わらな
いぞっ。」

「む〜〜〜〜」

とりあえず収まったかな…。

「それじゃ、私はもう一風呂行ってこようかね」

「……………僕は、フェイトのほうに、行ってくる」

「はい、おやすみなさね」

「……………(コク)」

なのは達から離れてから、紅髪の少年一真と、アルフはそう話してから別れた。

side・一真

『ああ、もしもしフェイト？こちらアルフ』

『…うん』

一真が森を歩いていると、アルフからの念話が聞こえてきた。

『ちょっと見てきたよ？例の白い子』

わっきの子の話のようだ。

『そう、どうだった？』

『うん。…まあ、どおってことないね、フェイトの敵じゃないよ』

『そう。こつちもだいぶ進展、次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できてきた。今夜にでも捕獲できると思うよ？』

「……………」

フェイトはまた無茶をしたのかな。休まず広範囲のサーチをしてるし…。やっぱり無理やりにも休ませるべきだったかな？

『一真の方は？』

『……特に、これと違ってないよ』

『そう、じゃあ夜にまた落ち合おう』

そう言っただけで話は切れたけど……。

「……残念だけど、僕はもう来た」

「へ……？」

僕が声を掛けると、フェイトは驚いた風に木の下を……僕の方を向
き。……急いで降りてきた。

「ど、どしたの？一真」

「……？」

別に木の上でもよかったのに、なんで降りて来たんだろう？それ
に、顔も赤いし、やっぱりちゃんと休ませないと……。

「……これ」

「？これ、なに？」

僕は持っていたビニール袋を渡す。

「……ごほん、しっかり、取らないと、ダメ。……だよ？」

「あ……、ありがとう、一真」

フェイトは中身を確認してちよつと声を出して、お礼を言ってくれた。

「……ちよつとは、休む。今は、僕が捜しておく、から」

「え……でも」

「……いいから、休むの」

ちよつと声を大きくする。

「うん、わかったよ。ありがと、一真」

その甲斐あつてか、フェイトは休むことにしてくれた。

僕とフェイトは木に寄り掛かって座り。

フェイトはご飯を、僕は、ジュエルシードのサーチをする。

そんな、穏やかなときが流れた。

Side - out

夜になり、ファリンさんがなのは達に本を読んでいるとき。

「そういえば…」

大人たちが酒盛りしてるところに俺も入り（もちろんジュース）、話しているとき、俺はふっと思いつかんだことがあり呟いた。

その呟きが、戦闘民族と吸血種の人外の耳に届いたようで、みなさんこちらに向いた。なので言うことにした。

「俺、恭也さんを兄さん、って呼ぶことにしたんですけどね？」

俺の言葉に、あのことを知っている土郎さんとかは、ちょっと驚いたようだけど、嬉しそうに笑ってくれていた。

そして、次の俺の言葉で恭也さんから笑顔は吹き飛ぶ。

「…俺、忍さんを“義姉さん”、って呼んだ方がいいんですかね？」

「ブツッ！！！」

うわ…。兄さんが盛大に吹いた。

「…………汚いですよ、兄さん」

「お前がいきなり“そんな事”を言うから…………！！！！」

ん、微妙にハズいな。

こんな感じで話は続いていった。

もちろんその後、お見上げを見てきた美由紀さんも入り、姉さんとなったとき。

夜も更け、皆が寝静まってから俺は、森へと足を向けた。

歩いていくと、魔力を感じる。おそらくあの三人だろうと、そんな時。一つがゆっくりこちらに近づいてくる。

「…アイツかな」

大体の当たりをを付ける。

木が少し開けた場所に、俺たち二人は示し合わせたように出てきた。

「よお、昏間ぶりだな」

「……（コク）」

相変わらずの無口だな。

「とりあえず聞いてく。…やるのか？」

「……そっちが、フェイトの邪魔、するなら」

「…そうかい」

そう言った後、俺は眼を変化させて『写輪眼』に、左腕を『弓兵の左腕』に変化させる。

「…牡簀かきかけ闔とほす総光の門??？」

俺の準備と共に、相手は言霊を紡ぐ。

「…七惑しちわく七星しちせつが招きたる、由来ゆらい艸阜そつふの勢??？」

少年の和服姿には似合わない、左手首のブレスレットが光る。

「…巨門こもん零零れいれい、急ぎて律令の如く成せ??？」

そして、そのブレスレットに魔法陣が展開し、そこから黒い柄が出てくる。

「…千歳ちもの儔かた、小鳥丸こま天国」

それを引き抜く。その刀は、これまで二回対峙してきて、二回ともこの刀で相手をされた。

漆黒の刀。

「トレース・オン
投影開始」

俺は、白と黒、雌雄一对の剣で相對する。

「……………」

「……………」

剣技では向こうの方が上だと、この前の戦闘で確認している。ならば、“戦い”で勝てばいい。

彼の錬鉄の英雄のように、あそこまで熟練はされていない。…だが、負けるつもりもない。

「はあっ!」

「……………ふっ」

俺たちは、再び剣を交える。

甲高い、金属と金属を打ち合わせた音が鳴り響く。

「……………はっ」

「はああっっ!」

奴の剣はどこまでも鋭い。ただ自分の護るもののためにその剣を振るい、俺を斬りにくる。

だが、俺もここでは終われない。

「…ん！」

「チツ！」

莫耶を碎かれる。今ので三回目、左右合計五回目だ。

「はあっ!!！」

だが、碎かれた瞬間に柄を離し、再度莫耶を投影する。

まだまだ、まだ基本骨子の想定が甘い。

こんなモノではすぐにこいつの剣ツバキによって碎かれる。

「…はあ！」

紅髪の横薙ぎを剣をクロスして防ぐ。

紅髪の苛烈にして流麗な剣技を、ただ双剣で防ぎカウンターを仕掛ける。

その攻防は、紅髪の後ろから青い柱が立ち昇り一時中断される。

「封印が完了したようだな」

「……………（コク）」

俺の言葉に構えを解かずに頷く。

「じゃ、歩いて向こうに行くか」

「……………？」

何故か首を傾げられた。

「いや、歩いて行けばちょうどなのはとフェイトの戦いも終わると思うからよ、もう戦う必要なくねえか？」

「……………」

長い沈黙の後、『小烏丸』の切っ先を下ろした。

俺たちは無言で並び歩いていく。

そんなときふと思い出した大事なことを聞いてみた。

「お前って結局誰の転生者なんだ？」

……………

時が止まったかのような沈黙の後…。

「……………聞いてないの？」

「はあ？」

こいつの話によると、こいつを転生した奴はメルに言っただけらしいが、俺はメルから全く聞いてない。

それを教えたら。

「……………それでも、今頃聞くの？」

「うっ…！」

いや、忘れていたわけじゃないんだ。聞くタイミングが無くて先延ばしになってただけだ…。

「……………とりあえず、教えとく、僕は…っ！？」

「ん…？」

言おうとしたら、いきなり口が閉じられた。

「どうしたんだ？」

「……………刻ときが来るまで、言っなな、だってて」

「なんだそりゃ…！」

いったい何なんだよ。……………とりあえずもう一つの方聞いとくか。

「なあ、名前教えてくんねえか？」

「……………なんで？」

ん〜、なんでか。

「一々お前とか何とかよりも、しっかりお前の名前を言いたいたいんだけど？」

出来るだけ笑みを作っていつてやる。

「……………」

またもや沈黙。まさかこっちもか？

「……………僕のこと、女だと、思ってる？」

そんなことを言われた、て、へ？

「いや、男だろ」

「……………そう」

そう言ってから少し黙り、口を開く。

「……………幸坂 一真（こじつさか かずま）」

ボソッと呟くように言った。

「そっか。俺は臯月 真耶。まあ、よろしくな幸坂」

「…………ん」

幸坂は頷き、先を歩いていく。夜の暗がりですら幸坂の顔は見えないが、赤くなっていたか？

「よくわかんねえ奴だな」

俺たちはその後、無言で自分たちの護るべき者が居る所に歩いていく。

そこに着くと。

「名前…、あなたの名前は!？」

「…フェイト。フェイト・テストロッサ」

「わたしは…っ」

ちょうどフェイトとなのはが話しているところだった。

「じゃあな、幸坂」

「…ん」

俺たちは短く言葉を交わし別れる。

幸坂はフェイトの元に、俺はなのはの方に向かう。

「なのは」

「真耶おにいちゃん…」

俺を呼ぶ声も、いつもよりトーンが落ちている。

「…ごめんなさい。ジュエルシード、取られちゃった」

「んなことはいいから。お前は、怪我とかないのか？」

わかっているが、一応聞いておく。

「…うん、怪我とかは、大丈夫」

「そつか、よかった。ジュエルシードより、俺はお前の体の方が心配だからな。な、ユーノ」

近づいてきていたユーノに話を振る。

「うん、そうだね。いくらジュエルシードが早く集めなくちゃいけないものでも、なのはの体が壊れちゃ意味ないもんね」

「うん、そうなんだけど…」

ユーノのフォローが入っても、やはり沈んだままだ。

はあ、こいつはほんとに小3か？

「…あのな、なのは」

なのはの正面で腰を落として目線を合わせる。

「過去を振り返るな。とわ言わない、けど。過去に縛られちゃダメだぞ」

「え…？」

俺の言葉に首をかしげる。

「人は、後ろじゃなくて、しっかり前を向いて生きていく生き物だ」

俺はこいつの心にしっかりと届くように、響くように言葉を紡いでいく。

「でも、ときには後ろが気になって振り向くときがある。そのときに、過去の自分を見て、それに心が囚われたらダメなんだ」

「……」

なのはは、俺の言葉をしっかりと聞いている。

「だから、今回も。一つの過去として、次にチャンスを見つければいい。だから、そうへこむな」

「……」

「……」

俺はなのはの頭に手を置き、ワシヤワシヤと撫でる。

「そんなじゃ、さつさと帰るぞ。お前ら気配消すの下手だからな、父さんと兄さんには気付かれてると思うぞ?。」

「……………ふえ!?!」

「だから、少しでも早く帰るぞ。」

俺はそういつて走り出す。

「わ、わ!ちょっと待ってよ!」

「あ!二人とも待って!」

俺たちは走る。未来に向かって、きつと俺の未来は、こいつと一緒に居ることが多いだろう。だから、俺の手が届く範囲、こいつを護る。

「ほらほらいそげ!」

「わ、おにいちゃんっ!ほんと、ちょっと待ってよ!」

こいつの笑顔は、俺が護り抜く……………。

第12話 温泉？おなまえ？（後書き）

はい、一真のフルネームが登場です。

それにしても、今回の真耶VS一真は簡潔過ぎますかね？
でもどうしようもありません。これも私の技量不足…。orz
誰か文オプリーーーーーズ！！

それでは、次回 第13話 親友？しりあい？
その力は、戦うために…。

モンハン楽しいー！

主人公設定2（前書き）

一真についての詳しい内容です。

彼も一応二人目の主人公なので投下。

出番が今はまだ全然ですが、これから増えていきます。………たぶん。

それでは、どうぞ。

主人公設定2

幸坂 一真（こうさか かずま） 9歳 男

137? 38?

容姿は11eyesの美鈴と、恋姫無双の呂布を足して2で割った感じ。

つまりは男の娘。

髪も上と同様、紅いストレートな長髪に二本の触覚が生えてる。

眼は青い。

服装は、バリアジャケットも私服も、黒いシャツとズボンの上から和服を羽織っている。

性格は温厚、やると決めたことは何が何でもやりとおす。喋り方が独特。

前世では、15で剣術の達人の域まで上り詰める。

だが、その性で周りとは軋轢が出来上がる。

享年17歳。

一真を転生したのは、メルやロキとは別人でまだ秘密。

小学校には通っていて、なのは達とは実はクラスメイト。なのはが気付かなかったのは、一真が気付かれないようにしてたから。

ステータス

筋力C (B)

耐久E (D)

敏捷B (A)

魔力A A (なのは風)

幸運D

手前は普通の状態、カッコ内は魔力強化時。

能力

『草壁五宝』

11eyesで、草壁家に代々伝わっていた宝刀。

『小烏丸天国』

平家一族の家宝。その名の通り、漆黒の刀身で反りが浅く、両刃になっている。妖力を溜めることができる。この話では魔力を溜めこんでいる。

『火車切広光』

火車を斬ったとされる上杉謙信の愛刀。その身に炎を宿す三尺（約1,5m）の大太刀。

『雷切』

立花道雪が雷を斬ったといわれる刀。電撃を放つ刀で遠近両用で使え、相手の攻撃も防ぐことのできる凡庸性の高さがある。

『鉋切長光』

堅田又五郎が、大工に化けた妖怪を鉋ごと斬ったとされる刀。五宝の中で最も刀身が固く、刀の長さを変形でき、暗器も仕込んであ

る。

『真打・童子切安綱』

天下五剣の一振り。使い手の血肉を糧に力を発揮する。捧げた血肉の量で発揮する力は増大するが、その状態で長時間いると神経と肉体を刀自体に蝕まれて、取りこまれししまう。五宝最強の一振り。

デバイス

『クサカベ』

上の五宝が収納されているストレージ型デバイス。一直の声帯スキャンと言霊によって出す刀を選択する。

主人公設定2（後書き）

こんな感じですね。

彼はよく女の子と間違われますが、列記とした男の娘です。

それでは、また次回お会いしましょう。

第13話 親友？しりあい？（前書き）

前回と比べると短いです。

というか、前回が自分としては長かったんですよ。

今回は一真視点が多めに入っています。

それでは、転生者の闘争お楽しみください。

第13話 親友？しりあい？

side・一真

「いい加減にしなさいよっ……！」

そんな怒声が教室内に響く。

僕は教室の窓際、後ろから二番目の席からその怒声が聞こえたほうに眼を向ける。

「この間から何話してもぼーっとして」

「……ごめんね、アリサちゃん」

「ごめんじゃない！あたしたちと話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもぼーっとしてなさいよ！」

……あれは確か、この学年屈指の仲良しな三人組みだったはずだ。

その内の一人、アリサ・バニングスが、もう一人、月村すずかに声を掛けて教室から出ていく。

それを、最後の一人にして、フェイトや僕と敵対関係にある少女、高町なのはは寂しそうな顔で見送った。

僕はそれを見てから、午後の授業をサボるために屋上に向かった。

「やっぱりアリサちゃんも、なのはちゃんのこと好きなんだよね」

「そんなの当たり前じゃないの！」

階段を通りかかるとそんな声が聞こえて、そちらに向くと、階下にいるアリサとすずかが階段から身を乗り出して話しているところだった。

今のところだけ聞くと…。

そんな思考が過ぎる。けどすぐにその考えを消す。少女たちの素晴らしき友情を汚したくはない。

「あ、え〜と。あなたは…」

そんなとき、すずかが僕に気が付いたようで声を掛けてきた。

「……………あ、ごめん、聞く気は、なかったんだけど。ここ、通るところだったから」

「いえ、こんなところで話してたのはわたしたちですから」

僕の言葉にやりわりそう返してくる。

「すずか？誰とはなして…て、あ…」

「……………？」

アリスが僕の顔を見て固まった。

僕の顔になにか付いているのだろうか。

「……………ん？」

「あ、別に顔にはなにも付いてないですよ？」

「……………そ。じゃあ、なに？」

僕が顔を手で探っていたら、すずかが僕の意図を察してくれたらしく止めてくれた。

「…あんだ、忘れたの？」

「……………？」

アリスが僕に聞いてくる。

僕が何かを忘れている？

僕が懸命に頭の中を捜していくが、まったく出てこない。

そんな僕に声を掛けたのは、またもやアリサ。

「2年前の事…。」

「……ああ、そのこと。覚えてるよ？」

なにを言うかと思えば、そのことか、まだ気にしてたんだ。

「……覚えてるよ、って。なんとも思わないの？あの後、あたしすごく悩んだんだけど」

少しキョトンとしてから呆れたように返してくる。

「すずかはちょっと居すらそう。」

「……あれは、特に君が気にかけるような、ものじゃないよ」

「でもっ—」

ほんと、意地っ張りだ。

この子と初めて会ったのは、“こちら”の親に連れてこられて海鳴に来た次の日だったかな。

アリサと会わされて、友達になった。

その時確信した。この世界がなのは世界だっことを。

そして、2年前。

僕は二回目の小学生。アリサは初めての小学生になる直前。

けどそんな時。僕の“こちら”での親が死んだとか。

それで、その形見の指輪をネックレスとしてかけていた。

そして、あの日。

アリサと遊び、なにかが切っ掛けでアリサを怒らせて、突き飛ばされた。

子供の力だ。“あの人（神）”に力を貰った僕にとってはどうともない力。

けれど、その拍子にネックレスが飛んでった。

その後、見つかることはなかった…。

アリサが言ってるのはこのことだろう。

この直後から、アリサとは会わなくなっただけな。

おそらく、会わせる顔がないとか、そういうことなのだろうけど。

ほんと、意地っ張りだ。この2年間、ずっと張り通した意地。

けれど、そんなの必要ない。

「……………」

「……………」

「……………」

僕たちに少し沈黙が下りる。

そして、僕は踊り場のアリサまで無音で近づき。

「……………」

「…っ!?!?」

抱きしめる。そして、耳元で言い聞かせる。

「……………大丈夫。怒ったりなんて、してない」

「でもっ、だって!」

まだ、駄々をこねている。

「……………だから、なんとも、思っていない。…それとも、僕の言葉、信用はできない?」

「そんなわけない!」

即答だ。うん、嬉しいね。

「……じゃ、信じて」

「……………うん」

長い沈黙の後、アリサは首を縦に振る。
それを確認し離す。

「あ……」

?どうしたのだろうか。アリサの顔が真っ赤だ。

それよりも、今は言っておくことことを言おう。

「……アリサ。こうやって、人は、人の心を知る。だから、黙ってたら、ダメ」

「……う、うん」

もう一度首肯する。

そして後ろを見てみると、すずかが居なかった。

なんでだろう?

「…なのは」

「…アリサちゃん？」

放課後、アリサはなのはに話をしにいった。

おそらく大丈夫だろう。

僕はさっさとフェイトの処に行くことにした。

「……………あ、フェイト」

「一真、今から私たちは行くよ」

ちょうどマンションから出てきたフェイトと会った。

「……………じゃ、僕も」

「…うん、ありがとう」

たぶん、今日は、フェイトが無茶をする日。止める。

フェイトは、僕が、護る…。

s i d e · o u t

side - 真耶

今日は確か次元震が発生する日だから、なのはがアリサに怒られて帰ってくるだろう。

と思っていたら、意外と表情は暗くないようだ。はて、何かあったのだろうか？

「真耶、どうしたの？」

「…ん？いや別に」

俺が隣を歩くなのはを見ているのに気付いた、俺の肩に乗っているユーノが声を掛けてきた。

今俺たちは街のなかを搜索中だ。

だが、そろそろなのははタイムアップか。

「あゝ、タイムアウトかもお」

なのはもそれに気付いたようだ。

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し捜してくから」

なのはの言葉にユーノが答える。それに俺も口を開ける。

「だな、俺も今日は大丈夫だから捜せるしな」

「あれ？真耶おにいちゃんは何んで？」

「今日はレンさんは友達の家に行くとかでないから、俺は家に帰っても一人なわけ。高町家にはこのこと話してないから、夕飯に連れ込まれるってこともないだろうからな」

一人だったから軽く飯は済ませてある。

「そうなんだ…じゃあ私はかえるね」

「あ、晩御飯残しといてよ？なのは」

「うん、気を付けてね」

なのははそう言って走って行った。

「それじゃ、行きますか」

「うん」

俺たち二人（一人と一匹）も反対側に歩いていく。

さてさて、今日はイレギュラーが起きないことを願いますか。

side - out

side - 一真

僕たちは夜のビルの屋上に降り立つ。

「だいたいこの辺りだと思っただけど…、大まかな位置しかわからないんだ」

「確かに、これだけゴミゴミしてたら、探すのも一苦労だあ〜ね」

僕の隣で二人が話している。

僕はただ眼下で忙しく歩き回る人たちを見下ろす。

今日のフェイトの無茶をどうやって止めるか、今僕の頭の中はフル回転中だ。

と、考え込んでいると。横から魔力の光を感じて横を向く。

その毛並みと同じ橙色の魔法陣を展開し、魔力流を打ち込もうと

しているアルフがいた。

空に雲が漂い月が隠れる。

雷が落ち、そこから魔力の柱が昇る。

「見つけた！」

「けど、あっちも近くに居るみたいだあねえ」

そのアルフの言葉通り、街に結界が張られていく。

あの淫獣となのは、それに、僕とは違う転生者の、名前は確か…
皐月真耶。

この三人は近くに来ているんだろう。

「……封印、頑張つて、僕は行ってくるから」

「あ、うん。気を付けてね？」

フェイトが心配そうに聞いてくる。

僕はそれに笑みを返して大丈夫であることを伝えて、ビルから飛び立つ。

side - out

Side - 真耶

ジュエルシードを強制発動させたな。

「…ユーノ、お前はなのはに合流しろ」

「真耶は？」

「俺はお客さんの接待」

そう言い終わると、空から紅髪で和服姿の少年。幸坂一真が下りてくる。

「…わかった、気を付けて」

「そつちよりは安全だつっの」

ユーノに返してから体の構成を変える。

眼を『写輪眼』。右腕を『変化した右腕』に変える。

「……………」

幸坂は、すでに出していた刀。草壁五宝最硬を誇る一振り、『鉋切長光』を構える。

その刀はその長さは普通の刀より短く、大半が柄という一見槍のようなもの。だが、その本当の姿はその可変機能により不意打ちを狙う刀。確か暗器も付いていた筈だ。

その刀は大概のものは切り裂ける。

だが、この右腕は切ることにはかなわないだろう。

守りの力を宿したこの右腕なら受けられる。そう踏んで選んだ武装だ。

「さあ、いくぞ！」

「……くっ」

三度、俺たちはぶつかると。

これまでには剣と剣による斬撃の音が響いていたが、今回はお互いの“武器”での鈍い衝突音が響く。

「……くっ」

「はあああああ！！！！」

幸坂の『鉋切』を右腕でからめ取りながら左腕の掌底で弾き飛ばす。

俺の本気はこの舞台。相手が武器を持った状態での肉弾戦。

しかも、相手は切ることに特化した刀。槍などよりもやり易いところの上ない。

「ふっ、はぁぁ！」

「……ん！はぁ！」

正面から俺の『右腕』と『鉋切』が衝突する。

俺たちの戦いがおよそ三十合に差し掛かったときに、膨大な魔力の放出を感じた。

「来たか！」

「……………」

俺と幸坂は示し合わせたように同時に、ジュエルシードのある場所。

俺たちが護るべき者がいる場所へと走っていく。

俺たちが着くとちょうどフェイトがジュエルシードに跳びかかっている処だった。

「…っ！はあ！」

「え…？」

隣の幸坂が俺と同様に走りながら、その手にあった『鉋切』を投げた。

その『鉋切』はちょうどフェイトとジュエルシードの間に“垂直”に突き刺さった。

「え？」

向こうのフェイトの混乱しているが、今は構ってらんないな。

「幸坂、あれ止めれるか？」

まずはあれを止めないと。

「…できなくない、けどちょっと出力が足りなくて、周りに被害がでる」

そののやり方を聞き…。

「よし、いいやれ」

ゴーサインを出す。

「……………わかった」

いつもより長い間の後了承した。

「????????七惑七星が招きたる由来艸阜の勢」

すでに呪しゅを紡いでいる。

「…文曲零零、急ぎて律令の如く成せ?????」

俺はそれを聞きながらジュエルシードに走っていく。

「…千歳の儔、雷切」

幸坂が『雷切』を出し、それをさらに“投げる”。

「連ねて来たれ、火車切広光、小烏丸天国、真打・童子切安綱」

今出された全ても投げられ、ジュエルシードを中心に五角形に突き刺さる。

その時にジュエルシードの力も解放されかけるが、俺が右手で掴み無理やり抑え込む。

「つくー!?!?」

幸坂の『鉋切』でも切り裂けなかったこの『右腕』が、ジュエルシードの魔力暴走で裂けて血が出る。

「????????????????我が血と共に、彼方に失せよ、五行封印!」

幸坂は、自分の親指を歯で傷をつけ、そこから出てくる血で足元

に『陣』を描き、そこに手を付け最後の呪を唱えた。

これにより、俺の周りにある五宝の力を引きだし、ジュエルシードを抑え込む。

俺も右腕にさらに力を流し込む。

「はあああああああ！！！！」

意識は保つ、無理にでも保つ。

そして、光が収まり、俺の掌の中に物言わぬ石ころが残った。

「……たはあ〜」

思いつきり息を吐き、その場に座り込む。

「……お疲れ」

「お前も、な」

幸坂が近づいてきて、五宝を回収していく。

俺は一度ジュエルシードを見て。

「……ほれ、これやるよ」

「……………え」

「な!？」

それを幸坂に投げ渡す。

投げられたそれを、幸坂は片手で受け止める。

「……………いいの？」

「いいいいの、お前が居なきゃ抑えられなかったしな…」

悔しい限りだ。

「……………そう。もらっておく」

そう言って踵を返しフェイトの方に歩いていく。

「真耶!どうして…!」

さっき驚愕の声を出したユーノがこちらに来た。

「だから、今の聞こえなかったか?あいつが居なけりゃ抑えられなかったし、俺らがやらんでも、フェイトが抑え込めた筈だぞ?」

「う、でも」

「はいはい、悪かったって」

まだ食いついてくるユーノを避けて、俺はふら付きながら立ち上がる。

そして、さっきのことについて考える。

さっきはああ言ったけど、おそらくあれはフェイトには抑えられなかった。

ジュエルシードを掴んでいた右手を見る。

「……っっ」

そこは手ひどく火傷と切り傷が無数にできていた。

もう少し封印が遅かったら、俺の右腕はミンチになっていただろう。

やはりジュエルシードは強力になっている。

明日は確か公園で樹とか。

ま、いくら強くなるのが、護るものは変わらない。何とかならあな。

「ほら、なのは。帰るぞ?」

「…あ。…っん」

「ちょ、ちょっと!?!真耶!?!」

ユーノも後を追ってくる。

そう、護りぬく、誓いは違えない。そのためには、もっと力を付けないとな…。

あ、次ク口助が来るんだったな。すっかり忘れてたぜ…。

第13話 親友？しりあい？（後書き）

駄文過ぎますね…。

とりあえず戦闘をもっとどっにかしたいですね。

それでは、次回 第14話 空気？よめ？

その力は、戦うために…。

第14話 空気？よめ？（前書き）

投下です。

今回は我らがKY執務官殿の登場です。

ま、作者はそこまで嫌いじゃないんですけど、やはりネタ不足なのでKYにさせてもらいます。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第14話 空気？よめ？

次の日。

「うー、こいつは無理かな？」

昨日の無理矢理の封印のせいで右掌がズタズタになったので、右腕だけ型月の死徒に変化させて寝たのだが…。

「そうみたいやな…、じゃうちは行くから、しっかり寝てること
や」

「…うーい」

俺は今ベットで寝っころがっている。

おそらく昨日のジュエルシードのせいだが。まあ大丈夫だろう。

熱が38.8度出たとしても大丈夫だろう。

右掌が未だに治りきっていなくても大丈夫。……の、はず。

とりあえず寝ておこう。

昨日、家に帰るとき、なのはやはり落ち込んでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

俺ら三人は沈黙を保ったまま家へと帰り着く、なのはを見ていると。

「……………」

やはり顔を俯けたままだ。

たぶん自分のせいでレイジングハートをあそこまで壊してしまった。…とかなんとか考えているのだろう。

「…また明日な」

「……………うん」

俺はそう言って、なのはの頭に一度ポンツ、と左の手を乗せてから家に向かった。

それから風呂に入らず手を変化させて寝たのだ。

そして今日になってみたらこの状態だったわけだ。

「…とりあえず今日は、夕方までに治せれば大丈夫、だろう」
俺はそう呟き眠りに落ちた。

「ふい〜〜〜〜〜」

風呂に入り終えてちよつと寛ぐ。

今は午後の2時に差し掛かるころ。

朝の事が嘘のように熱は下がり、右手の傷は塞がった。

さて、これからは、着替えて時間になったら公園に行きや良いだろう。

とりあえず着替える。着替えると言っても、訓練着以外は制服しかないからそれに着替えて外に出る。

とりあえず歩いていると…。

「……………」

「…あれ？」

何故か前から見覚えのある、和服姿の少年が歩いてくる。

「幸坂？」

「……………あ」

「（…）何でこんなところに居るんだよ（居るの）？」

「……………」

同じことを思っていたようだ。それにしてもこいつ、学校行っていないのか？

……………考えても仕方ないから聞いてみるか。

「（…）学校はどうしたんだよ（どうしたの）？」

「……………」

またもやハモった。

「…ま、いつか。今の質問に答えると俺は今日休みだ」

「……………サボリ？」

「こいつは…。」

「聞こえなかったか？休みと言っただろ？」

「……………そ。…僕もだよ。休み」

「そうかい…」

たぶん、こいつも魔力の使いすぎとかだろう。

「…はあ。じゃあな」

俺は幸坂の横を通り過ぎて、後ろ手に手を振りながら歩いていく。
…行くうとした。

「……………待って」

「……………はあ？」

何故か呼び止められた。

こいつとは名前も教えあって、同じ転生者だが。今は一応、形だけは敵同士だし、別に病み上がりになり立ち話をするような関係になつた覚えはない。

だが、呼ばれたからには一応応対しとく。

「なんだ？」

「……………ちよつと、付き合っしてほしい」

……………はあ？

「…………で？なぜ俺はこんな所に着いて来なきゃならんだ」

「……………？」

俺たち二人は今、森の中のちょっとした広場?????つまりは俺がいつも修業している所?????に来ている。

何故俺たちがこんなところに居るのは、幸坂が「…………何処か、動き回れる所に、連れてって欲しい」と言ってきたからだ。

「はあ〜。おい幸坂、何でこんな場所…………」

俺の言葉は続かなかった。

「……………」

「うをお!？」

幸坂がいきなり、振り返り様にハイキックを繰り出してきたので、それを避けたからだ。

その速度、威力共に武道の達人級のレベルにあった。

それをわずかに漏れ出た闘気を感じ取り、すぐに『写輪眼』を発動して見切った。

「……てめえ。何しやがる」

「……？あれ、気付いてない？」

「なにがだよ……」

こいつは軽く人を吹き飛ばせる蹴りを放ってきてきて何を……。

「……ちょっと組手をして欲しいんだけど」

「…………はあ？」

かなり間が開いてようやく言葉が出てきた。

「……はあ……。そうならそうと言え。お前の心がわかる訳じゃねえんだよ」

「…………そう？」

幸坂は首を傾げて抜けぬけと言いやがる。

てか、こいつは。容姿がほぼ“美少女”と言ってもいいせいで、無表情が際立つし、こんな仕種も様になりやがる。

「…………」

「なわあっ！？」

何故かいきなり掌底が顎に向かって飛んできた。その威力も、お

そらくプロレスラーもK、Oできる程だろう。

「なにしゃがるっ！」

「……今、変なこと考えたでしょ」

「……………」

何で心が読めるんだ。

前世でもよくあった。

言ったら失礼になるなとわかることを考えたら、何故か幼馴染（女子）のハイキックが跳んで来たり、その親友（女子）の何処から出したか不明の木刀が頭をかち割に来たり。

後は、その又友人（女子）にはアッパーで何回も宙を舞わされた。更には武術の兄弟子、ていうか姉弟子には正拳突きで吹き飛ばされたりもした。

……………よく生き残れたな、俺。

てかこんなことがよく在ったのに、トラックに轢かれて死ぬってどうなってんだ？

そんな疑問が浮かぶが、目の前では既に幸坂が構えだしていた。

「……………やらなきゃだ」「…ダメ」「…さいですか」

とりあえず『写輪眼』のみを発動させる。

「……………」

「…ふう〜」

息を深く吐き、吸う。

そして相手以外を視界から外す。

半身になり、相手に掌を見せるような構えを取る。

「……………」

一時の静寂。数秒後、お互いが地を蹴る音によってその静寂は碎かれる。

「はあああっつー!!」

「……………ふうっ!!」

腕と腕が交差する。

そのまま何回か交差し離れる。

「すごいな、剣技だけじゃなくて徒手でもここまで出来るなんてな……………」

俺は軽く賞賛する。

「……………無手は、体捌きの基本になるから」

「なるほど……………」

そう考えてるのか。無手自体を戦う術にしてる俺とは違うんだよ

な。

「……けど、基本だけ、あなたには敵わない」

「?…そうか?」

まあ、過信するよりはいいんだろうな。

「……続ける」

「ああ」

何だかんだで俺もノリノリだな…。

日も傾いてきたので終了することにした。

「ん、午前中ずっと寝てたから、いい感じに体が解せたから助かったわ」

「……そう。…僕はただ無手の修業をしたかったただだから、礼を言われることはしてない」

……あれ? ツンデ『ブウォンッ!』

「…へ?」

目の前を幸坂の足が通り抜けた。

「……また」

「いや、誤解だ！特に何もこれっぽちもやましいことは考えてない！」

「……………そう」

幸坂は、たつぷり訝しみの眼を向けてから歩きだす。

「……………公園行かないと」

そう言って傾いてきた太陽を眼を細めて視ていた。

「……だな」

俺も幸坂の横に並んで歩いていく。

夕陽に染まった、非日常が始まる……。

「生意気に、バリアまで張るのかい」

俺たち二人が着いた時には、なのはとユーノ、フェイトとアルフが暴走体と対峙していた。

「じゃ、お互いの相方の方に行きますか」

「……。(コク)……クサカベ、バリアジャケット」

俺の言葉に幸坂は首を縦に振り、左手首に填めてあるブレスレット、デバイスに声を掛けて戦闘服、バリアジャケットに服を変える。……変えた、筈だ。

「…バリアジャケット着る意味あんのか？」

「……僕は、貴方ほど頑丈じゃない」

幸坂のバリアジャケットは、今着ていた服と同じ、つまり和服である。

「ま、いつか。とりあえず今は共闘だな」

「……。(コク)」

また頷く。

それを見てからなのはの方に走る。

「なのは!」

「おにいちゃん！」

俺がなのはに合流するとともに、暴走体は魔力により強化された根を地面から突き出してくる。

《フライヤーフィン》

それをなのはは空に飛んで避けて、俺は後ろに跳ぶ。

「さてと、今回はどんなイレギュラーがあるのかな…」

俺はそう言いながら“眼”の構成を変化させて…。両目に六芒星の魔法陣が描かれる。

午前に考えた結果、もうイレギュラーが在ると仮定した状態で戦闘に臨むことにした。

なので、世界のすべてを解き明かすと言われる『アルファ・ステイグマ複写眼』で相手を解き明かすことにした。

「…ん〜。あ…、うわぁメンドくせ〜」

つつい呟いてしまう。

何故かは…。原作ではバリアは一つなのに、これは三層のバリアで守られている。

「仕方ねえ…」

俺はそのすべてをぶち破るために、“右腕”を変化させる。

その腕は、アルフと同じような色の甲殻が張り付いているかのような腕。

そして右肩甲骨の辺りからは三枚の羽のようなものが突き出している。

それを見た幸坂が。

「……………それは、僕への嫌がらせ？」

とか呟いたが気にしない。

「さあ、喧嘩だ喧嘩！とことんやつぞ！！」

俺の右腕は、スクライドのカズマのアルター、『シエルブリット』の第一形態に変化する。

「幸坂！バリアは三枚だ。やるぞ！」

「……………ん」

俺の言葉に頷き。言の葉を紡ぐ。

「????????…四星零零、急ぎて律令の如く成せ」

その手に大太刀が握られる。

「…千歳の儔、火車切広光」

そして、引き抜くと同時に迫っていた根を切り裂く。

「なのは、それと…フェイト！」

俺の声に二人が反応する。

「俺らでバリアを潰す。封印は、任せた！」

返事を待たずに右肘を、肩甲骨から生えている羽の一本に叩き付けて叩き割り、それが魔力の推進剤となり俺が突っ込む。

その時にはすでに呪は紡がれる。

「…護身破敵と共に、尙災を除かむることを斯う???」

左の人差し指と中指を刀身に滑らしていく。
その指が通った個所が、赤く発熱していく。

「…神隠す十束の如く、火の結び、火車来来、焰羅に還さん！」

そして、すべてが赤く染まる。

それと共に俺はバリアに拳を叩き付ける。

「衝撃のお！ファーストブリットおおお!!!」

それが当たると共に、当たった個所を中心に空間が捻じれたような衝撃が周りに奔る。

ガシャンツ！という音とともにバリアが碎ける。

「よつと!」

砕いた瞬間に根が鞭のように振るわれる。

それを右腕で防いでその衝撃を利用して後ろに跳ぶ。

それと入れ替わりに幸坂が走りより、『火車切』を横に一閃する。

「…一の閃!」

その一閃でバリアが切り裂かれて砕ける。

「……ふっ」

幸坂はそのまま自分でバツクしてくる。

そして、さつきとは逆に俺が飛び出し、もう一度右肘を二枚目の羽に叩き付け割り、魔力の推進力で突っ込み拳をバリアに叩き付ける。

「撃滅のおおお!セカンドブリットおおお!!」

さつきの焼き増しのように空間が捻じれ、砕ける。

「…はあっ!」

そして俺は地面に拳を叩き付けて後ろに跳ぶ。

そして、ここもやり直しのように幸坂が飛び出していく。

しかしその動きが違い、左足を軸に回転し突っ込む。

「…二の閃！」

その勢いで突きを放つ。

トンツと、乾いた音がやけに響き、その突きが暴走体に突き立つ。

そして少し曲げていた膝を伸ばす勢いで、『火車切』を振り上げる。

「…三の、被^は！」

「?????????!?!?!」

その剣筋から炎が縦に奔る。

「二人とも、やれ!!」

「うん!!」

「……………」

二人が攻撃の構えを執り…。

「撃ちぬいて!デイバイン?????!」

《????バスター》

「貫け轟雷?????!」

《サンダースマッシャー》

桃色と金色の砲撃がジュエルシードに突き刺さり、光を放ち封印する。

光が収まりフェイトも空に上がる。

「…ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん、昨日みたいなことになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀そうだもんね…」

「……でも、譲れないから」

二人は、まだジュエルシードが浮かんでいるで、フェイトの言った通りに衝撃与えたらダメだってわかってるのに戦う気だ。

「はあ、あいつらは…」

「……仕方ない」

幸坂は諦観している。

「とりあえず、後はKY執務官殿に任せて、俺らはジュエルシードを守」
「…」

「…来た」

幸坂の言葉と共に、水色の魔法陣が二人の間に展開され、光の中から、我らがKY執務官、クロノ君が出てきた。

「ストップだ！」

二人のデバイスを受け止めて声を出す。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。…詳しい事情を聞かせて貰おうか」

さあ、ここからだ。どうやって俺たちに都合がいい協力関係にするかが問題なんだよな…。

ま、頑張りますか。

第14話 空気？よめ？（後書き）

さあ、物語も終盤に差し掛かってきました。

これからも生温く見守っていてください。

ここで読んでくださっている方たちにアンケートにご協力願いたい
です。

内容は。

アリシアの蘇生について…。

です。

彼女を生き返らるこの駄作者！

という方はAと、

いや、別にいいよ…。

という方はBとお答えください。

一応両方のストーリーを考えてあるのですが、どうもどちらにしても
いいか迷っています。

アリシアを生き返らせて私に全てのキャラを動かせるのだろうか、
という不安もあるのですが。

アリシア動かしてみたいな…。
という願望もあるんですね…。

なので、どうぞご協力をお願いします。

感想のほうにお願いします。

ユーザー縛りは外してありますのでお願いしまーす！

それでは、次回 第15話 管理局？よこやり？

その力は、戦うために…。

第15話 管理局？よこやり？（前書き）

投下します。

いつも通りの駄文ですが、生温く見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第15話 管理局？よこやり？

「まずは二人とも武器を収めるんだ」

我らがKY執務官殿登場と同時に、この場の真剣な空気が吹っ飛ばされた。

「…さすがだな。空気を乱すのが上手すぎる」

「……仕方ない。クロイのだから」

俺と幸坂は勝手に二人で話している。

俺らが話している間に三人とも地上に降りてくる。

「……………」

それと共に幸坂が身構える。おそらくクロノがフェイトを攻撃するところを防ぐつもりだろう。

そして、そのときクロノにオレンジ色の閃光が弾幕を張る。

「フェイト、一真！撤退するよ！」

アルフが声を掛ける。

「……………」

フェイトはその隙にジュエルシールドに飛びつく、その時…。

「…なっ！？こんな時にかよ」

「……………っ！」

いきなり転生者の反応が現れた。しかも、その数は五つ…。

「フェイト！！！」

「…あっ！」

それに一瞬だけ気を取られた隙に、フェイトが撃たれた。

「……………」

「幸坂！？」

それをアルフが上手く受け止める。

その瞬間。俺の隣から真紅の弾丸が飛び出した。

「……………」

「な、なんだお前は!?!」

クロノは幸坂のスピードが以上に速く、アイツが出している殺気に気圧される。

「…はあっ!?!」

「くっ!」

幸坂の『火車切』が縦に振るわれる。その時の幸坂の気合は、初めて聞く音量だった。

クロノはなんとか受け止めたが、デバイスの柄の半分ほどまで、刃が食い込んでいる。

「…っ!」

「…なあっ!?!」

それを幸坂は、デバイスを『火車切』の柄に引っ搔けて上に思いっきりかちあげる。

その衝撃でデバイスと刀が、両者の手元から離れる。

その状況に怯んでいるクロノとは違い、幸坂はそれが戦術に入っている。

掌底をクロノの腹に叩き付けると同時に、技の名を告げる。

「…絶唱????鬼哭掌！」

「ガッ????あああああ!!!」

クロノが吹き飛び木に叩き付けられる。

あれは幾らバリアジャケットを着ていても、骨の3、4本は逝っ
たな。

「…て、おい、幸坂！」

「……………」

幸坂は上に上げた『火車切』を掴み、そのままクロノに歩いてい
く。

「一真!?!」

フェイトが声を掛けても反応がない。

「たく…。この、バカっ！」

俺は走りより、幸坂に“右手”で拳骨を見舞う。

すると、普通ならあり得ない。ゴインッ、という音が鳴り響く。

「……………あ、やべ〜。『シエルブリット』のまんまだった…」

「……………」

幸坂は無言で俯いた状態になっている。

「おゝい……。幸坂？」

「……………いたい」

長い沈黙の後、幸坂が声を上げた。

「……………なにすんの？」

「それはこっちのセリフ…。お前、これ以上はやり過ぎ」

「……………？」

幸坂は俺の言葉を聞き、クロノの方を見て。

「……………あ」

小さく声を漏らした。

俺もため息を零して周りを見つめる。他の四人とも呆然としてい
る。

「あゝ、お前ら、いいから動け。先ずフェイト達はさっさと行け。
なのはとユーノはクロノ、その黒いの方で待機。幸坂…やるぞ」

俺の言葉で全員復活したようで、なのは達は言葉をかけてくる。

「え〜と、おにいちゃん、どうしたの？」

いつもと雰囲気微妙に違うのに気付いたのだろう、不安げに聞いてくる。

「…一真？」

フェイト嬢も同じの様だ。

「いいから、お前らは俺の言った通りにしとけ」

「……うん、フェイト達は、先に帰ってて」

「けど…！」

「……大丈夫」

一真の言葉に渋っていたら、フェイトとアルフの下に魔法陣が出来上がる。

「え！？」

「なんだいこれは!？」

「…じゃ、待ってて」

「一真！」

魔法陣が光、二人を強制的に転移させた。

「なのは、ユーノ。お前らもアッチ行ってろ、ちよいと危ないか

「うん」

「……うん」

「わかったけど……どうしたんだい？」

ユーノが疑問を投げかけてくる。

「え……とな……」

それに答えようとしたら、でかい剣が五本振ってきた。

「うをっ！」

「……！！」

「きゃあー！」

「うわあー！」

俺はなのはとユーノを抱えてクロノの方に跳ぶ。幸坂はバックステップで避ける。

「な、なに！？」

なのはが疑問の悲鳴を出す。

俺はクロノの傍に降り立ち、二人を下ろす。

「ここに居ろ、絶対に戦闘に入ってくるなよ？いいな？」

「う、うん」

なのはの言葉を聞き俺は飛び出し、幸坂の横に並び、その剣の傍に降り立った者たちを睨む。

「……え」

こんな声が出たのは仕方ないと思う。

さっきの大剣を見たときにもしかしたら、と思ったが……。まさかまんま来ると思わなかった。

「?????」

真っ白い鎧のようなバリアジャケット、露出している手も真っ白く、顔も白い。

と言うよりも、顔が人のモノではない。

まるで、人の顔と蛇を足して二で割った感じの頭。そして眼は確認できず。

その口がバツクリと裂けたように開いている。

「まさか、『エヴァ』とは……」

そう、来たのは『エヴァ』の量産型を人の大きさにしたもの。

しかも、その名の通り、五体とも同じなのだ。

「……面倒」

「だな、だけど何とかなるだろ」

幸坂と軽く言葉を交わし、構えを執る。

“眼”を『写輪眼』に変える。

「……………」

幸坂は『火車切』を握り直す。

『……………?????????!?!?!?!?!』

おそらく知能や自我が飛んでしまっているのだろう。言葉と認識
できる言語を話せず、叫びながら剣を振り上げ突っ込んでくる。

それに俺たち二人も突っ込む。

「やっぱり、量産型、だなっと」

「……………?????????!?!?!?!?!」

一匹の顔面を殴る。その量産型は吹っ飛ぶ。
まだ黒い粒子に還元はできないようだ。

「なら……、とことんやるまで」

五対二、本当なら不利な状況なのだが俺たち二人の方が押してる。

「……………はっ!」

顔を捉え腕が減り込む。

そして黒い粒子に分解される。

そんなのは今どうだっていい。

「おい！なのは！なのは！」

「…うん」

気絶しているだけのようだ…。

「よかった…ユーノこいつを頼む」

「う、うん!？」

ユーノが言葉を詰まらせる。

「…皐月!！」

幸坂が似合わない大声を上げる。

その声に反応して後ろを振り返ると…。

「?????????!?!?!?!?!」

“七体目”が大剣を振り下ろしていた。

油断した、背後に気が回っていなかった。

ここまで戦力を揃えてくると思わなかった。

『写輪眼』でしっかりと捉えている。

しかし、だから判る。“避けれない”と、理解できた。

そして、その剣が振り切られ。俺の右肩を切り落とした。

「ガッア!?!」

その直後、熱を伴って激痛が奔る。

「?????????!」

目の前でもう一度剣が振りあげられる。

俺は無理やり体を動かしながら、“眼”を気合だけで変化させる。

「ハアッ!?!」

その“眼”は、さっきの『アルファ・ステイグマ複写眼』と似ているが、描かれれているものは十字架。

『殲滅眼』、イーノ・ドゥーエ。

すべてを喰らいつくす眼。

俺は剣を振り上げている量産型の首と思われる場所を、左手で鷲掴みにして木に叩き付けて、眼を発動させる。

それは、ロキの力の断片だから。ヒトが体に宿せるようなものじゃない。

宿せるとすれば適正者位だろう。

だが、ただの適正者では、自我が崩壊したり、ヒトの形を保てなくなる。

今回の敵のように。

それを、真耶を体に吸収してしまった。

これからは彼の“強さ”が試される。

「真耶……。貴方は、堕ちないですよ？」

私には、ただ祈ることしかできない。

S i d e - o u t

僕は五体の敵を上手く捌いている。

一体一体の強さはそれほどでもない。しかし、やはり五体はちょっと多い。

「

????????????!!!!!!

」!

皐月が吠える。

いったいどうなってるのかが分からない。

腕を斬られたときはヒヤッとしたが、なんとか再生した。

その後だ。

七体目の量産型を吸収した後、皐月は絶叫を上げ、で苦しんでいる。

「…っ!」

「こっちも余り考えごとできない。なんとかしないと。」

「????????????……………」

そう考えていたら、皐月の声が聞こえなくなった。

横目に見てみると…。

「……………」

「…?」

なにも映していない、漆黒の眼でこちらを見ている。

いや、あれは本当に見ているのかわからない。

あの眼は、いつもの皐月の眼じゃない。

あの眼はまるで、すべてを飲み込む奈落のような穴だ。

「????????????」

皐月が何かを呟くのが辛うじて聞こえた。

その瞬間…。

「?????????????!?!」

白銀の、先端に槍のような刃が付いた鎖が、一体の両手足に一本ずつ。頭に三本突き刺さり木に礎にする。

「壊れ 幻 《ブロー ファンタ》」

また呟くと、その鎖が魔力による爆発を撒き散らし、一体を粒子に変えた。

「……………」

他の四体は皐月の方を見て警戒している。

僕も皐月を見る。

「投 始《トレ ン》」

その呪文と共に、その手に黒塗りの洋弓と、剣を無理やり矢にした歪なものがあり、それを弓に番える。

「偽・旋 ？《カラ・ボル》」

真名が解放され、空間を捻じ切りながら一体また粒子に変換する。

「 ?????? ?!?! 」

それを見た後三体は、その背に翼を生やして空に飛ぶ。

そこで、僕は違和感に気付いた。

「……………あれ？」

皐月の能力については、さっき聞いた。

身体の一部を異能に変える能力。

だが、今彼の右手は、“あの”鎖を放つための真っ白な右腕ではないし。あの宝具を使ったための左手も浅黒くない。

更には…。

「…す てを 壊」

掌台の魔法陣を展開し、レーザーのような光を出し、また一粒子に還った。

「??????」

また呪文が紡がれる。

「????????!!!!」

飛んでいた二体の翼と足と腕に剣や槍が突き刺さっている。

「……………」

皇月はそのまま歩いてくる。

「??????????」

さらに呪文を紡ぎ、剣や槍を爆発させる。

「????????????!!!!」

その痛みに体をよじる。だが、腕と足、翼も?がれ、ただその場でもがくだけ。

傷口からは黒い粒子が噴き出ている。

「瞬 の、ファ ナル リット」

その言葉と共に、足が振りあげられ踏みつぶされる。

「?????????????!?!」

そのまま粒子になって消える。

「?????…」

最後の一体に近寄り、左腕を振り上げる。

「魔の一 《ラ・エル》」

振り下ろし、頭を粉碎し、地面には骸骨のマークがデカく付く。

その技に必要な左腕は、皐月のものの儘だ。

「……一体…」

そう呟いたとき、左腕を振り下ろした状態だった皐月が動き、こちらを見て、虚空に視線を上げて静止した。

「…皐月？」

「……………」

呼びかけても反応がない。

一体どうなってるんだ…。

S i d e - o u t

S i d e - 真耶

……暗い。

意識が覚醒すると、そこは真つ黒な空間。

足はついておらず、浮いているような感覚がある。

ここがどこだかわからない。

わからないままに、光が差し、そちらに引っ張られる。

そして、光を抜けると。

「……うおわ!?!」

「……ん、戻った?」

目の前に幸坂の顔が在ってビビった。

て、どうなったんだ？

「おい、幸坂」

「……………」

首をかしげる。

「俺が気を失ってからどうした」

「……………え？」

なぜか疑問顔になった。

「覚えてない？」

「…なにを…」

こいつは何を言ってるんだ？

「……………覚えてないなら、いい。周りを見て、自分で考えて」

そう言っつて幸坂は転移していく。

言われた通り周りを見たら。

打っ倒れた木に、地面が抉れ、地面には小さなクレーターと、髑
體マークにデカデカと抉れた地面があった。

「……………え、なにこれ、怖い」

まったくわからない。

俺が混乱していると、目の前にモニターが映し出された。

「こんにちは、時空管理局アースラ艦長、リンディ・ハラオウンです」

「…日本語でお願いします」

リンディ艦長が自己紹介してくれるが、管理局云々は知らないふりをして置こう。

「え〜と、言葉は通じている筈のだけねど…」

俺の言葉に冷や汗を流すリンディさん。

「いや、時空要塞マクロスとか言われても困ります…」

「…次空管理局です」

「お〜、それぞれ」

俺は適当に返していく。

「それで、そちらに居る執務官はどうなったいるのかしら？…今ままで連絡がまったく取れなかったんですけど…」

戦闘中は結界が張られていたのか…。

「…黒いのだったら、そこで伸びてるけど？」

木の方を指さす。

「……そう、悪いのだけれど、人を送るからこちらに来ていただけませんか？」

「……………」

さて、どうしたもんか…。と悩むところだが、今はなのはこと
も心配だ。

「わかった。任せよう」

「ありがとうございます」

そう言ってモニターが閉じる。

それを確認してから、俺はなのは達の方に歩いていく。

今の疑問はまた考えよう、今は護るものを護りきれなかった後悔
がこの身に重圧を掛けている。

考えるのは、またにさせてもらう。

第15話 管理局？よこやり？（後書き）

カ「レーパン（以下・カ）」「第一回！後書きコーナー！！！」

真「耶（以下・真）」「いええええい！！！」

カ「このコーナーは、いつもこの作品でいつも戦ってくれているキヤラを呼んで駄弁るだけのコーナーです」

真「ドアホウツ！」（アツパー）

カ「ブツ！！！」

真「もっと、書けなかった事を書いたり、ウラ話を暴露したりあるだろうが」

カ「確かにそういうのも書く、しかし、これをやりたくなっただのは他の作者様を読んでやりたくなっただけだからそんなにないんだよ……」

真「…そんなことを暴露されても」

カ「え〜い黙れ黙れ！今日は店終いじゃー！」

真「はあ〜、それじゃ次回 第16話 乗船？けいやく？」

「その力は、戦うために……」

第16話 乗船？けいやく？（前書き）

はい、投稿ですよ。

なんだかダラダラと長くなったのに、特にオリジナル展開がないんですよね…。

やはり自分の文才の無さに泣きます（T-T）

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第16話 乗船？けいやく？

その後、俺はジュエルシールドを回収したのは達の方に向かった。

その時ユーノは…。

「真耶、“アレ”は何だったの？」

当然の疑問を投げかけてきた…。

「…そうだな、端的に言えば俺が敵対している相手の『使い魔』
みたいなもんかな…？」

「っ！使い魔！？あれが？」

「ま、ちょっと違うけど…。それよりも…なのはは大丈夫なの
か…？」

俺は倒れて気絶しているのはに歩み寄る。

「…うん。少し頭を強く打ったけど大丈夫そうだよ」

「そうか…」

ほんとはここで、「よかった…」と続くのだろうけど、全く良いわけがない。

護ると誓ったのにも関わらず。俺は…。

「クソッ…」

木をおもいつきり殴りつける。

手が痛むがこんなもん大したことじゃない。

「クソが…」

もう一度殴る。

「う、ん…」

その時不意にうめき声が聞こえる。

「！真耶、なのはが」

「っ…。なのは…！」

俺はなのはの上半身を抱き上げ顔を覗き込む。

「ん、真耶、おにいちゃん？」

「ああ」

なのはが眼を開ける。

はあ、情けない。慕ってくれてる妹分も護れないとわな…。

「大丈夫か？」

一応容態をきいておく。

「うん、大丈夫…。わたし、どうしたの？」

「気絶する前のことは覚えていないのか。」

「敵に気絶させられてたんだ…。けど、もう大丈夫だから」

「そう、なんだ…」

なのはは少し落ち込んだ顔を見せる。

おそらく大変なときに自分は気絶していたのが悔しいんだろ…。

「…アホ」

「あイタっ!?!」

デコを指で弾く。

「成りたての新人魔導師が、そう何度も成功する方が珍しいんだ
よ」

「でも……」

こいつはまだこんな事を言うか……。

「……だから、別に自分だけで背負わなくても良いんだよ」

「ふえ？」

あゝ、なんかこついつのは慣れないな。

「……ほ、ほら後ろ向け、一応打ったとこ診てやるから」

「……うん！」

少し嬉しそうに声を出し、上半身を上げて座り後ろを向く。

「……ふう」

息を吐き集中。

変化させるのは“左腕”。『アブラクサスの左手』をこの手に宿す。

眼を閉じ集中。

ここにその手を具現させる。

眼を開けて、その左手を見る。そこには白い手が……。

「……………はね？」

「？…どうしたの、おにいちゃん？」

なのはが声を掛けてくるがそれに反応することができない。

…何故だ？

俺は左手を見つめたまま呆然とする。

「…？」

それを見ているユーノも疑問顔で俺を覗く。

「……………」

試に“右腕”を変化させてみるが…。

「……………何でだ？」

今度は“眼”を…。

しかしこれも同じ結果だ。

何故こうなったかを知りえるのは、おそらくこの力を授けたメルだけ…。ならば。

『メル！聞こえるか！』

『はいー！…！…！つて、なによいきなり大声で怒鳴って！ビックク

リするでしょ！』

メルに念話をつなげる。

『それはスマン……。て、そんなことはどつだつていいんだ。メル
教えて欲しいんだが……』

『…何？』

メルも俺の真剣な雰囲気^{ちから}に気付き応える。

『…能力^{ちから}が“使えない”んだが……』

『………やっぱりか』

何……？こいつは今やっぱりと言ったか。

『おい、やっぱりってどつどつ……』

『そういう意味よ』

俺の言葉を切りメルが話し出す。

『あなたはさっき、ロキの転生者を吸収しその右腕を復元した……』

『ああ……』

俺は右腕を見ると、そこには制服の長袖がバツサリいかれている。

『そのときに、黒い粒子があなたの体内に入って、活動して、あ

あなたの能力の阻害をしているの』

『え、ちよつと待て！それは…』

『大丈夫、少しすれば浄化されるから、また力は使えるようになるわ』

ふう〜、よかったぜ。このまま一般人になるところだったぜ。

『教えてくれてサンキユ。またな』

『…ちよつと待って』

？なんだろうか…。

『…今度からも、あの黒い粒子には気を付けなさい。いいわね？』

『ああ、わかってるって』

そつして念話を切る。

「…え、と。おにいちゃん…どうしたの？」

後ろを向いても未だになにもしない俺が不思議だったようで、なのはが声を掛けてくる。

「いや、なんでも…は在るが、お前にはなんでもない。ユーノお前がなのはを診てくれ」

「え、けど…」

「いつらには話しておくか。」

「実はな、今俺は能力が使えなくなってるんだよ」

.....

長い沈黙が痛い。

「「えええええー！ー！ー！ー！」」

「うを！？」

いきなり二人が大声を出す。

くそ、耳キーンだ！

「いや、別にそこまで驚かなくていいんだけど……」

「だ、だって……！」

「そうだよ！能力が使えないってなんで!？」

ん〜、これを一から話すのは……意外と簡単だがあまり話さんでいよう。

「落ち着けお前ら……。使えないのはほんのちよつとの間だけだ」

「ふえ？そうなの？」

「そうなの」

なのはが不思議そうに聞いてくる。

「能力ちからの使いすぎみたいだ、車のガス欠だな」

「そうなんだ…。よかったよ」

なのはは安心したようで胸をなでおろす。

しかし、ユーノは少し感じているようだ。少し険しい表情をしている。

実は、ユーノには話していることがある。

それは、俺の能力について…。

俺の能力は、変化させるのに失敗すると、その個所が数時間使い物にならなくなるということ…。

もう一つは、能力を限界まで使うと打っ倒れるということ。

これは既に検証済みだ。

一番最初に確認されたのが、9年ほど前。初めて神咲と会ったときだ。

そして、二度目はそれから三年後位にちよっと手ごわかった敵と

戦った後。

三度目が去年。色々能力を試していたらいつの間にか限界を超えていて、打っ倒れた。

そのことを話してあるから訝しんでいるのだろうけど…。

『…後で本当の事は話す』

『……わかったよ』

念話で了解してもらいユーノがなのはを診る。

「あ、それと、時空管理局の船に行くことになったから」

「あ、うん聞いてたよ」

「え、船って？」

当たり前だがなのはが聞いてくる。

「その辺は諸々ユーノに聞いておけ。…俺はあの執務官とかなんとか言ってた小僧を見てくる」

ユーノに丸投げして、俺はクロノの方に歩いていく。

「おゝい、生きてるか〜」

傍にしゃがんで声を掛けてみる。

「…クッ!」

ありやりや、苦しそうだね。

軽く身体を触ってみる。

「クアッ…!」

「うゝんことここかな…?」

適当に触診して骨を確認してみる。幸い折れた肋骨は内臓を傷付けずにいるようだ。

後は、予想よりも怪我は酷くない。

骨折箇所は二か所、右肩が脱臼、背中に打撲、後頭部にコブ、と

…。
最後のは要らないか…。

「おゝい、起きろ〜。お仲間さんが来るぞ〜」

「う…、痛った、い!」

頬をペシペシ叩いていると眼を開けて言葉を漏らした。

起きたみたいだな…。

「おう、おはようクロノ執務官殿？」

「君は…」

痛みに顔を顰めながら聞いてくる。

「俺は、お前が止めた二人の白い方の身内だ。それと、幸坂…あのお前を吹っ飛ばした奴の代わりに謝っておくよ。すまん」

俺はクロノに軽く頭を下げる。

「いや…」

「ま、お前もお前で悪かった点はあるぞ？」

「な！？君に言われることじゃ…っ！痛…」

俺が頭を上げながら言った言葉に反論しようとするが、痛みで言葉を途切れさせる。

「はいはい、怪我人がぎゃーぎゃー騒ぐな。あんまり騒ぐと折れた肋骨が肺に刺さるぞ」

「くっ！」

「はあ、お前も家族をいきなり出てきた奴に傷つけられたら…怒るだろ？」

俺のその言葉に静かになる。

「…ま、そういってんだ」

「真耶!」

「真耶おにいちゃん」

俺たちが話しているとなのはとユーノが近づいてくる。

「おう、ユーノ。こいつもついでに診てやってくれ」

「うん」

そうやってユーノは魔法陣を展開してクロノを治療していく。

「あ、そうそう。その黒いの…」

「時空管理局執務官の、クロノ・ハラオウンだ」

俺が言いあぐねているのを見て名のる。

「そうか、俺は皐月真耶だ。…で、お前のお仲間さんが今に迎えに来るみたいだから」

「そうか…」

クロノはちよつと顔が渋くなる。

たぶん自分が不甲斐ないんだろう。

仕方ないが、今は喜んでおいた方がいいだろう。

「おいクロノ、お前は意外に運が良かったぞ？」

「…どこがだ」

俺の言葉に少し呆れながら聞いてくるが…。

「だってよ、あの技は本気でやればその辺の魔獣だったら殺せるし、本当なら内側に衝撃がいつて内臓がズタズタになってるんだからよ。あいつが冷静じゃなくてよかったな」

俺はそう言っつて、嫌みつたらしくニヤツと笑ってやる。

「なっ!?!」

クロノはそんなもんが自分に喰らわされたことと、あれで手加減されていたことに驚いているようだ。

そうやって適当に話していると、俺たちの近くに魔法陣が展開されて、そこから光が漏れて収まると人が数人出てきた。

「か、母さ…艦長!?!」

「大丈夫かしら?クロノ」

来たのはさつき俺が話をした、今回の最高責任者の艦長。リンデイ・ハラオウンと護衛と思われる魔導師数人だった。

「それじゃあ、救護班、クロノをよろしくね」

「はっ！」

そう言っつて後ろの魔導師はクロノに走つて、治療をユーノと交代した。

「それで、そちらの方たちも、私たちと来てもらつても構わないかしら？」

リンディさんがこちらに向いて声を掛けてくる。

「は、はい！」

「構いませんよ」

なのははこつちに話が振られて少し戸惑いながら返事を返す。

アースラ内に転送されてくる。

「わ…」

なのはは初めて見る艦内に興味があるようでキョロキョロしている。

少し歩いたところで気付く。

「なのは、バリアジャケットは解除しても大丈夫だ」

「え？あ、そうだね」

俺の言葉に素直に従ってくれる。

「…ユーノも、もういいんじゃないか？」

「あ、そうだったね。ずっとこの状態で忘れてたよ」

…ユーノよ。それは人としてどうなのさ。

「ん？」

なのはは何のことか分からないようで、屈みこんでユーノの顔を覗き込んでいる。

そして、ユーノが発光して、金髪の一人の少年になる。

「え……………」

「ふう、なのはと真耶にこの姿を見せるのは久しぶりに、なるのかな？」

ユーノがそんなことを聞いてきながら、絶句しているなのはを引き上げている。

だが、俺はその言葉を聞かずに耳を塞ぐ。

「え？真耶？」

「すみません…」

「いえ。それじゃ、早速行きましょうか」

俺が二人を促すと、二人とも今の状況を思い出して縮こまる。

その後は、アニメで見たのと同じ、日本を勘違いしたあのものすごい部屋へと…。

カコーン

「……………は？」

「…へえ？」

扉の向こうには、アニメのときよりもパワーアップしている和風かぶれの部屋が出てくる。

…てか、桜とかどうやって入れたんですか？リンディさん。

……………まさか転移魔法を使用して…？

そこまでするか管理局…。恐ろしいな…。

「ぶっぞっ？」

「あ、はい」

リンディさんは既に座敷に上がりこちらを微笑んで見ている。

それを見て停止していた頭が復活する。

リンディさんの前に三人で座る。

ユーノを真ん中にして左がなのは、右側に俺という配置になっている。

「ぶっぞ〜」

「あ、はい」

「ありがとう」

緑茶と羊羹を茶髪の女の人、エイミイ置いてくれたので、それに軽くお礼を言っつて笑みを顔に張り付ける。

「あの…」

「ん？なにになに？」

小声でエイミイを呼ぶと、向こうも小声で聞き返してきてくれた。

「あのですね。あの黒いのは大丈夫だったのか気になって…」

「あゝ、そのことなら問題ないって言ってたよ」

「そうか、…よかった」

俺はクロノはKYだとは思うが、別に悪い奴ではないと思っているので心配だったが、大丈夫ならよかった。

「ありがとう…」

「いえいえ」

それで会話は終わった。

「さて…、色々と話してもらえるかしら？」

「…はい」

リンディさんの言葉にユーノが少し気落ち気味に答えだす。

ジュエルシードの事。

自分だけで回収に乗り出したこと。

なのはや俺たちに力を借りたことなどなど。

まあ、原作とそう変わらない。

「なるほど、そうですね」

ユーノの話聞き、一番最初に口を開いたのはリンディさんだ。

あ、ついでにクロノは大体の治療を受けてこちらにきている。それでも包帯が、クロノのバリアジャケットと相まって目立つ。

「あのロストロギア…ジュエルシードを発掘したのは、貴方でしたか」

「それで、僕が回収しよう…」

少し落ちたトーンでそう答える。

「立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある」

リンディさんは賞賛し、クロノはその行動の危険さをわかっているからの厳しい言葉を出す。

クロノの言葉にまたユーノの肩が落ち込む。

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

なのはが自分の疑問を投げかける。

「ああ、遺失世界の遺産…って言って、判らないわね。えっと…」

そこからはまたアニメと同じ。

次元空間のこと。

ロストロギアの生まれ方。

ロストロギアによる次元震、次元断層のこと。

「繰り返しちゃいけないわ…」

そう言いながらリンディさんは砂糖をサジ二杯分を緑茶に入れ、そこにさらにミルクを加える。

「…わ」

なのはがそれを見て小さく声を漏らす。

俺も生粋の日本人だ。驚く気持ちはわかる。

あんなのを茶道を極めた家の人に見せたらボコボコになるだろうな。

その、おそらく物凄い味になっているモノを、リンディさんは美味しそうに飲んでいる。

「これより、ロストロギア…ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権をもちます」

「…え」

茶を置いたリンディさんの言葉に、なのはは小さく声が漏れ、ユーノは拳を強く握った。

「君たちは、今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「…でも、そんな」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらおうような話じゃない」

なのはが食い下がろうとするが、クロノがそれをバツサリ切る。

そう、これが在るべき回答だ。

「でも…！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理も着かないでしょう。今夜一晩、ゆっくり考えて二人で話し合って、それから改めてお話をしましょう」

この言葉だ。

良い様に捉えれば、それは子供の意思を少しでも守ろうとする大人の意見。

しかし、違う角度で見ると、その言葉は二人の出す答えを知っているからこそその譲歩。

「送って行こう、元の場所でいいね？」

「執務官殿、ちょっと待ってもらえるか？」

「…なんだ？」

立とうとするクロノを制して話を切り出す。

「帰るのはいいけれど、艦長殿に幾つか質問をしたい」

「…なにかしら？」

俺の纏う空気が微妙に変わったのに気が付き、少し探るように構える。

流星は艦長だな。

「なのは達のような一般人を関わらせたくないというのは、“貴方”の本心ですか？」

「…どういふことかしら？」

俺の言葉の意味を図りかねている。

「どうもこうも、言った通りの質問ですよ？リンディさん」

「…もちろん、本心からよ」

この言葉に嘘はない。

掛かったな…。

「なら…、もう一つ」

俺は今できる“最高”の笑顔を向けながらその質問を投下する。

「…あなた方、“管理局”としてはどうですか？」

「…っ！」

艦長殿の表情が少しだけ強張る。

本当に少しだったが、俺の常人よりも遥かに高い動体視力がそれを捉える。

俺の質問の意図が判らない他の三人は、少々置いてけぼりを喰らっているが、今はあまり関係はない。

俺は艦長殿に“笑顔”を向け続ける。

「……………もちろん、関わってほしくなんて…「ダウト」…っ！？」

艦長殿の言葉にかぶせるように声を出す。

結構驚いた顔をしている。ま、何故わかったか教えておくか。

「嘘だとわかったか教えて差し上げようか？」

「……………」

俺の言葉を黙って聞いている。

「まず、俺の質問を聞いたとき、アンタの顔は本当に僅かだが強張った。あの反応は、拙いことを聞かれたときの動きだ」

「っ！」

艦長殿の顔がまた少し歪む。

「次に、これは推測ですが…」

俺は右手の人差し指を立てて続ける。

「さっきの戦闘で介入してきたのが、そのクロノ・ハラオウンのみだったから」

その人差し指を艦長殿の隣に座っているクロノに向ける。

「執務官がどれほどの地位の者かは知らないが、貴方の魔力量と物腰からそれなりのもの考える」

そう言ってから人差し指を戻す。

「しかし、幾ら執務官殿が強かろうと、魔力量だけなら上の二人に一人だけで介入させるのは危険。なのにも関わらず、一人で介入他の人は全くいない。つまりは、人手不足…」

その言葉にさらに顔が強張る。

「…そして、その唯一と言っていい戦力は、今重症で動けない」

この言葉に今度はクロノの顔が歪む。

「そこに、回収すべきものを追っている、魔力量が多く、将来有望なココロ優しき魔導師が居る。それを、“組織”の人間としては

引き抜きたいよな？」

「…引き抜きたいけれど、関わるべきではないと言っているわ」

俺の言葉に反論するように言っが…。

「なら、なんで考えるなんて言ったんだ？」

「…っ！」

この言葉で黙る。

「ま、さっき言った通りに、アンタ達は少しでも人手が欲しいだろうし、俺たちはフェイト嬢とジュエルシードに用がある。…だから、俺たちは協力をしよう」

「…え？」

俺の言葉に理解がいつていないのか、リンディさんは変な声を漏らした。

そして、理解していくと言葉を掛けてくる。

「…良いのかしら？私は…」

「別にいい。…ただし、条件がある」

「…条件？」

俺の言葉を訝しみ、身構えた。

「なに、そんなに難しいことじゃない。俺たちはジュエルシードの回収を手伝い、アンタ達は俺たちにあの子のことを優先させてもらう。あ、それと俺の能力については詮索しないこと。そら、簡単なことだ。こんな感じでいいな？なのは？」

「え？あ、う、うん！」

嬉しそうに返事をするのは、あんまり関わらせたくはないが今は仕方ない。

きつと、絶対に護り通す。

「な！そんなことがっ！」

「いいでしょう…」

「母さ…艦長!？」

クロノが却下しようとするが、リンディさんが了承を出したので黙る。

「感謝しよう」

その後、元の場所に轉移し、なのはとユーノは帰って行った。

「さて、俺に用とは？」

なのは達は帰ったが、俺は残ってくれと言われ残っている。

「少し聞いておきたいのだけれど…。エイミィ」

『はいはい』

リンディさんが声を掛けるとエイミィの声が聞こえてくる。

そしてモニターが開かれる。

「通信が繋がらなかったけれど、カメラは生きていたの…それがこれ」

そのモニターには、敵である“量産型”が映し出される。

「この白い奴らは何なんだ？」

この時気絶していたクロノが聞いてくる。

「こいつらは、俺の敵の使い魔に近い存在です」

「使い魔だと!?!」

「……………」

クロノが驚愕をする。

確かにクロノの知っている使い魔は、動物を媒体にしているが、人型になれば動物の面影は残っているが、それでもヒトとして暮らせる。

しかし、今映し出されているモノは、明らかにヒトとは違うシンザイだ。

「…そう、なら、これは…」

「それは俺の力によるものなので説明は控えさせてもらいます」

「…そう」

リンディさんの質問に俺は即答する。

「それだけなら俺はこれで…」

「あ、最後にいいかしら？」

「…？」

俺が踵を返すと、今気付いたように聞いてくる。

「…あなたの“敵”と言つのはなんなのかしら？」

「…そうですね」

顎に指を当てて考える。

教えてもいいけれど、やはり教えるには死んだことも話さないと
いけないからな…。

最低限のことでもいいか。

「…ロキ」

「ロキ？」

「そう、判るのは名前と自分の部下を送ってくるということだけだ」

「応嘘は言っていない。」

「…それだけしか判っていないのに、なぜ？」

クロノが聞いてくる。何故、ねえ。

「…やると決めたから、かな？」

「…何を」

「それは秘密で」

そう言ったらクロノが呆然としていた。

なんでも教えると思ったたら大間違いだ。

その後に俺も帰った。

さて、ここからだな。

どうなってくんだらうな。

第16話 乗船？けいやく？（後書き）

カ「まだ良いコーナー名が見つからない。第二回目の後書きコーナー！」

真「ま、別に有っても意味はないだろ」

カ「否！ある！」

真「ない筈なのに言い切りやがった…」

カ「ま、そんな事はいいんだよ。前回書き忘れてしまったアンケートについてですよ」

真「あゝ、アリシアどうすんだ？ってやつだな」

カ「そうです。何時締切とか書いてなかったのでここに書きます。

アリシアを蘇らせてほしい方はAを、別にいいという方はBと感想にて回答して頂きたいです。

期限は12月13日の午前0時までですので、ご協力お願いします。

今の経過は、A 2票 B 0票です」

真「やっぱり皆さんアリシアは生き返らせて欲しいんだな」

カ「そうですね。人気ものですねアリシアは、生き返らせたら頑

張って動かしますよ」

真「ま、頑張ってください」

カ「おう」

カ「さて、今回は、昨日何故か頭に沸いことを書かせてもらいます」

真「なんのことだ？」

カ「それは…主人公の二人のイメージＣＶです」

真「いや、別にいいんじゃない？」

カ「うるへえ！私が個人的にやりたいだけだ！」

真「なんとという自己満足…」

カ「さて、今回は真耶のイメージＣＶは、神谷浩史さんです」

真「マジか…！」

カ「代表作は、夏目友人帳の夏目貴志やガンダム00のティエリア、
A Bの音無です」

真「…何でこうなった」

カ「いや、他にも色々候補がいたんだよ」

真「誰だ？」

カ「伊藤静（ヒナギク）さんとか、白石涼子（美由紀）さんとかさ。けど、よく考えたらお前って中学生じゃん？」

真「まあ、そうだな」

カ「だから、女性の声優さんじゃ声が高すぎるんだよ。なので、出来るだけ顔が中世的なキャラをやっているこの人にしたんだよ」

真「あゝ、確かにティエリアとか特にだよな。それに主人公も結構やってるしな」

カ「そゆこと」

カ「今回はここまでで」

真「次回 第17話 成長？にかいめ？

その力は、戦うために……。」

第17話 成長？にかいめ？（前書き）

次話投稿です。

今回は目線がアッチ行ったりコッチ行ったりしますが…。
いつも通り生温く見守っていてください。

第17話 成長？にかいめ？

side - 一真

臯月達と別れて、僕は一度一人で住んでいる家に帰り、着替えとかを大きなバックに詰めてからフェイト達が住んでいるマンションの部屋へと行く。

たぶん明日から臯月達は時空管理局と協力してジュエルシードの回収をするだろう。

なら僕もフェイト達と一緒に居た方がいいだろう。

荷物が纏まったので“あの人”に頼んでフェイト達の部屋に移す。

僕が転移すると、そこにはソファアの上に腕に包帯を巻いた状態のフェイトが居て、アルフの頭を撫でていた。

「約束して……。あの人の言いなりじゃなくて、フェイトは自分のために頑張るって……」

「うん……」

主従の絆は固いんだろね。こんないい場面だけど聞かなきゃいけないことが僕にはある。

「……二人とも」

「っ！一真！」

「一真！よかったよ」

二人とも僕のことを心配してくれていたようだ。

「……ごめんね。それと、ただいま」

「お帰り！」

「うん……お帰りなさい」

二人と一通り話し、聞くことにする。

「……アルフ、あの人って、だれ？」

「っ！」

一応知っているけど、二人は知らないと思っているから、ここで

聞いておかないと…。

「……だれ？」

「……フェイト」

「……私の、母さんだよ」

「……母さん？」

知らない振り続ける。

前から嘘は得意だ。何故か皆気付かない。

「そう、ジュエルシードは、私の母さんの探し物なんだ。それを代わりに私が……」

「……そう。じゃあ、この前何処か行くなって、言ってたのも？」

「……うん」

フェイトが首を縦に振り肯定をする。

「……今度行くなら、僕も、行って、いい？」

「え……？」

僕の言葉が意外だったのかキョトンとする。

「……僕が、フェイトの手伝いをしてるって、一応挨拶」

「あ、うん。…いいよ」

フェイトから許可を貰った。あとは会うだけ、プレシアの心を測る。

まだフェイトのことを想っているのなら生かす。

だけど、もし完全に堕ちているなら…。

s i d e - o u t

s i d e - 真耶

「と言っわけで。10日ほど少々用事があるので行ってくるから」

「なにが、と言っわけなのか分からへんのやけど…」

アースラから帰ってきてから、夕飯を食べた後、リビングでレンさんと向かい合って話している。

「まあ、ええけど。学校にはしっかり連絡しとくんやで？」

「了解ですよ」

とりあえずレンさんとの1時間に及ぶ死闘は幕を閉じる。

「…あ、なのちゃんも一緒に行くんやよね？」

レンさんの言うなのちゃんとは、なののことだ。

「ん？ああ、そうだな。俺はその付添いがてら用事を済ましてくる。って感じかな」

「そか、ちゃんと護るんやで？」

「…わかってるって」

言われずとも、アイツは、アイツの笑顔は俺が護ると誓ったんだ。絶対に、この身を捧げてでも…。

鞆に着替えを詰めて服を着替える。

着替えるといっても制服しかないのだが…。

つまり、着替えも予備の制服を1着のみ。

後は、普通誰もが着ないような、背中のところの2つの穴が開いたTシャツも入れる。

そしてそれを持ち、玄関に向かいながら携帯のメールで恭介に、明日から休むことを告げると。

『行ってこい。そしてやり切ってこい』

それだけ還ってきた。

たく、相変わらず無駄にカッコいいな…こいつは。

外に出たら、ちょうどなのは達も出てきた。

「お、ちょうどだな」

「真耶おにいちゃん…。うん、行こう！」

そう言っただけなのは走り出す。

俺もそれに続いて走る。そして、もう一度自分の魂に誓う。こいつの笑顔を絶対に護ることを。

「というわけで…」

俺たちは再びアースラに乗艦している。

その中の暗い部屋、おそらくブリーフィングルームと思わしき所

に、クルーの皆さんと一緒に集められた。

たぶん紹介とかだろうな。

「また本件においては特例として、問題のジュエルシードの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

そうリンディさんが言うと、ユーノは勢いよく立ち上がり緊張してガチガチになって挨拶をする。

「はい、ユーノ・スクライアです」

「それに、彼の協力者でもある、現地の魔導師さん」

今度はなのはに振られ、なのはは慌てて立ち上がる。

「た、高町なのはです」

「そして、二人の保護者であるこちら」

今度は俺に視線がくる。

やれやれ、面倒だな。

「臯月真耶だ」

簡潔に終わらせる。

愛想がいい奴なら、この後に「よろしくお願いします!」「…とか言っただろうけど、特によくする気は俺にはないし、お願いする気なんてもったない。

「…以上三名が、臨時局員として協力してくれます」

「「よろしくお願いします」」

「……………」

俺の横のなのはと、その向こうのユーノが頭を下げるが、俺は特になにもすることなく立っていた。

そのせいか、リンディさん以外の奴らからの印象は悪くなったよ
うだが、別にそんなのは構わない。

「それじゃあ、今からブリッジに行きましょうか」

リンディさんが歩いて行くこととするが、俺にはやることがある。

「すまんがリンディさん」

「なにかしら？」

俺の言葉に反応するリンディさん。

少し身構えているのはなぜだろうか？

「艦内の訓練場をかしてもらいたいのだけど、いいだろうか？」

「うーん、そうねえ。構わないわ、ただし壊さない程度にね？あ、

クロノ、案内してあげて」

「え、艦長！なんで僕が…」

「いいじゃない、じゃお願いね」

リンディさんは、なのはとユーノと笑いを堪えているエイミィを連れてブリッジへ向かった。

「はあ…」

クロノが俺の横で溜め息をつく。

「なあ、クロノ」

「…なんだ？」

俺の言葉に反応してくれるクロノ。

「傷はまだ痛むか？」

「いや、そこまで酷くはないよ」

「そっか…」

そいつはよかった、やはりかなり手加減していたようだな…。

「それじゃあ、案内しよう」

「おう、よろしく頼む」

その後、クロノとは色々と話した。
話してみると意外に良い奴で、なかなか話しが通じる。
だから、もうちょっと融通を聞かせてほしいもんだ。

「ここだ」

「お、サンキュ」

クロノと一緒に訓練室に入る。

「ほぐ、こいつはまた」

なかなか広い。正方体の簡素な部屋、そして結構頑丈そうな壁。
正しく訓練場と言ったところだ。

「じゃ、始めるかな」

俺はそう言っつて制服の上着を脱ぐ。

その下は、背中に2つの穴が開いたTシャツ。

「…なあ、僕も見学して行っつていいか？」

部屋の真ん中に立った俺にクロノが声を掛けてくる。

「んぐ、いいけど。見ててもそんなに面白くないぞ？」

「いい、見せてくれ」

「わかった」

意外に強情だなクロノは。…意外じゃねえか。

「ふう〜…はあ〜…」

部屋の真ん中に立って、掌を胸の前で合わせて神経を集中させる。

そして、ゆっくりと深呼吸をしていく。

“眼”を変化させて『写輪眼』にする。…しかし。

「…足りない」

発動しただけでわかった。

“眼”に浮かび上がっている勾玉の数が二つしか浮かび上がっていない。

おそらく、まだあの黒い粒子を浄化しきれていないからだろう。

「……写輪眼が、まだ二つだったころの修業、はっと」

俺は何年も前のことを思い出し、身体を動かしていく。

いつもの武術の型をやる。

その後に能力を確かめていく。

やはりどれも弱体化している。早めに浄化してくれないと色々と困るんだがな。

「ふう〜…」

一通りやり、終わりにした。

「あ、なあクロノ」

「ああ、なんだ？」

結局最後まで部屋の端で、俺の鍛錬を眺めていたクロノに聞く。

「シャワー浴びてえんだけど、どこか教えてくんね？」

「ああ、案内しよう」

そう言ってまた先導していく。

その数日後。

『捕まえた！なのは！』

『うん！』

モニターの向こうで、なのはとユーノが鳥を取り込んだ暴走体を相手にしている。

やはり原作より少し手こずっているが問題ないだろう。

そんなとき。

『真耶、こっちの仕事もお願いね？』

『あいよ…』

俺の方も、元々の仕事に行かないといけないようだ。

「…艦長、こっちの仕事があるので、行かせてもらおうよ」

「ええ、わかったわ」

一応リンディさんとかには、行かないといけないことは言うてある。

「お、今回は廃墟か」

『うん。…あ、敵は二人だ』

「大丈夫だろ」

メルの心配そうな言葉に気軽に返す。

「…こつちも二人だ」

『え…？』

メルが疑問の声を上げると同時に、俺の横の地面に魔法陣が展開され、そこから紅い長髪と和服をなびかせた幸坂が出てくる。

「よ、幸坂」

「……………」

俺が挨拶をすると軽く返してきただけだった。

「メル、もう来るから切るぞ？」

『あ、うん。じゃ、よろしくね』

それで念話が切れる。

「それじゃ、向こうも二人だ。片方頼むぞ？」

「……………わかってる」

ふと、唐突に浮かんだ疑問を聞いてみることにする。

「…何で髪の毛切らないんだ？」

「……………」

こいつの顔は、下手な女の子よりも女の子っぽいんだ。

美少女とか思われなくなったら切るべきなんじゃないかなろうか…。

「……………人に、刃物を持たれたく、ない」

「…はい？」

そんな軍人とか、そっち系の人みたいな理由かよ。

「……………それと」

幸坂はいつの間にか持っていた『小烏丸』を振り上げ俺に振ってくる。…って。

「おわ!？」

それを白刃取りする。

「……………僕は、女じゃない」

「わ、わかってるって……………」

やはり心が読まれているのか？

「……………手、放して。もう、来るよ」

「お?おお、そつだな」

白刃取りした状態から戻り、敵の気配のする方を見る。

「……………」

「クカカカカカカカカカ…」

二人の人型が現れる。

一人は無口そうな青年。

格好は黒いボディアーマーを上下来ている。

その手には、紅い槍と黄色い槍の二槍が握られている。

もう一人は奇妙な晒いを出している。

格好は黒いフルプレートフルプレートの騎士甲冑を着ている。

そしてその手には、男の身長身長の倍はある棍棒が握られている。

「これはまた…」

「…??? 文曲零零、急ぎて律令の如く成せ???」

幸坂が訥々ともう一本召喚する。

「…千歳の儔、雷切」

刀身に電気が奔っている刀が手に収まる。

そして二刀で構える。

「……………」

「ハア…」

つまりは、自分は二槍の方をやってるのだから。

「わあつたよ。…たく」

“眼”を『写輪眼』に変える。まだ、勾玉は二つの状態だが大丈夫だろう。

そして左腕を変化させる。

俺の左腕が白く染まり、青い刺青のようなものが描かれている、そして肩から角が生えている。

チャドのもう一つの力。

攻撃に特化した腕、『フラン・イスキエルダ・デル・ディアフロ悪魔の左腕』だ。

「さて、やりますか」

俺は歩きながら肩を回し、未だ嗤っている甲冑の男に向かう。

「せやあああ!」

「クカカツ!」

俺の左腕のストレートパンチを、棍棒を俺の拳に合わせてくる。

「カアッ!」

「ふんっ!」

もう一度打ちつけ合う。

お互いに単純なパワー勝負をし続ける。
さて、どっちが先に音を挙げるかな。

side - out

side - 一真

「……ふっ！」

「……はあっ！」

お互いに、短い気合と共に、手に持つ得物で敵を斬りつけるために振るう。

廃墟のビルの壁に、金属が交差する甲高い音が響く。

「……ん」

「……せやあ！」

何合も打ち合うが、幾ら短槍と言っても槍に変わりない、リーチの差で少し押される。

もう少し前に出れば僕の間合いなのだが……、こいつの武器を考
えるとそこまで強引には前に出れない。

『破魔の紅薔薇』で魔力による強化が掻き消され、『必滅の黄薔薇』の呪いに注意を払っているとなかなか難しい。

「……ハアツ！」

「……フツ！」

相手は左手の『必滅の黄薔薇』で、僕の首を狙ってくる。それを右手に持って『雷切』で受け流し、左手の『小烏丸』でカウターの突きを放つ。

男は槍の勢いをそのままに体を流し、突きお避ける。

「……テリヤア！」

そして短く持った『破魔の紅薔薇』を突き出してくる。

それをまた『雷切』で弾き後ろに跳ぶ。

すると、軽く背中に何かがぶつかる。

壁じゃない、もっと柔らかいモノ…。

Side - out

Side - 真耶

残念ながら俺の方がキツクなってきた…。

「クカカカカ」

まだ向こうには余裕があるな。

やはり片腕だと劣るな。

相手は両手で振ってるからこつちが先に手が痺れてくるのは当たり前なんだよな…。

「はあゝ、仕方ねえか…」

できれば節約したかったが、まあ、やるか。

“眼”の変化を解く。

この敵に『写輪眼』なんて意味ないことはわかった。こいつとは何処まで往ってもパワー勝負になる。

なら、この“眼”は必要ない。

今度は脚に集中し、変える。

「カア？」

脚に紫を基調とした色の脚甲のようなものになっている。

「…受けるよ？俺の速さを…！！」

その言葉と共に、踵の辺りにあるピストンが突出し高く跳びあがり、足首から魔力によるブースターが点火され、相手に突っ込む。

「衝撃のおおっ！ファーストブリットおおっ！！！」

「カカカツ…ッ!？」

奴は受け止めようとするが、それより速く蹴りを入れる。

そのまま、後ろに飛んで行き、廃墟のビルに突っ込み土煙を上げる。

「ふう〜…」

息を吐きながら、爪先をトントンする。

この脚は、スクライドで世界最速を誇った男の能力。

『ラディカルグッドスピード』の脚部限定バージョン。

本当の能力は、乗り物を速くするための能力だが、それを自分の身体に装着する能力だ。

「終わっててくんねえかな？」

眩きながらも警戒は解かない。

「…っ！」

そこに上空から棍棒????『クリストフォアの戦鎚』????が落下してきた。

「おわ!？」

おそらく俺に蹴られた時にか、今も動けて俺の死角から投げただろうそれを、俺は後ろに跳んで避ける。

すると、背中に柔らかく、温かい感触が触る。

振り返ってみると、和服に紅髪???幸坂???もこちらを振り返って見ていた。

「そっちはどうだよ」

「……別に」

そのまま話す。

「別にとって……、どういう状況かを……」

「…十五雷正方、二直、禁」

振り返ったまま話していたので、俺の後ろから来る甲冑の男が見えたのだろう。

『雷切』を振るいながら呪を唱える……って！

「うをい!?!」

思いつきりしゃがむ。

その俺の頭の上を、雷の斬撃が通り、甲冑の男の戦鎧を弾く。

幸坂と同様に俺の方も見える。

幸坂の後ろから二槍の男が迫っている。

「ほっ！」

俺は限界まで曲げていた膝を、伸ばすと同時に踵のピストンを稼働させ、魔力ブースターを使い跳びあがり、その男に蹴りを放つ。

「ハイパー銀色の脚い、スペシャアアル!!!」

「……フンッ！」

その蹴りを二槍を交差されて防がれる。

一度離れて、間髪入れずに地面を蹴り弾丸の如く男に突っ込む。

「…っ!…ハアッ！」

その速度に驚愕したようで、表情が変わる。

「おりゃあああ!!!」

男が『ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇』を突き出してくるが、俺は構わずその速度で右手を突き出す。

そして、槍が腕を軽く切り裂くが、俺の右手が男の首を捉える。

「ガッ！」

そのまま、ビルの壁に叩き付け、左腕を振り上げる。

真っ白な悪魔の左腕が、敵に振り下ろされる。

「『ラ・ムエルタ魔人の一撃』!」

腹に命中し、男の命を削り取る。
着弾と共に、ビルの壁に髑髏のマークが描かれた。

「こんなもんか」

黒い粒子になっていく男を見ながら、左腕を振って力を解除する。

それとも結構なダルさがる。
結構ギリギリだったらしいな…。

さて、幸坂はつと…。

side - out

side - 一真

「ハイパー銀色の脚い、スペシヤアアル!!!」

その声と共に視界から臯月が消える。

僕は目の前の甲冑の男を正面から見て、二刀を居合のように構える。

そして、言霊を紡ぐ。

「…忌剣^{きけん}???夜駆け」

それと共に、視界が一気に流れ、甲冑の前に出る。

「…カア？」

「…ハッ！」

一閃、二閃と×の字に切り裂き、すでに僕の体は男の後ろにある。

そして、2秒ほど経ち、ようやく斬れる。

「ガアアアアアアア!?!」

そして、黒い粒子になり消えていく。

「……終わり」

眩き、『雷切』だけ収めて臯月の方に歩いていく。

side - out

「ふあ〜あ」

「……意外と、アツサリ終わった」

欠伸をしていると、幸坂が近づいてきてそう言った。

こいつな抜けぬけと……。

「おい幸坂……」

「……………?」

俺がさっきのことを問いたただすために詰め寄ったら、俺の出す怒気の意味が分かっていないようで、小さく首を傾げて上目使いで見上げてくる。

ウグツ……。

いや、俺はなぜ怯んでいるんだ？こいつは男だ。何故にこの職種で萌えねばならんだ！

煩惱退散煩惱退散煩惱退散煩惱退散煩惱退散煩惱退散シユオツ……
へ？

「……………」

正気に戻ると……ジト目で俺を見て、右手の『小烏丸』が振りぬかれていた。

そして、頬をツーツと赤い水が垂れる。

「……今度こそ、斬る」

「ま、待て！俺は何もこれもどんなことも考えてないぞ！そうだ！考えてないとも！」

「……………」

俺の必死の弁解により、一応『小烏丸』は下げられた。

「……それで、なに？」

「……もしかして、さっき女つばいとか言ったのをまだ怒ってんのか？」

俺は、ふと思ったことを言ってみた。

「……………」そんなこと……ない。女つばいとか言われて、怒ってたから、皇月に当たるかもしれない剣を振るわけない」

「……………」

当たりのようだ……。

さて、どうしたもんかな。このままでもいいけど、人の機嫌を損ねていて気分が良いわけでもない。

そっぽを向いた状態の幸坂を横目に捉えながら、うぐんと唸る。

そこで、はっと思いつく。

なのははこういう時、頭を撫でると機嫌を少しだが持ち直す。

だが、こいつは男で転生者、さらに機嫌を損ねかねないが…、やらないよりはマシだろう。

そうと決めれば…手を幸坂の頭に伸ばし、ポンツと乗せて、撫でる。

「……………？……………なに？」

幸坂が俺をまた見上げてくる。

「ん…。いや、その、何でもないぞ？」

「……………そ」

そのまま数秒撫でて、手を放し、踵を返す。

「じゃあな、今度は海上かな？」

「……………うん」

そう軽く話し合って、お互いの転移魔法陣に乗る。

「……………二度目の共闘は終了した。」

第17話 成長？にかいめ？（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回から私の言葉はカッコ使わずに行きたいと思います。

今回、真耶はお休みです。

それにしても、私の頭はどこまで沸いているのだろうか…。
クライマックスを考えているときに…。

一真は、偽名で実は“女の子”だった。
とかいうのを考えてしまったんですね。

それで、Sttsで一真ルートとか考えてしまって…もう私はだめか
もしれない。

…一回アリって思ってしまった、2時間前の自分を抹殺したいです
ね。

？「……………ほんと、斬るよ？」

！？…チヨツ！？今回は私一人でやろうと思ったんだけど！？

一真（以下、一）「……………噂をすれば、なんとやら」

本人がそれ言うのか！？

「……………それは、置いてく」

…いいのかそれで？

「……………そんな事より、僕は、男だよ？」

ちよ、お前無表情で『童子切』を突きつけるんじゃない！

「……………仕方ない」

ふう、それでは前回に引き続き、一真のイメージＣＶを言わせて頂きます。

一真のイメージＣＶは、能登麻美子さんです。

「……………女性ＣＶ？」

男の子の声を女性がやるのはもう決まりみたいなもんだから。しようがない。

それに、能登さんはフルメタで風間とかやってるし。

「……………そう」

……………ま、スクランの八雲とか、シャナのヘカテとか大人しい女の子をやっていたのが決め手だったんだけどね（ボソツ

「……………聞こえた」

ん？ ……？

—「…………鬼牙絶刀！」

ブヘラッ！

バタッ！

—「…………作者はほっとく。アンケートの結果発表」

A 二票

B 0票

—「…………こつなつた」

ふつか————つっつ！！！

票を入れてくれたお二方、ありがとうございました！

—「…………あれ喰らって、復活？」

さあ、それではアリシア復活ルート頑張りますよ。

それでは、次回 第18話

—「…………海上？きょうりよく？」

その力は、戦うために…。

第18話 海上？きょうりょく？（前書き）

はい、新話予約投稿です。

サブタイの通り海上のジュエルシードです。

いつも通り駄文ですが、生温く見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第18話 海上？まよひりょく？

アースラに拠点を移してから10日目。

こちらが回収したジュエルシードは三つ。向こうが推定二つ。

残りは六つ、おそらく今日海上でジュエルシードが発動するだろう…。

「…はあ、面倒だ」

「真耶おにいちゃん？どうしたの？」

俺が食堂でコーヒーを飲みながらため息を吐いていると、なのはとユーノが来ていた。

「ん〜。後六つの事を考えると、お前にはちよつと休暇が必要かな？…とね」

「ふえ？私は全然大丈夫だよ？」

こいつはまだ俺の前でそんなことを通せると思っているのか。

「…ま、今はそれでいいけど」

俺は立ち上がりコーヒーのカップを下げに行く。

「気を付けるよ」

俺はそう言って食堂から出て、訓練室に向かう。

「ふう〜…」

能力は、正常に使えるから問題ない。身体も万全だ。

「さて、そろそろかな？」

訓練室で軽く体を動かして、時計を見てみる。

やるなら、たぶん今だろう。

そう考えていると、アラートが艦内に響く。

『エマージェンシー、捜査区域の海上にて、大型の魔力反応を感じ！』

さてと、一応ブリッチに顔を出して来るか。

side-out

side-一真

「アルカス・クルタス・エイギアス」

フェイトの呪文詠唱が結界内で紡がれる。

海に電気の魔力流を撃ちこむための大魔法陣の上に、黄色い光球がいくつも浮いている。

そして、詠唱が終了し、フェイトがバルディッシュを振り上げ、魔法陣に突きつける。

「はああああー！！！」

それと共に、光球から電撃が海に叩き込まれる。

魔力に反応して、ジュエルシードが発動して、青白い柱が建ち、それが雷を纏った竜巻に変わり攻め来る。

魔力を大量に消費して、フェイトの息が上がっている。

もう限界を超えている。アルフもそれはわかっているだろう。わかっているからこそ、全力でサポートをしているのだろう。なら、僕がやることも決まっている。

「……………フェイトを、護る」

それだけ考えればいい。

手に持つ『雷切』を構えて、フェイトに迫る雷を切り裂く。

ただ護る。僕はそれでいい……。

S i d e - o u t

S i d e - 真耶

ブリッジに入ると……。

「あのっ！私、急いで現場につ！」

「その必要はない」

「……え？」

なのはが行こうとするのをクロノが止めているところだった。

「放っておけばあの子は自滅する」

その言葉に、なのはは驚愕する。

「自滅しなければ、力を使い果たしたところで叩く。…捕獲の準備を」

「了解」

確かに、これは組織の人間としては合っている判断何だろ…。だが、反吐が出る。

「残酷に見えるかもしれないけど…これが最善な…」

「…ユーノ、さっさとなのはを転移させる」

「な!？」

艦長殿の言葉を遮り、俺はユーノに言葉を掛ける。

「うん、もちろん」

それをユーノは快く快諾し、転移用の魔法陣を展開させる。

「おにいちゃん…、ユーノ君」

「先に行っている」

「うん!」

なのはの姿が消え、向こうの結界内に転移する。

それを見て黙っているほど、クロノは俺の期待を裏切らない。

「君たちは!？」

「確かに、アンタらのやっていることは、組織としては最善なんだろう。…それは認める」

クロノは、俺の期待通りに噛みついてくる。

自分の正義が在るからだろう……だが。

「だがな、それはヒトとして最高の選択じゃねえ。アンタら管理局は、誰かの犠牲を良しとしてるのかつ、違うだろ！」

俺の心が昂ぶってくる。

ユーノも自分だけで転移していった。

アイツはわかってるな。

俺の言葉はブリッチに居る人たちに届くように響いていく。

「アンタらは、あんな子を助けたいから組織に入ったんだろっつ!それを、たかがあんな石ころに惑わされてんじゃねえよ。アンタ等に出来ないなら、俺たちがやる。…艦長、これは契約通りだ。

“フェイトのこと”を優先させてもらう」

俺は背を向け、メルに展開してもらった魔法陣に向かう。

「なつ、待て！」

そんな俺にクロノが静止の声を上げるが、俺は止まらない。

「俺を止めなければ、お前たちが、“俺”の正義を屈服させるだけの、“お前”の正義を持ってこい……」

俺はそのまま魔法陣に乗り、制服の上を脱ぎ、背中に穴の開いたTシャツになる。

「組織の正義に踊らされるな……。俺が言ってるのは、そういうことだ」

そう言って、魔法陣が起動した。

そして、“背中”の構成を変化させ、飛べるように翼を生み出す。

そして、光が強くなり転移する。

ブリッジには、静寂と、黄色に輝く羽が舞っていた。

嵐の中に突っ込んでいく。翼を上手く動かし飛んでいく。

「よ、幸坂」

「……遅いよ」

「悪い悪い、管理局どもに説教してたらな」

「……そ」

それだけ話、暴走体を“眼”を『複製眼』アルファ・ステイグマにして視る。

うわ、かなり複雑だし、このままだと日本どころかアジアがヤバいな。

「さっさとやるか」

「……そっちが、遅れたのが悪い」

痛いところを付きながら、幸坂が『雷切』で雷を切っていく。

俺も、翼に魔力を込める。

これを使うと、この後かなり怠くなるが、今は封印が先だな。

「手伝って、ジュエルシードを止めよう？」

「……」

なのはがフェイトに魔力を分けている。

妹分が頑張ってたんだ。兄貴が気合入れずに何をする。

暴走体を押さえつけるのにアルフも加わる。

幸坂がフェイトとなのはに降りかかる雷を切っていく。

そして、俺は翼の魔力を塊にして飛ばす。

「偽・聖なる審判」

俺の展開している。FF?の『アレクサンダーの翼』から、光球が飛んでいく。

大きさは俺に合わせてあるせいで、威力も落ちたが、これで十分だ。

光球を操り、枝分かれしている竜巻を貫き露散させていく。

「ユーノ君たちが止めてくれてる。だから今の内、二人でせいで、一気に封印!」

なのははそう言って高度を上げていく。

そして静止して、足元に魔法陣を展開する。

《グレイヴフォーム、セットアップ》

「バルディッシュユ?」

フェイトの方も、バルディッシュユが主を急かすようにモードを変えていた。

「デイバインバスターフルパワー。一発で封印、いけるよね!」

《オフコース、マスター》

なのはのレイジングハートに桃色の翼が展開される。

「……………」

それを見ていたフェイトも魔法陣を展開し、バルディッシュに金色の翼が展開される。

なのはのレイジングハートの穂先に魔力球が出来上がる。

「せーっの!」

「サンダー……!」

小さな雷が複数暴走体に突き刺さっていく。

「デイベイ……ン……!」

なのはも穂先を暴走体に向ける。

それを見たアルフとユーノが離脱し、幸坂も下がって俺の傍に来る。

「レイ……ージ……!」

フェイトはバルディッシュを魔法陣に突き刺し、さらに大量な雷の槍が降り注ぐ。

「バスター……!」

さらにそこになのはのバカ魔力砲撃が飛んできて、海の水から飛沫が飛びながら封印する。

「これを見ていると人間兵器っていう言葉が脳裏に過ぎるのは俺だけか？」

「……………大丈夫、僕も」

俺の呟きに幸坂が同意してくれた。

雨は止み、陽が雲の合間から見え隠れしている。

そして、二人の少女に光が当たっている。

その二人の間に六つのジュエルシールドが浮かび上がる。

「フェイトちゃんに言いたいこと、やっと纏まったんだ…」

なのはの言葉で、その場の静寂はなくなる。

「私はフェイトちゃんと色んなことを話し合って、伝いあいたい…」

そう言って、なのははフェイトにしつかりと体を向け、その言葉を紡ぐ。

「友達に…なりたいたんだ」

「…あ
」

なのはの言葉に、フェイトは驚きの声を漏らす。

まあ、そうだろう。今まで敵対して、最初なんて傷つけた相手から、“友達”になりたいなんて言われたんだ。最初は戸惑うだろう…でも、きつとなれる。

だから…。

「この場を邪魔するとは、アンタも空気が読めてねえようだな…
プレシア・テストロッサ」

空が紫色に光り、雷が海に落ちる。

「母さん…!?!」

フェイトが雷の発生者を口に出す。

そして、フェイトに雷が落ちる。

しかし、幸坂が『雷切』を持っているのは、この時のためだ。

「……一直、禁!」

『雷切』は、その名の通り「雷」を「切」った。

そして、その残りがなのは達に降り注ぐ前に、俺が二人の前に出る。

そして、“眼”に力を入れ、六芒星の盾が目の前に現れ防ぎ、搔

き消す。

それを防ぎ切った後、ジュエルシードを見てみると、すでにクロノが三つとも回収していた。

「ま、半分づつだからいいか」

「アアアアアアアアアア!!!!」

俺の眩きは、アルフの雄叫びと、海に叩き付けられた魔力弾により掻き消された。

「……じゃ」

「ああ、またな」

そんな中、俺と幸坂は呑気に挨拶をしてからわかれた。

そして、残ったのは、俺とユーノとなのは、クロノ。それと、静かな海だけだった。

俺たち三人は、あの会議室のようなところで並んでリンディさんの話を聞いている。

「指示や命令を護るのは、集団を護るためのルールです……」

それからなんか行ってたがあんまり聞いてなかったから、覚えとらん。

「融合暴走の危険性や、条件のことも鑑みて、今回は不問としますが…」

その言葉になのはは俯けていた顔を上げた。

「出来るだけ、こちらの指示は護ってもらいますよ。」

「はい」

「すみませんでした」

なのはとユーノは頭を下げるが、俺は特に何をするでもなく立っている。

そんな俺を、壁に凭れているクロノが睨んでくるが、特にこれといって睨まれるようなことはしてないんだがな。

「真耶君も、判りましたね？」

「え？あ、はい」

「…大丈夫かしら？」

何を聞かれたか全くわからず、適当に返事をしてしまった…。
大丈夫だろうか。

「それはともかくとして、問題はこれからね」

俺への話はすでに切られていた。
大丈夫そうだな。

「クロノ、事件の犯人について、心当たりは」

「はい、エイミィ。モニターに」

『はいはい』

クロノが声を掛けると、エイミィの声が聞こえ、テーブルの真ん中にスクリーンが出る。

そこからは、プレシアのことが話された。

「ま、これはどう見てもこの人のせいではないがな」

「え…?」

俺の眩きをクロノが拾う。

「待て。それはどういうことだ」

「どうもこうも、俺の知り合いから聞いた話じゃ、本当はもっと時間を掛ける筈だったのを、上が無理やりやらせたんだ。そして、その上というのは、管理所員」

「な!？」

ここに居る皆が驚愕する。

ま、嘘を混ぜたが、大体こんな感じでいいだろう。

『わ、それが本当なら……』

「彼女は、罪を着せられたことになるわね…しかも、管理局に」

「バカな!？」

管理局の三人がかなり動揺しているな。

「もうちょっと調べてみたら、エイミィ？」

『わ、わかったよ』

そう言って声が消える。

前を向くと、リンディさんがこちらを見ていた。

「どうして、そんな情報を？」

当然の疑問だが、ちゃんと聞いたはずだけどな。

「知り合いに聞いた…。と、言ったはずだけど？」

「その知り合いが、誰かは？」

「もちろん教えられない」

て言うか、ちょうどそこが嘘だしね。

まあ、その後も何だかんだ話して、なのはのユーノと俺は、一度家に帰ることになった。

……学校なんて別に良いんだがな。

s i d e - o u t

s i d e - 一 真

今、僕は迷子だ。

いきなりだけど、どうしようもない。

アルフ達とプレシアに会いに来たのはいいけど、途中で僕だけはくれた。

やっぱり考え事しながら歩いていたらダメだったのかな。

「……………」

本当に困ったが、僕の耳に声が聞こえた。

「……………もう、始まってっ」

床を蹴りあげ走る。

するとそこでは、床にマントを掛けられて寝ているフェイトが居た。

「…フェイト」

駆けよる。鞭で打たれた傷が多数つけてある。

僕は何をしてたんだか。

その手に『雷切』を出し、空いている穴に向かう。

そこには、破壊された柱と、紫色のドレスのような服を着たいかにも魔女という女性が居た。

プレシア・テストロッサ。

大魔導師。

そんな肩書きはどうだっついていい。今は、フェイトを傷つけた相手を倒す。

僕は無言で『雷切』を構え、突進する。

「……っ!?!」

すると、横から威圧が掛かったので、足で急制動をかけて後ろに跳ぶ。

そこにさっきまで居た所に、一振りの刀が振り下ろされていた。

「……お前」

「はっはーっ!?!?!」

そいつは僕を見て晒う。

その手には、柄に巻いてある布は擦り切れ、刃が毀れている刀。『死神』の刀、『斬魄刀』が握られている。

しかもあれは、十一番隊隊長のものだ。

さっきの威圧感を考えると、かなりの使い手だ。

「あら、鼠が入り込んでいたようね。殺してしまっただ構わないわ」

プレシアは男に声を掛けて、この空間から出ていく。おそらくフエイトのところか。

「はっ!言われずとも」

そいつは突っ込んで切りつけてくる。

その速度は僕や泉月よりも上!

「……つく！」

なんとか受けるが衝撃が来て、後ろの壁に叩き付けられる。

「おいおいどうした？そんなもんかよ？」

男は僕を挑発してくるが、ここで冷静さを掻いたら負ける。相手はかなりの適正能力があった転生者、本気で行く。

「……はあ！」

「おりゃああー！！！」

お互いの刀がぶつかりあう。

相手には剣技と言えるものがない。

しかし、“戦い”慣れており地力の差もあつて苦戦をしている。

「はっはああああー！！！」

「…はあっ！」

一際大きな金属音が鳴り響き、壁に吹き飛ばされる。

「ガッ！」

「オラアアアアア！！」

更に壁に叩き付けられたとき、直ぐに近寄られ首を片手で掴まれる。

「…ッグ！」

「おいおい、こんなモンかよお？」

男は下卑た嗤いを浮かべてこちらの顔を覗き込んでくる。

「…クッ」

なんとか抜け出そうとするが力が強すぎる。

そんな時、僕の背中が着いている壁の魔法陣が展開される。

「……え？」

「アン？」

二人とも疑問の声を上げる。

すると、僕に念話が繋がる。

『悪いけど、そんなとこでこんなことしてる場合じゃないよっ』

『…なっ！？貴方は…』

『ほら、行きな』

その声と共に、意識が途切れた。

s i d e - o u t

第18話 海上？きょうりよく？（後書き）

はい、一真を助けたのはこれから明らかにします。

それから、今回の敵は、分かる人には分かりますねw。

さて、書いていたらいつの間にかプレシアがダークサイドに墮ちてしまっていました。

真「どうしようもねえな…」

あ、今回は真耶が来てます。

それで、書くネタがなくなっていましたw。

真「ほんとお前は救いようがねえな…」

真耶が厳しい…。

真「これが普通の反応だよ」

もうアレだね。今回出てきた敵にもイメージジCV付けてみるか。

真「名前も出さない奴にか？」

いいでしょもお！それではこれです。

今回の敵のイメージジCVは立木さんです。

はい、そのまんまです！

真「お前…ほんと大丈夫か？」

ダメかもしんない…orz

真「作者がいじけたので俺だけで、次回 第19話 修業 じゅん
び」

その力は、戦うために…。

第19話 修業 じゅんび (前書き)

新話投稿。

青少年健全育成法が可決されたらしいです…。

何してんだあの人は……。

一体私のようなアニメ&漫画愛好家に、大人は何がしたいんだー
ー！！！！

失礼しました。ここからは転生者の闘争をお楽しみください。

第19話 修業 じゅんぴ

アースラを降りて、リンディさんとなのはの家に向かおうとしたとき。

「はあ……。何でこんなところ……」

公園の方から転生者の気配がしてくる。
そのせいでついつい愚痴が漏れる。

「ふえ？おにいちゃんどうかしたの？」

俺の声を拾ったなのはが聞いてくるが、こいつを巻き込むわけにはいかない。

「ん？俺はちょっと用事が出来たから、先帰ってる。じゃな〜」

俺はさっさとその場を離れて、公園の方に走っていく。
たぶんリンディさんがなんとかしてくれるだろ。

公園に着く。

確かに反応はわかるのだが、姿が見えない。

一応警戒しながら歩いていると、視界の端にあるものが見えた。

芝生の上に倒れている体。

その体を包む和服。

そして、この夕焼けでも全く色褪せない紅い髪。

「ッ！幸坂！？」

俺はその姿を見て走り寄る。

近づいてみてようやくその体に傷が幾つも付いているのが判る。

「おい！幸坂、どうしたんだ！？」

あそこまでの実力を持った幸坂が負けるなんて考え難いが、この傷は確かに付けられたものだ。

幸坂の上半体を抱き起し揺すってみるが、反応は小さな苦悶の声。

「チッ！」

俺は舌打ちをして幸坂を抱きかかえ、“脚”を変化させる。

速すぎるとこいつの傷に響くから、抑え目で英霊のライダーの脚に変化させ、屋根の上に跳躍しそのまま跳んで家に向かう。

家の近くで地に降りて、玄関に走る。

家の中の気配を探って、レンさんが居ないことを確認してから鍵を開けて入る。

一度幸坂をリビングのソファーに寝かして、空き部屋に布団を敷き、もう一度抱えてそこに運び寝かせる。

「はあ〜、こいつは一体どうしたんだよ…」

言葉が漏れてしまう。

さて、レンさんには何て説明しよう。

って考える前に傷を治しちまおう。

「ふう〜…」

“左腕”を変化させて『アブラクサスの左腕』に変える。

「おっし、成功！」

左腕が真っ白になり、何故か手首には拘束具が付いている。

その左手を、幸坂の傷の上に翳し光を放ち治していく。

「……………うつ…く！」

粗方傷を治したところで幸坂が気が付いた。

「おい、幸坂。大丈夫か？」

「……………なんで？」

幸坂がかなり困惑した表情になる。

「いや、聞きたいのはこっちなんだがな…」

色々聞きたい。

何故あんなところに倒れていたか、何故、あそこまで傷を負っていたのか。

「……………」

聞いてみたが、俯き下唇を噛んで黙ってしまふ。

今は聞けないようだな。

「もう少し寝てる、傷は治したが体力までは戻ってない。今日明日寝て、最後に備えとけ」

俺はそう言って腰を上げて部屋を出て行こうとしたら、服の袖を掴まれた。

「ん？どうした」

「……………大丈夫。今、話しとく」

振り向くと、既にいつもの幸坂に戻っていた。

しかし、何となくわかる。こいつは無理をしていると、自分の心を抑え込んでいるんだ。

フェイトを護れずに、こんなとこに居る自分の不甲斐なさを無理やり押し込めている。

「はあ、いいから、今は寝ておけ」

「……………でもっ」

「おら」

「…つにゅ」

無理矢理寝かせるために、幸坂の額をグーで小突き布団に寝かせる。

普段のこいつなら、今は躲すなり受け止めるなりする。ましてや倒れるなんてことは無いだろう。

「ここは俺の家だ。家主の決定に従ってもらおうからな」

俺はそう言って再び扉に向かう。

「……………横暴」

「はっ！ 知るかよ」

「……でもしないと寝ないだろうに……」

「……………ありがとう」

小さく呟かれた幸坂の言葉は、聞こえなかったことにした。

それから数時間後……。

「なるほど、分かったわ。でも、本当に大丈夫なんか？」

「……………ん、大丈夫」

夕飯の支度をしているときにレンさんが帰ってきて、ちよつと話をしながら支度に戻ろうとしたら、幸坂が、バリアジャケットで服を生成してから来たようなのだが、寝ていたときに生成したようで、着崩れた状態でリビングに顔を出したのだ。

そのせいでレンさんには幼女誘拐の汚名を着せられたのだ。

何とか俺の知り合いで男であることを信じてもらって、色々と嘘を混ぜながら教えた。

幸坂が持病で倒れていたところに、ちよつと知り合いである俺が通りかかり介抱。

親が居なくて一人暮らしをしているので、一時的に俺の家に運ん

だ。

夕飯を振舞おうと考えていた。…というもの。

そして、今は三人で俺が作った夕飯を食べている。

「…なあ、あの子本当に男の子なんか？」

「は？」

今日は隣に座っているレンさんが声を抑えて聞いてくる。

「…何でそんなことを？」

「…いや、だってなあ〜」

と言つて、横目で幸坂を見た。

それにつられて俺も見してみると…。

「……………もきゅもきゅもきゅ」

形のいい眉を眉間に寄せ、今もきゅもきゅ食べている唐揚げを見ている。

「…あれは、どう見たって…」

「…アイツは男だろ」

「…何でや？」

たぶん、俺が断言したのが不思議なのだろう。

「…アイツの出す“気”が女じゃ説明できない程に濃いんだよ」

「…へ？そんなにか？」

「…ああ、剣だけでやり合ったら俺の方が負けるからな」

俺のその言葉に、レンさんが疑問を口にする。

「…持病持ちなんちゃうの？」

あ、しまった…。どう言っただもんな…。

考えてみたら、模範解答が目の前に居た。

「…制限付きならいいんだよ」

「…そうなんか」

それで一応レンさんは引き下がってくれた。

そこで、俺はもう一度幸坂を見してみる。

目の前でもきゅもきゅと食い続けているこいつは、今、どれほど不安の中に居るのだろうか。

自分が護るべき者から離れて、手の届かない所の眼の届かない場所…。何があつたら…。

俺なら、心が折れそうだな。
はあく、弱え心だな…。

そう考えていたら、俺が見ているのに気が付いて疑問顔で問うてくる。

「……………？どうかした？」

「……………んあ？いや、何でもねえよ」

人が飯食ってるの見るのは、いい趣味とは言えないな。

そのまま穏やかに時は流れた。

「で、何があったんだ？」

俺と幸坂は、俺の部屋で二人で向かい合って座っている。

俺がベットに腰掛け、幸坂が勉強机の椅子に座っている。

今、話しているのは、幸坂が何故あそこまでボロボロになり、あんな所に倒れていたかだ。

「……………転生者に、やられた」

「まあ、それは当たり前前だな。お前を倒せるようなもんは原作には出てない訳だし」

俺が聞いたことに、少し重たい口が開く。

「……………プレシアと、協力していた」

「なんだと!？」

ロキ側も原作のキャラと接触したのか。なら、あの臨海公園での『エヴァ量産型』も繋がっていたとみていいか…。

「……………それで、相手は、『斬魄刀』を使ってた」

「む、物によっては面倒になるな」

それでも、こいつが倒されるほどのものか？

「……………相手が使っていたのは、十一番隊の隊長のやつ」

「は？」

十一番隊隊長は更木剣八。斬魄刀の解放系が出来ないものだ。

「お前が、剣技で負けた…?」

「……………(コクッ)」

結構間をとって肯定の頷きをする。

「……………剣技、と言うより。“戦い”で敗けた」

「…そうなのか」

剣技じゃなく戦いでか…。確かに、こいつの剣技はどこまでも研ぎ澄まされている。

だが、人とやるのに“慣れ”ていないのだ。

幸坂が刀をモノ、例えば暴走体などに振るうときと、俺という人に振るうときとは、幸坂の刀に宿るものが変わってくる。

モノに対してではなく、人に対してあるもの。それは戸惑い。

本当にこれを斬っていいのかと…身体にリミッターを掛けているのだ。

その状態でこれまで戦ってこれたのは、偏にこいつの精神力とその剣の腕のおかげだろう。

今回の敵が、今までよりもかなり強く。リミッターを付けた状態のこいつでは勝てなかったのだろう。

だが…。

「だ…いい丈夫だよ」

「……………ん」

俺は、幸坂の傍により頭に手を置き、出来るだけ明るい声で言う。

「今度は俺が居るし、二人でやれば何とかなるだろ」

「……え」

そう言っただけでやったら、何故か疑問顔をされた。

「……なんだその顔は」

「……いや、手伝って、くれるの?」

「そりゃあ、どうせ俺もプレシアに用があったからよ。ちよつと良
いから序に手伝ってやるよ」

俺は乗せた手を乱暴にかき回す。

「……ん。強い」

「おっとわりい」

俺は幸坂の抗議を受け手を放す。

「……」

「ん?どうした?」

「……何でもない」

何故か、微妙に不服そうに俺の手を見てからそっぽを向く。

一体何なんだよ……。

「ま、アレだ。明日一日特訓して、決戦に備えるか」

「……疲れないの？」

俺の言葉に当然の疑問を聞いてくるが、別にそんなことはどうにでもなる。

「はっ、俺の身体はそんなに軟じゃねえ。昔、三日間徹夜した後に、学校の体育のサッカーでハットトリックを決めた位だ。一日位どうってことねえよ」

これはほんとにキツかったな。

前世でこんなことをしたのだ。今の俺ならサッカーじゃなく転生者と戦えるだろう。

「……それは、呆れればいいの？」

「何故に！？……えっ、すごくない？転生する前だぜ？一般人のときにこんなことしてたんだぞ？」

「……バカ？」

「うをい！ストレートに言うんじゃないぞ！」

そんなアホな漫才みたいなことをしながら、夜は更けていった。

「……………まさか、本気？」

「ああ、本気も本気だ」

次の日、俺たち二人は朝から山にある、俺の修業場（仮）に
いる。

色々な人を誤魔化し、学校に行つたと見せかけここに二人で来た。

恭介に、『もう数日休む。』とメールしたら。

『あいよ』と帰ってきた。

こいつはほんとに何者だ…。

ま、とりあえず。夜までは二人で出来ることをしよう。

「つゝわけで。早速やるか」

「……………（コクッ）」

俺の言葉と共に、幸坂の手に『小烏丸』が握られる。

そして、俺の左腕が浅黒く変わる。

「トレース
投影・開始」

その呪文と共に、片手に日本刀を握る。

「……………？」

いつもと全く違う俺の雰囲気気付き、幸坂は疑問顔になる。

「お前は、剣技ではなく、戦いで負けたと言った。なら、俺が出来るだけ再現してやる」

俺はそういつて刀を構える。

構えると言っても、更木剣八は構えが無いから、手をダラリと下げた状態で相對する。

「……あ、それと。影の槍も、使ってた」

「はあ？」

幸坂がいきなりそんなことを言ってきた。

と、言うか。二つの能力持ちか…。

基本相手は一つだけの能力しか持っていない。
だが、今回の敵は二つ？

「……………」

「……………どうかした？」

「んあ？いや、なんでもない」

黙って考えていた俺に、幸坂が声を掛けてくる。

「よし……わかった。それも再現してみよう」

「……できるの?」

「もち…」

俺はそう言っつて、呪文を紡ぐ。

「トレース 投影・オン 開始。フリーズアウト 停止解凍。ソードパレルフルオープン 全投影連続描写」

それにより剣軍が俺の後ろに浮かぶ。

「これで再現できるだろ?」

「……そうだね」

そう言っつて、俺たちの修業が始まった。

……そして、夕暮れになり。

俺たちの周りの地面は抉れ、剣が数百本突き立っている。

「ま、こんなもんだろ」

「……疲れた」

「今日も家来るか?」

俺が振り返って言うと、幸坂は顔を上げて、何故か疑問顔の紅い瞳で見上げてくる。

「ん？どうかしたか」

「……どうして、こんなに関わってくるの？」

どうしてと言われても困るんだがな……。

「ん〜。ま、俺とお前が、もうダチだからじゃね？」

「……疑問形で、言われても………ダチ？」

幸坂は一つの単語に疑問を感じて、それを呟く。

「なに不思議がってたんだよ」

俺は幸坂の頭に手を乗せ、ワシヤワシヤと撫でる。

「こつやって、訓練二人でやって、同じ家で同じ飯を食ったんだ。これでダチ意外に何が在んだよ」

手を退けて、幸坂の眼を見返す。

「と、言う訳で、行くぞ〜」

俺は家に向かって、さっさと歩き出す。

「……あ。………待って、行く」

「おう、来い来い」

そつやって、俺たちは家に帰って行った。

その後、夕飯を食い。

自室で、アルフの事やフェイトの事をクロノから聞いているときに、ちょうど幸坂が部屋に入ってきた。

「……………皐月、風呂空いた」

『！？何故そいつがそこに居る！？』

「あゝ、クロノ。悪い、報告が遅れたが、こつちも保護したから」

俺は、怒っているクロノに軽く言う。

『はあゝ。君は本当に……………』

呆れられた。心外だな……………先にそつちのことを聞いてたから言わなかっただけなのに。

「……………？皐月、それは？」

『……………時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ』

クロノは一応自己紹介をする。

ま、幸坂は知ってるだろうけど……………。

「……そう、こっちは、こっつ聞いてるよね？」

『ああ、幸坂一真だな』

「……ん、合ってる」

ベットの上の俺の横に、幸坂が座ってくる。

それから、幸坂にも色々と話す。

内容は、フェイトとなのはの一騎打ち。

そして、フェイトの帰還先追跡についてもだ…。

「いいのか？んなこと教えて」

『君たちなら、彼女たちの邪魔はしないだろう？』

見透かされるのは、そこまで好きじゃねえが…。ま、仕方ねえか。

『そう言う訳だ。また明日な』

「おう、じゃあな」

そう言ってモニターが閉じる。

「そんじゃま、俺は風呂に入ってくるよ」

「……ん。……明日、頑張る」

「ああ、もちろん」

俺は幸坂に拳を突きつける。

それを理解した幸坂も、自分の拳と打ち付けた。

決戦前夜は更けていき、時は来る。

第19話 修業 じゅんぴ (後書き)

いやはや、前書きでは取り乱してしまつて申し訳ないです。

真「ま、仕方ねえんじゃねえか？」

そつだよな……。私の今の生活から、なのはやネギま！やFate等々、名作がなくなつてしまつたら、どうやって生活を維持したらいいか分かんなくなりますよ……。

真「A、Sの劇場版もまだだしな」

そつなんだよ。劇場で、はやとヴォルケンスとラインとすずかの活躍が観れなくなつちまうんだよ！

真「……何故すずかちゃんまで？」

え？ただ私が個人的に好きなだけですよ？

真「お前、確かポニテ好きだつたはずなんだが……」

違う！俺はポニテ好きじゃない！リトバスの鈴好きただけだ！

確かに、恋姫の愛紗や憂鬱になつてるハルヒのポニテ版や、ネギま！のアキラも好きだが、ダントツで鈴が好きだー！ー！ー！！！！

真「欲望の塊だな」

いや、今挙げた子たち以外にも好きな子は……

真「はいはい。もういいから黙れや」

酷くねえか…。

真「あ、あの条例、残酷な描写もダメならアカギとかもダメだな」

もう…いや…。

石原はなにがしたいんだ…。orz

真「あゝ。今回もまた作者が落ち込んでいるので俺だけで。

次回 第20話 決闘 じゃまもの」

その力は、戦うために…。

第20話 決闘 じゃまもの (前書き)

20話目の投稿です。

今回はちょっと読みにくいかもしれませんが、いつも通り生温く見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第20話 決闘 じゃまもの

早朝、ついに決戦のときは来た。

高町家前で幸坂と並んで待っていると、なのはが出てくる。

なのはは一度幸坂の方を見て、俺に目を向ける。

たぶん幸坂のことはクロノから聞いたのだろう…。

「それじゃ、準備はいいな？なのは」

「うん、戦術も切り札もバッチリだし、何より、フェイトちゃんにはしっかり答えてもらいたいしね」

俺の確認に、なのははその決意の籠った瞳で見返してくる。。

「おし、そんなじゃ行く…あゝ、お前ら先に行ってる」

「ふえ？」

「え…？」

「……………」

俺の突然の言葉に、なのはとユーノは疑問の声を上げ、幸坂は静かに俺の方を見る。

「悪い……………トイレ行ってくる……………」

「ちよ！？真耶！？」

「……………バカ？」

何故か幸坂から罵倒を受けた。

「うるへえ！お前らはさっさと行け、終わる前には絶対行けるから。と言うか、そんなに長い人居るのか？」

「……………アホなこと言ってないで、速く、逝け」

幸坂はその手に呪符を持って構えている。

「ちよ！？ま、待て！わかったっ、わかったからそれを下げろ！」

「……………北帝勅語」

「だああー！！クソが！！」

呪文を唱え出したのでさっさと済ませてくるか。

「……………ほら、高町。…あいつは、放っておいて、行く」

「あ…うん」

幸坂はなのはとユーノを引き連れてさっさと行った。

それを確認し、俺は玄関から出て、高町家の門を開ける。

「お早う御座います。士郎さん」

「ああ、おはよう真耶。それと、父さんだ」

そこに立っていたのは高町士郎さん。

たぶんなのはが出て行くのが分かったから、ここに居たのだろう。

「…父さん、なのはのことは心配いらぬ。俺が命に代えても護る、だから、待っててやってくれ」

俺は士郎さんから、ここに居る理由を聞かずに看破し、要求をストリートに言う。

てか、この状況で判らない奴は居るのだろうか。

「…それはダメだ」

承諾してくれるかと思っていたが、期待は裏切られた…。

…ように聞こえた。

俺が口を開き、声を発するより早く父さんが言葉を発する。

「なのはを護るのはいいが。お前もすっかり、無事に帰って来い」

「……はい」

不覚にも涙が出そうになった。

こんな俺を、ただ、お隣で仲が良かっただけの子供を、ここまで思ってくれるなんて。普通の、その辺に居る人なら出来ない。

なら、思われる俺も、普通の人出来ないことをしよう。

「…行ってきます」

「行ってらっしゃい」

俺は頭を下げ、挨拶をし、下げたまま踵を返し、後ろを向いたところで顔を上げ歩いて目的の場所に向かった。

416

少し歩いたところで、メルから念話があった。

『真耶。転生者だよ』

『こんな時にかよ…。何処だ』

俺は悪態をつきつつ質問をするが、その答えで俺は驚愕した。

『場所は 海鳴市海上、臨海公園付近』

『なっ!?!?』

s i d e · o u t

s i d e · 一 真

今、僕とユーノ、そして途中で合流したアルフは、海に建っているビル群の中の一つの屋上に居る。

本物のビルではなく。確か、上空まで伸ばした二重結界の中に建っている、戦闘訓練用のレイヤー建造物何だとか。

これならどれだけ壊しても構わない。って、エイミイは言っていた。

そんなことを考えていると、なのはが一人でいるビルの屋上にフェイトが降り立つ。

その光景は、その場所を映しているユーノの手元のモニターに映っている。

『フェイトっ。もうやめようよ…。これ以上、あの女の言い成りになつてたら…』

戦闘になる前に、主を想う使い魔は説得をしようとするが、フェ

イトの気持ちは変わらないだろう…。

『…それでも私は、あの人の娘だからっ』

その主の決意に応え。もう一人の従者　バルディッシュは
その身を鎌にし、戦闘準備を整える。

『……フェイト』

『一真…』

僕も、フェイトに念話を飛ばす。

『……今頃、僕が何を言っても、君は止まらない。…だから、僕から言うのは、これだけ…頑張っ』

『…うんっ』

それで、僕たちの会話は終わる。

僕とフェイトの会話は、お互いのこともあってそれほど長く続かない。でも、それでもきつと、心は届いているはずだから…。

「…フェイトちゃんは立ち止まれないし、私はフェイトちゃんを止めたい」

話しながら、なのははレイジングハートをデバイスにする。

「切っ掛けは、きつとジュエルシード…」

《リリース、ジュエルシード》

なのはのフェイトに向けている言葉に、レイジングハートは反応し、今回の事件の大元を出す。

「だから、賭けよう？お互いが持つてる、全部のジュエルシード。それからだよ…全部、それから…」

なのはが、レイジングハートをフェイトに構えながら、最後の言葉紡ぐ。

「…私たちの全ては、まだ始まってもない。だから、ほんとの自分を始めるために…始めよう？最初で最後の…本気の勝負！」

その眼には、彼女の不屈の意志が宿っている。

そこに、いつもの感覚を感じた。

「……こんな時に……」

「一真？」

隣に立っていたユーノが、僕の呟きを聞き取り声を掛けてくる。

「……ちょっと、行ってくる」

「…わかった。気を付けなよ？」

「……………」

僕はその言葉に首肯で答えた。

ユーノは皐月に粗方のことは教えてあると言っていた。
僕たちが戦つべき相手のことくらいだろうけどね…。

「…??? 青魂青龍、一乏の襦色を持って、天翼を得ん」

空中へ浮くための呪を唱え、その身を空に預ける。

そして、身体をコントロールして、フェイト達が戦っている方向とは逆に飛んで行き、この眼に捉えている…“二つ”の点に向かつていく。

そこに居たのは、あの男とは違う男と女だった。

男の方は、右腕だけ切り落としたシャツを着ており、見えている右腕には刺青のようなものが描かれている。

たぶん、『紅指のクラウの右腕』だろう。

そして、女の方は…コスプレのボンテージの様な露出の多い格好に、両目を隠す眼帯をしており、一見すればちよつとアレな感じだが…恐らく、あの眼帯の下は相手を石化させる…『石化の魔眼』キユクレイだろう。

となると、女の方の能力はFateのライダーか…。

「……直ぐに、終わらせる」

僕は、右手に『小烏丸』を、左手に『鉋切』を持ち構える。

「……………」

「言ってくれますね」

男は何も喋らず、女は僕の言葉に反応して、その手に持つ鎖付きの短剣を構える。

それに吊られるように、男も右腕を振り上げ、その掌から光が溢れる。

「……………行く」

「…行きます」

「……………来い」

静かに、戦闘は開始された。

「はぁぁあっ！！」

女が空を自由に飛び回りながら短剣を投合してくる。

それを『小烏丸』で弾く。

「おりゃああああ!!!」

そこに、ビルの壁を蹴って男が突貫してくる。

「……ふっ!」

それに『鉋切』を振るう…が。その斬撃は、男の右手から放たれている光と衝突して、男に傷を付けられず拮抗する。

「……はっ!」

それを払い、距離を取った所にまた短剣が飛んでくる。

…とそんな感じのことを数回繰り返したところで、僕と男の間を碧色の極光が通り過ぎる。

飛んできた方向を、僕と相手の二人が振り向く。

そこに居たのは、背中から悪魔のような翼が生え、右腕が血の気が引いたような色になりこちらに人差し指を向けた状態で飛んでいる。

「…よう!俺も混ぜろや」

皇月真耶が居た。

side - out

俺が結界内に入ると、すでに二ヶ所で戦闘が開始されていたので、俺は俺のやるべきことをするために“背中”の構成を変化させて、BLEACHのウルキオラの『斬魄刀』解放状態の翼を生やし、考えるのが面倒臭いので右腕を『ウルキオラの右腕』に変化させて飛ぶ。

「あゝゝクソツ！何でこつ儘ならねえなっ！」

そう叫びながら飛んで行く。

男が右手を光らせながら幸坂に突っ込んでいくのが見えた。

あれ位幸坂なら避けるなり出来るだろうが、ここは俺の存在を示しながら登場と行くか。

「…喰らえや」

変化させた“右手”の人差し指をちょうど二人の間に向け、魔力を溜め、放出する。

「虚閃^{テロ}！」

それと共に指先から碧色の砲撃が飛んで行き、狙い通りの所を通

り、三人がこちらを向く。

…え、何か言わないとなのか？

「よ、よう！俺も混ぜるや」

相手の二人の眼が鋭いのは分かるが、何故か幸坂の眼も鋭くなり、こちらに近付いてくるのでドモってしまった。

「……とう」

「ゴツ!?!」

…何故か『小烏丸』の柄で頭を殴られた。

俺はその理不尽に、痛みが奔るところを押さえながら抗議した。

「いってえーなっ！何すんだこの野郎!!」

「……来るのが、遅い。一人だと面倒」

うっ…。そこを突かれると言いつ返しなさい。

「クッ、悪かったよ。これから挽回だ」

俺は翼を広げ、右腕を構える。

「……それなら、許す」

幸坂も俺の横で構える。

「お話は終わり?」

俺たち二人の話を黙って聞いていた女が声を掛けてきた。

「ああ。悪かったな…こつから主役の登場だ。派手に行くぜ!」

「……主役?」

「そこは気にするな…」

軽口を叩きながら、俺たちは敵へと飛んで行く。

「おらあああああ!」

男が右の掌に魔力を集めて突っ込んでくる。

それしか能がないのだろうか…。

「…はあっ!」

俺は“眼”を『写輪眼』に変化させ男の攻撃を避ける。

男は横を通り過ぎ、ビルに突っ込み煙を上げる。

「ガッ、アアアアアアア!」

獣のような叫びを上げながら、男が煙の中から飛び出してくる。

その男の突き出した右手に合わせるように、俺も右の掌底を放つ。

あの光は、生身ならば簡単に貫くことが可能だろう。

しかし、アランカル破面の鎧を貫くことは無いだろう。

「おらぁ！」

お互いの掌が衝突する。

「くっ…！」

やはりかなりの衝撃が来るが、問題にはならない。

指を組むようにして相手の手を掴み、魔力を掌に収束させる。

「なっ！？貴様！」

男は俺がやろうとしていることに気付き腕を引こうとするが…俺がガツチリと掴んでいる。

「まあまあ、喰らってけやっ…！！！」

俺と男の掌の間から碧色の光が漏れ出す。

「アカラール・ゼロ掴み虚閃…！！！」

そのまま打ち出す。

「ぐあああああつっ！！！！」

男が吹っ飛びビルに叩き付けられる。

右腕はかなり頑丈なようで瓦礫の中から右腕が飛び出してくる。そして、周りの瓦礫を吹き飛ばし男は立ち上がる。

「ぶっ…」

息を軽く吐き出し、男を警戒しつつも右を見る。

白かった手が今は黒く焦げている部分がある。できれば血が出ていて欲しかったが、焦げていて逆に出ていない。

あの右腕を粉碎するにはもつと威力のある攻撃が必要だ。その為には、右手から血を流さないといけない。

「…余所見たあ、調子乗ってんなよ！」

男は上空に跳び急降下するように降ってきた。

「…誰がいつ余所見したってえ？」

男の一つ覚えの右腕による攻撃に、右手の掌底をもう一度ぶつける。

だが、今度は何もせずその状態で相手を弾く。

「アアア？」

男は疑問の声を上げるが…これでいい。

右手を見ると、さっきの火傷の箇所の傷が開き血が出ていた。

俺は翼を羽ばたかせ急速に男に接近する。

「はっ！こいつ！！」

男は右掌に魔力を集中させて突き出してくる。

それを今度は完全に見切り首を傾げて躲す。

そして、右腕を左手で掴み、血が出ている右掌を男に向けて砲撃を放つ。

「グラン・レイ・ゼロ王虚の虚閃ツ！！」

俺の掌から、アランカル破面の血を混ぜた青色の虚閃ゼロが放出される。

グラン・レイ・ゼロ王虚の虚閃は、通常アランカルの虚閃に破面の血を混ぜて放つ、ゼロ虚閃系最強の攻撃。

その威力は空間を歪めるほどの威力がある。

たぶんこの世界では、次元震とかになってしまいかもしれないの
で威力は極力下げたが…それでも相手の男は一撃で黒い粒子へと滅
された。

「こんなもんか…さて、幸坂は、っと」

幸坂を捜してみると、なんか天馬ヘガサスと雷が衝突していた。

……何ぞ？

そして、拮抗していた二つは、いきなりペガサスが二つに真つ二つにされることで崩れた。

雷の後ろから放たれた紫色の縦の一閃は、ペガサスの後ろの空間すら切り裂いたかのような錯覚を覚える。

「…って、あいつ“アレ”を使ったのかよ」

俺は何をしたのか把握して幸坂に近付いていく。

“右腕”を元に戻し、“左腕”の構成を変えて『アブラクサスの左腕』にするのは忘れない。

s i d e - o u t

時間は少々戻り…。

s i d e - 一 真

鉄と鉄が交差する甲高い音が響き、女がビルの屋上に着地する。

さつきからこれの繰り返し。

しかし、女の方から動いた。

「そろそろ行きますよ……」

女はその言葉と共に眼帯を外す。

僕は呪符を数枚撒き、女の『石化の魔眼』の効力を打ち消す。

その少しの隙に、女は短剣を首に刺し天馬を召喚し、手綱を掛ける。

僕はすぐに今持っている刀を仕舞い、『雷切』を取り出し呪を唱える。

「十五雷の天神下り、如何な外法もここに堰く」

そして、女は、その幻想を解放する名を叫ぶ。

「ベルレ・ホーン 騎英の手綱ッ！！！」

それに対する僕は、防御の姿勢で『雷切』を今立ってる場所の前のとくに突き刺す。

「十五雷正方、二直、禁っ！」

女の駆る幻想が雷の障壁阻まれる。

衝突した衝撃で、僕が立っているビルの周りの建物が崩れ去る。

このままの状態にいるなら、僕の方が打ち負けるだろう。
でも、終わらない。

「ふう……カネ 牡簀かけ闇す総光の門 ……しちやくしちせい 七惑七星が招きたる、ゆらいそつ 由来艸

「阜の勢……」

新たに刀を召喚するための呪を唱える。

その刀は、僕が持つ、最強の刀。

「……武曲零零、急ぎて律令の如く成せ」

この、目の前の幻想を打倒するための剣……。

「……千歳の儔、真打」

『クサカベ』から出ている柄を引き抜く。

「?????童子切安綱ッ！」

僕の手には鉄塊の剣が握られる。

その剣は、刀身だけなら確かに日本刀のそれだが、鍔にあたる部分に黄色い果実のようなコブがいくつも迫り出している。

その、草壁五宝最強の一振りを上段に構える。

そして、新たに呪を唱える。

「……涅より生じし万鬼の王」

手中の妖刀が脈動するのがわかる。

「……神毒鬼便の緋き狂水を以って、その御霊を鎮めん」

唱え終わると、童子切の柄から針のような棘が生じ、僕の手を貫き、白い亡者の手が手首に絡みつく。

「……………ふうー」

痛みに耐えるために息を小さく吐く。

貫かれた箇所から鮮血が滴り、『童子切』を濡らしていく。

手の中で、刀が悦び、脈打つのが判る。

「…斬り裂け」

握りを確かめ、目の前の敵を睨みつけ…。

「……………鬼牙、絶刀オツ！」

縦一文字に振り下ろす。

刀身から光の刃が奔り、目の前の幻想を斬り裂き、黒い粒子へと変える。

それと共に、『雷切』の雷も消え、白い煙を出していた。

役目を終わらせた『童子切』を消すと、傷口から血が落ちてコンクリートを真紅に染める。

「…ん」

『雷切』も戻し、臯月を捜すと、既にこちらに向かってくる。

その左手は白く染まっている。

たぶんさっきのを見たから、僕の治療をするためだろう…。

とりあえず、これでフェイト達の方を見に行ける。

side - out

side - 真耶

幸坂は『童子切』と『雷切』を消すと、こちらを向いて左手を上げて手を振っている。

「はあく、アイツは…」

ため息を吐き、幸坂の前に降りる。

幸坂は右手を血に濡らせた状態でこちらを見ている。

「お前なら、『童子切』使わなくても大丈夫だったんじゃないか？」

とりあえず疑問を聞いてみる。

「……む、相手は、限りなく英霊に近い存在。…僕は、特殊な刀を

持っている、ただの人。勝っただけで、褒められていいと思う……」
そう考えると、確かに。

俺は体の構成を変化させればいいが……。

こいつは魔力で身体能力を上げているとは言っても、肉体は常人と変わらないのか。

「……ん、そうだな。悪かったよ……と言う訳で、右手を出せ」

「……はい」

右手を出してきたので、傷の無い部分を右手で掴み左手を翳し、魔力を込めて傷を癒す。

「……ほい、終了」

「……ん、ありがとう」

とりあえず治ったので手を離すと、礼を言いながら手をすぐに引込めた。

「ん？……ま、いいか。行くぞ？」

俺は微妙に感じた違和感を無視し、翼を羽ばたかし空に上がりユ
ーノ達の方に向かう。

「………ん」

幸坂も、小さくそう言って飛んでくる。

俺と幸坂が着くと、なのははバインドで繋がれた状態になり、フ
エイトは魔法陣を展開し、周りには数十という魔力スフィアが滞空
している。

「設置型のバインド…それにあれは…」

「フエイト……」

ユーノとアルフが呟く。

ま、たぶんなのはは大丈夫だろう。

俺の教えられることはしっかりと教えた。
あいつなら、やれる。

s i d e - o u t

s i d e - なのは

バインドで両手首が繋ぎ止められる。

ちょっと前の私なら、ここで慌てふためくだろっけど、今は違う。

ユーノ君やレイジングハートが教えてくれた魔法を信じ、そして、真耶おにいちゃんの教え通りに、やる。

『戦闘中、絶対にやってはいけないことは、何だと思っっ。』

おにいちゃんと初めて模擬戦をやった後にされた質問。

『え？ええ〜っと…相手から気を逸らすこと？』

『ん…確かにそれもあるが、俺はそれじゃないと思ってる』

『ふえ？』

『絶対にしてはいけないこと、それは………』

考えること、思考をやめること！

どんな不利な状況だろうと、それを乗り越えるための考えを絞り出す。どんな時も思考を止めたらやられる。

いつも、相手の先の先の先を往き、裏を掻き相手を打倒するために、思考を止めない。

「……」

魔力をレイジングハートに送り、次の攻撃への布石を打つ。

それと共に、フェイトちゃんはバルディッシュを振り下ろす。

「フアランクスシフト…撃ち、砕けえええっ！！！」

その雄叫びと共に、魔力弾の弾幕が私に迫る。

s i d e - o u t

s i d e - 真耶

なのはが爆煙に包まれる。

途中までは、シールドで防いでいるのが見えたが、今はその煙で見えなくなっている。

だが、フェイトは攻撃を止めず。全弾撃ち終わった後も、残ったスフィアを集めて電撃の槍を造り出し構える。

「スパークツ…」

それを振りかぶり、投合する。

「…エンド」

それが、なのはの居るであろう場所に衝突し、周りのビルや、海の水さえも吹き飛ばすほどの爆発を起こした。

「ハア…ハア…ハア…」

魔力をかなり使ったフェイトは息が切れている。

少しして、煙が風によつて巻かれていく。

その爆煙のなかから、白いバリアジャケットが所々破損し、少し黒く煤けた状態のなのはが姿を現す。

《いけますか？マスター》

「いけるよ、レイジングハート」

白きパートナーはまだ余力が残っているようだ。

レイジングハートをフェイトに向け、形態を変化させる。

「…。うおおおおおっ！！っ！？」

フェイトも、余力を振り絞り応戦しようとしたが、桃色のバインドが右手首と両足首を捕え動けなくなる。

「バインドッ？何時…」

おそらく、あのフェイトの溜めの時だろう。
ほんと、小学生の発想じゃねえな…。

フェイトも気付いたようだが、もう遅い。

「ダイバイイーン」

なのはの構えるレイジングハートに環状魔法陣が展開され、穂先に魔力が充填されていく。

そして、その溜まった魔力は、なのはの言葉^{トリガー}によって放たれる。

「バスタアアーーーーーッ！！！！」

その、桃色の極光の剣が解き放たれ、フェイトに向かう。

「……くっ、ハアッ！…う」

それをシールドで防ぐが、魔力が足りず、バリアジャケットを少しずつ蝕んでいく。

砲撃が止む。

フェイトは風に流されていくマントを眼で追った。

なのはも限界だろうと…思考を止めた。

その間に、なのはは上空へと上がり、戦場にばら撒かれた魔力を

集めて、自分の前に極大の魔力球を作っている。

《スターライト・ブレイカーツ!》

「…使い切れずに、ばら撒いちゃった魔力を、もう一度自分の所に集める」

その球体の周りに環状魔法陣が展開され、さらに収束されていく。

「…収束…砲撃?」

そのバカみたいにデカイ魔力の塊を見て、フェイトは呆然と呟くように声を漏らす。

環状魔法陣が回り、どんどん収束していき、やがて消える。

それは、つまり、収束の完了を意味し、フェイトの敗北を決定付ける一撃が放たれるということ。

「レイジングハートと考えた、知恵と戦術…最後の切り札っ!」

なのははレイジングハートを振り上げる。

「受けてみて!これが私の…全力全開っ!!!」

桃色の魔力球から、フェイトの方向に向けて魔法陣が展開される。

「…う、あああああああっ!!!」

フェイトも最後の力を振り絞るように、五重の大きさの違うシルドを展開する。

第20話 決闘 じゃまもの（後書き）

祝！！！！20話到達！

真「&PV5万ユニーク、5600アクセス突破！」

いつも読んでくれてる皆様、今話が初めての人、ありがとうございます。

感謝の嵐でございます！

真「いやはや、なのはブランド恐るべし、ってやつだな」

そうだな。

最初は上がり上がったテンションとノリだけで書いていたのですが、今となっては読んで下さる皆様が居ると言うだけで書けます。

本当にありがとうございます。

真「ありがとーうー！」

さて、感謝もこの辺に、後書きつぱく本編のことも喋りますか。

真「ようやく作者つぱくなってきたな…」

今回の終わり方は微妙になってしまったのですが…これは仕方ないと思ってくれば幸いですね。

真「確かに、なんか変なところで切れてるよな」

ま、その辺は次の話が長くなってしまっからなんですよね。

真「そんな長くなるのか？」

長くなる……………予定

真「おい……」

そ、それでは次回 第21話 真実 しようたい
その力は、戦うために……。

第21話 真実 しょうたい (前書き)

投稿でございます。

何とか今年中には無印を終わらせたいですね。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第21話 真実 しょうたい

なのはのSLBの余波が修まりフェイトの姿が見えてくる。

その姿はかなりボロボロに見えるが、息は在るだろう。

そして、フェイトの落下が始まるが、それよりも速く幸坂が飛び出し、フェイトの下に移動してキャッチした。

“背中”の構成を変化させて真っ白な『烏族の翼』を生やし、俺はなのはの方に飛んで行く。

「なのは、大丈夫か？」

「あ…真耶おにいちゃん。…うん、大丈夫だよ…？」

言葉ではそう言っているが、魔力を消費しすぎて空中浮遊用の靴から出ている羽はかなり小型化しているし…辛そうな顔色だな。

「はあ…あ、そうだ。言いたいことがあったんだ」

「ん？なに？おにいちゃん」

俺がそう言つと距離を詰めてくる。

そのなのはの頭に手を伸ばして……………グーで軽く小突く。

「にゃっ？」

何故小突かれたのか分からないのか、不思議そうに声を出す。

「お前、全力全開過ぎ…。いくら魔力ダメージでアレはやり過ぎだ」

これは言っておかなくては、マジで魔砲少女になつちまう。

「う…。でも…。フェイトちゃんに私の全力をぶつけて止めたかったから…」

なのははそう言つて顔を俯ける。

ま、反省してるっばいしいかな。

「とりあえず今回はいいよ。…それと、」苦勞さん

「ふえ…？…え？ふえ！？」

俺はなのはの頭に手を置き撫でる。よくやったという気持ちを入れて。

「…ゆ」

俯けていた顔を上げて、顔を赤くしてまた俯けてしまった。

それはお前のセリフではないと思うんだが…。それと何で顔が赤いんだ？やっぱり魔力の使い過ぎか？

「……皐月」

「ん？おお」

後ろからフェイトを支えながら幸坂が来ていた。

フェイトはやっと飛んでいるといった感じだ。

「あ…フェイトちゃん。その…ごめんね。やり過ぎちゃって…大丈夫？」

なのははフェイトの方に飛んで行く。

「…うん。大丈夫」

そのなのははに少し暗い顔で返事を返すフェイト。
やっぱり負けたのが悔しいんだろうな。

二人が黙っていると、空が雲に覆われて行く。

そして、周りに小さな紫色の雷が、的を捜すかのように振ってき…俺たちの真上から、俺たちに狙いを定めた大型の雷が振ってこようとしていた。

「幸坂！後ろは任せた！！」

「…（コクッ！）」

俺の言葉に幸坂は頷き、その手に『雷切』を出現させる。

俺は“左腕”を変化させて『弓兵の左腕』にし、盾を左腕の記憶から引き出すための呪文を詠み上げる。

「I am the bone of my sword（体は剣で出来ている）」

宝具を引きずり出すときに、左腕が記憶を侵食しようとしてくる。

いくら俺が一度死に、転生者として生き返ったとしても、英霊は人の一つ上の階層に位置する存在。

俺達転生者は、どっちつかずの半端な存在だが、衛宮士郎よりはマシだ。

まあ、たかが左腕に俺の記憶を壊させはしない。

一応、あの盾は浅いところにあるからまだマシだろう。

「ロー・アイアス熾天覆う七つの円環！」

雷が振ってくるのと同時に左腕を突き出し、紅い七枚の花弁のような盾を引きずり出す。

「クウッ！！」

盾に直撃した瞬間に花弁が四枚持っていかれた。だが残り三枚あ

俺は吠えながら右腕をさらに変化させる。

『変化した右腕』の上位の姿えと変わる。
ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテ
名を『巨人の右腕』。その姿は、肩の突起が消え形が盾のような形になり髑髏の様な模様が描かれている。

その強度は巨人の名の通りかなり固い。

右腕を変えた瞬間に魔法陣を消し、右腕に魔力を限界まで叩き込み、おもいつき振り抜く！

「ドツラアアアアアアアッ！！！」

右腕の力は守ることに特化しているが、それでもこれを吹き飛ばす威力は出る！

雷との押し合いは、俺の勝利となった。

「ゼエゼエゼエ……」

「????????????????????????????????ツ！？」

「……ッ！」

なのはと幸坂が何かを言っているが、耳の調子が悪いのかよく聞き取れない。

しっかり聞いてやらねえと……。

俺は翼を動かし近づこうとするが、その前に翼が消えて落ちそうになる。

「…臯月っ!」

そこを幸坂が珍しく焦った声を出して抱えてくれた。

「……おっ……? ……悪い…助かった」

幸坂に礼を言う。

「……無茶しすぎ……」

「おにいちゃんっ!」

妹分も近づいてくる。

「…おっ、大丈夫そうだな」

なのはが無事なのを確認して安堵する。

「わ、私よりもおにいちゃんがつ!」

「……少し落ち着く。……別に傷はない……アースラに行こう」

かなり焦っているのはに、今は冷静さを取り戻した声で幸坂が告げる。

「そ、そうだね」

「…かあ、さん」

フェイトがポツリと呟く。

それを掻き消すかのように、波は荒れ狂い音を立てていた。

side - out

side - プレシア

時の庭園に警告音が鳴り響く。

今はそれが煩わしい。

「ガッ！…ゲホッゲホッ！」

堰き込む口に手を当てる。

その掌には紅い血が溜まっていた。

この体はすでに限界が来ている。

確かに…“あの男”は私に力をくれた。しかし、私には時間が足りなかった。

アルハザードまで行く為の時間も…フェイトを…あの子の妹として可愛がる時間も…。

もう、何もかもが遅すぎた。

あの男は言っていた…。

『俺が力をくれてやるのか？その力で…俺に“喜劇”を見せてくれよ』

いいわ、好きなだけ見せてあげる。

この大魔導師、プレシア・テストロッサの喜劇を！

ただ、未だに不安は残る…。

「…フェイト」

あの子は、しっかりと私を拒絶するだろうか？

いや、そこは私がするしかない。これまでも仮面を被り続けてきた。

最後のほんの数分位、どうとでもできる。

「…さあ、始めましょう」

“悲劇”の最終章の幕が上がる。

side - out

俺はアルフの肩を貸してもらって歩いている。

目的の場所は、アースラのブリッジ。

フェイトの腕輪を、クロノは付けないでいてくれた。
あいつも思うところがあったんだろう。

「ねえ…やっぱり、アンタは医務室に行った方が…」

アルフは俺の顔を見て行ってくる。

俺は、さっきの雷による次元跳躍攻撃を『イノ・トウエ殲滅眼』で吸収したときに、僅かだがロキの転生者を形作っている黒い粒子を取り込んでしまった。

何故あの攻撃に入っていたかは不明だが、これからわかるだろう。

それに、前回よりもかなり微量だし、二回目だからかまだ体はマシなようで…能力は一応使える。

色々と考え事をしていたら着いたようだ。

「アルフ、もう大丈夫だ…ありがとう」

「え…?」

俺はブリッチに入ると共にアルフから自然な流れで離れる。

「本当に大丈夫なのかい？」

まだ心配してくれているようだ。…やっぱり優しいな。

「ああ」

俺はそれに簡単に答え前を向くと、リンディさんがフェイトに話しかけていた。

しかし、その話は聞こえていないのか、フェイトはバルディッシュに眼を落している。

「あの、フェイトちゃん…」

おそらく自分の部屋に誘おうとしたであるのはのちに、モニターの向こうからフェイトの眼を引かせる言葉が聞こえた。

『プレシア・テストロツサ。時空管理法違反…および管理局艦船への攻撃容疑で、貴女を逮捕します』

その言葉を管理局員が言っている間に、数人が奥の部屋へと走っていく。

それを見たプレシアの眼が見開かれる。

「…リンディさん。すぐに全員下がらせてください！」

「え…?」

俺の言葉に疑問の声を上げたのは数人。しかし、俺の言葉の意味が分かるのはすぐだ。

局員が奥の部屋に入ると…そこには緑色の培養液がポッドが左右に数十個並び、その一番奥には…。

『こ、これはっ!?!?』

『私のアリシアに!?!…近寄らないで!』

そう、ポッドに入った。フェイトのオリジナルの少女。

アリシア・テストロッサ。

それを見た、ブリッチに居るアースラクルーが息を呑むのが分かる。

プレシアは激昂し局員すべてをなぎ倒した。

「エイミー!すぐに局員の収容を!」

「は、はい!」

リンディさんの指示がとびクルーが我に返っている。

「アリ…シア…?」

フェイトの呟きを聞き取る。

おそらく、これまで感じてきた違和感がこんな形で晴れた…晴れてしまったのだろっ…。

力のない声で、あの少女の名を呼ぶ。

『…たった十個のジュエルシードでは…辿り着けるかどうか分からないけど…』

モニター越しにプレシアの独白が聞こえる。

今のプレシアはアリシアのポッドに凭れ、縋っているようだ…。

『もういいわ…。終わりにする』

プレシアはそう呟き、胸に手を持ってきて苦しんでいるかのよう
に握り締めている。

『…この子を失ってから暗鬱とした時間も…。この子の身代わり
の人形を…娘扱いするのモ』

その手が、僅かに震えているように見える。

この続きのセリフを何となく覚えている俺は、それを見ると怒り
で震えているように見えるが…アレは、何かが違う…。

『聞いていて?…あなたのことよ、フエイト』

プレシアの言葉は続いていく。

彼女は、体を半身こちらに向けているが、顔は見えない。

しかし、それが俺には…。

『折角アリシアの記憶をあげたのに…そっくりなのは見た目だけ…
…役立たずで…ちつとも使えない、私のお人形…』

…泣いているようにしか見えない。

『最初の事故の時にね…？プレシアは実の娘…アリシア・テストロ
ッサを亡くしているの』

エイミイが話したのは、俺が覚えている限りのことだった。

もちろん、プロジェクトFATEのことも…。

『そつよ…その通り』

プレシアは語り続ける。すぐ傍にいる娘に、己の罪を吐露するかのようだ。

『でも、失ったものの代わりには…ならなかった…。作り物の命は、
所詮作り物…』

プレシアはモニターを正面から睨みつけるように見てくる。

その表情でさえ、泣くのを我慢して作っている顔のように見える。

『…アリシアは、もっと優しく笑ってくれたわ…。我が儘も言った
けど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた…』

アリシアとの日々を懐かしむような声色で話が続く。しかし、その顔は、どこか目の前のことから少しでも眼を逸らそうとしているかのようで……。

プレシアの言葉で、俺の前にいるフェイトの頭が俯く。

『…アリシアは、いつでも私に優しくかった…』

そして、踵を返しアリシアのポッドを慈しむように撫でる。

これも逃避だ…。

『…フェイト』

プレシアは再びモニターに向き、話を続ける。

『あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作…。だから…。』

プレシアの眼に、悲しみと決意の色が視えたような気がした…。

『あなたはもう要らないわ…何処えなりと消えなさいっ！』

プレシアは吐き捨てるようにその言葉を、モニター越しのフェイトに言う。

フェイトの小さな肩が、ビクツと跳ねる。

『…いいこと教えてあげるわ…。あなたを作り出してからずっとね…私はあなたが……大嫌いだったのよ』

「……っ!？」

フェイトが息を呑んだことにより、手元からバルディッシュが滑り落ちて…クリスタル部分が割れた。

今のフェイトの心を表しているかのようだ…。

そして、フェイトが崩れ落ちる。

それをなのはと幸坂が支える。

「……フェイト」

「フェイトちゃん…」

二人が声を掛けるが反応を見せない。

今は幸坂達に任せて、俺はプレシアに言わなきゃならないことが在る。

「…プレシア」

喋り出した俺に注目が集まる。

モニターの向こうのプレシアもこちらを見てくる。

「…あんた、本当にそんなこと思ってるのか？」

『…なんですって?』

プレシアが睨んでくる。

しかし、その眼に全く恐怖は感じない。

「…アンタの、その血が出るほど握った拳と、その今にも泣きだすのを堪えているような顔を見ちまうと…どうしても、どうやって見ようとも…アンタは一人の母親にしか見えねえんだよ」

俺は指でさしながら指摘すると、プレシアは手を一度見てすぐに引込める。

『…そんなもの…そんな…こと』

プレシアの決心が鈍る。

「あなたの身体のごとは、まあ、置いておこう」

『…っ！?』

俺の言葉に反応する。しかし、すぐに仮面を被り直す。

「俺が聞きたいのは…本当にフェイトのことを嫌っているかって事だ」

『…なにを…今さっき、言ったでしょ？私は…』

ああ……。この世界にいる奴らはどうしてこう自分の心を素直に出さねえんだよ！

「だあっ！わかった！…そこで待っていやがね、フェイトと面と向かってさっきの言葉を言えるか試してやる！」

俺はそう言っただけで上着を脱ぎTシャツになる。

『……来れるものなら、来てみなさい』

プレシアはそう言っただけで魔法陣を展開し木偶人形どもを出してきた。

「はっ！そんなもんで……っ！？」

今、プレシアの魔法陣から、少量だが黒い粒子が漏れた。

「……………っ！」

幸坂も気付いたようだ。

『おい、幸坂』

『……………うん、見えた』

幸坂と念話で粒子について話す。

『どうなってんだ。プレシアは死にそうだけで死人ではない筈だ』

『……………わからない』

『それは私から話しましょう』

念話に声が割り込んでくる。

『お！？メル！？知ってんのか？』

割り込んできたのは久しぶりのメルだった。

『私はそこまで知ってないけど、私の隣に居る奴なら知ってるよ』

『……ようやく出てきたの？』

幸坂は誰だか知っているようだ。

『…て、まさか』

『そ、そのまさか。初めましてだな臯月真耶』

不意に男の声が入ってくる。

『……今頃、何してたのさ、“トール”』

幸坂は今の念話の相手に不満をぶつけていた。

つか……。

『トール…ね』

『そ。ま、よろしく。とりあえず話しておこうか、彼女がどうしてあの力を使っているのか』

『時間が惜しい。行きながら聞く』

俺はそう言うとメルが転移魔法陣を展開した。

「!?!?真耶おにいちゃん!?!?」

「真耶!？」

なのはとユーノが驚いて声を掛けてくる。おそろくさつき俺がフラフラだったのを気にしているのだろう。

だが、問題はそんなにない。

能力も、上位のものは使えないと思うが大丈夫のはずだ。

「……皐月、僕も……」

「そおい!」

幸坂も来ようとしたが、俺は持っていた上着を投げつけて言い放つ。

「バカ。お前はフェイトの傍に居ろ」

そう言っただけ俺はフェイトに歩み寄り語りかける。

「フェイト、お前が何だろうと構わない。だが、これだけは覚えておけ……ここに居るのは皆、アリシアのクローンのお前じゃなく、フェイト・テストアツサとの繋がりとあるということ……」

それだけ言っただけ魔法陣に乗り、転移した。

向こうに転生者も居るが、そこはなんとかするしかねえ。

絶対にプレシアは連れて帰る。

あいつが居ないとフェイトが心から笑うのに時間が掛かる。フェイトが笑顔じゃなくなる。なのはも笑えないの方程式が成り立つので、なのはの笑顔を護ると誓った俺にしてみれば、本当にフェイトのことを想っていないのかもしれない…。

しかし！

それでも引けない。

自分の護るべきものはき違えているあの阿呆は連れ帰る。

それが今俺のやるべきこと。

さあ、行くぜ！

転移が終わる。

目の前には鎧の木偶人形が大量にいる。

「おらぁ！行くぞ！！！」

俺は吠え、早速無理やり“右腕”を変化させて『シエルブリット』の第二形態に持っていく。

その腕は、第一形態よりも大きくなり、手の甲と平には円盤のようなものがかくつ付いており、甲の方は扉のようになっている。

そして、その右側の背には円状のプロペラが付いて、飛行が出来る。

「しゃらくせええっ!! 一気に行くぞ!」

俺はさらに“左腕”を変化させて、攻撃の力を宿した『ブラッ・イスキエルダ・デル・デア悪魔の左腕』にする。

「クアツ!?!」

無理に力を引き出し過ぎた。

身体の方が着いていかずに欠損が出来る。

今回はおそらく内臓のどっか。

よかった。内臓ならば戦闘に支障はない。

「さあ、行くぞ木偶人形。数の貯蔵は十分か…」

そう言って、左腕に魔力を注ぎ込む。右手の甲の扉が開き、中の円盤も回り出し右腕だけ金色に染まる。

そして、木偶の群れに飛び込んでいく。

「ハアッ！」

トールのお話を聞きながら、また一機潰した。

トールによればプレシアにあの力を与えたのは、ロキなのだとか。

ロキが直接手を出してきたと言うことになる。

だが、彼女　　プレシアはその力を内に取り込んで自我を保ち続けた。

故に、おそらくロキの思惑は狂っただろうということが聞かされた。

そして、この世界にも適正者は出てきて、プレシアがその一人なんだとか。

「だ〜っ！クソッ！面倒なことになってきやがった！」

若干キレ気味に目の前の木偶を殴り潰す。

さて、今まで俺は何機ぶっ壊してきたんだろうか。

ただ真っすぐ走り抜けてきてしまったので道もよくわからないが、たぶんコッチだろう。

二つの路に分かれている所を、右に曲がると共に左腕を突出し木偶の腹に突き刺す。

「オ、ラアアツ！」

そのまま振り抜き上半身を千切り飛ばす。

クソ、なかなかたどり着けない、どうなってんだ？

『ま、そういう訳だ。できればプレシアは排除ってことになるけど…君はしないんだよね？』

トールが答えが一択しかない問題を出してきた。

『当たり前だ。しっかり助けるさ…』

『どっせって？』

そこは、まあ、あの黒い粒子を何とかすればいいってことだから…。

『…『イノ・ド・タワー殲滅眼』で吸い出す』

『え！？ちよっ、ちよっと！？』

話を聞いていたメルが声を上げる。

『そんなことしたら真耶が！』

『なあに、何とかするさ。…念話切るぞ？』

『え…、ちよっと何とかって何よ！？ちよっと！？聞いて……』

強制的に念話を切る。

たく、心配してくれんのは嬉しいが、ちょっと過敏すぎる。

「ま、何とかするぞ...」

そう呟き、ただ前に立ちはだかる敵を粉碎して突き進んでいく。

S i d e - o u t

幕はまだ上がったばかり、真耶の闘争はまだ続く。

第21話 真実 しょうたい (後書き)

こんな駄文をいつも読んでくれてありがとうございます。

さて、一真を転生させたのは雷神ツールさんでした。

真「ほんとお前は北欧神話好きだよな…」

まあ、結構好きな方だな。

けど、fortissimoを買っていないんですね…。

真「あー、アレは北欧神話とかモデルにしてるんだよな」

ホームページ見ただけでも興奮したものです…。ですが、金欠て…。

真「それはお前が悪いだろうが」

そうなんだけどさ…。

真「はいはい、そんな事よりも、本編で初のロキの出番だったな」

そんなこと…。まあいいけどさ…。ロキさんの初登場は回想でした。

これからも色々と暗躍的な何かをしていきます。

真「もう考えてあるのか？」

いや、て言うか基本その場その場の思いつきで書いてるから、今考
えても変わる可能性があるし…。

真「駄作者め…」

自覚はあります。

真「それじゃ、次回 第22話」

終幕 じぶん 。…その力は、戦うために…。

第22話 終幕 じぶん（前書き）

出来たので投下です。

皆さんメリーなクリスマスです。

はい、訳が分かりませんね…（汗）

作者はクリスマスを一人で過ごす寂しい人です。
リア充共メ…（ボソ）。

そんなことより、転生者の闘争をお楽しみください。

第22話 終幕 じぶん

side - 一真

「次元震です！中規模以上！」

「振動防御！ディストーションシールドを！」

ブリッチにアースラのクルーからの情報と、リンディさんの指示が響く。

プレシアがジュエルシールドを発動させて次元震を起こしている。

「ジュエルシールド十個発動！更に強くなります！」

「波動係数拡大！このままでは、次元断層が！」

フェイトは崩れたまま、床を見ている。

いや、その眼には何も映っていない。

ただ母のためにジュエルシードを集めていた少女が、その母親に否定された。

唯一縋るものが離れていき、立てなくなってしまっている。

こんな時、僕はただ傍にることしかできない。

臯月なら……何か言って、フェイトの心を戻すんだろうけど、僕には何と声を掛けていいのかわからない。

護ると言ったのに、僕はいったい何をしていたのだろう。

何もできていない……。

どうしようもないほどに無力だ……。

「……クソッ」

悪態が口から出る。

ただ悔しい。何も出来ない自分に腹が立つ。

臯月に頼ろうと考えている自分に腹が立つ。

『庭園の駆動炉が異常稼働。駆動炉を暴走させて、足りない出力を補おうとしてる!?!?』

エイミィの焦った声が聞える。

そう、プレシアは元々帰ってくる気はない。

さっきの臯月が言っていたことが本当なのなら…プレシアは、フ
イトの罪を軽くするために折檻していたことになる。

…でも。

こんなので、護った気になっっている彼女に怒りが沸く。

アルフがフェイトを抱えてブリッチチを出る。

そして、僕たちが医務室に行く途中、クロノとあった。

「クロノ君、どこへ？」

「現地に向かう。元凶を叩かないと」

クロノはやっぱり行くのか。

「私も行く！」

「僕も！」

「…わかった」

なのはとユーノが同行の許可を貰い、クロノと転送ポートに走っ
て行った。

「一真…行こう?」

「…………ん」

僕たちは再び医務室に向かう。

Side - out

Side - 真耶

「オラアアアアアアア!!」

また一機潰す。

「クソが! 数ばかりごちゃごちゃとっ! ……グッ!」

愚痴っていたら、喉を血がせり上がってきて咽る。

相手からの攻撃ではない。

体内に未だ残っている黒い粒子の影響だろう。

無理やり能力を使い過ぎて体を蝕んでいつている。

俺は口元をつたう血を親指で拭い、口角を吊り上げ笑う。

「ああ、クソッ。意外とキツイな…」

内臓のどっかから血が喉に入ってきて喋りにくいけど、言葉を発し続ける。

「それに、参ったな……」

俺は、目の前の木偶に語るように、絶望の一言を呟く。

「迷った……」

最悪の一言だ。

side・out

side・一真

医務室の前の壁に凭れて目を瞑っている。

すると、前の扉が開きアルフが出てくる。

「……アルフ……。行くの？」

「うん……。ちょっと、手伝ってくるよ」

「……ん、行ってらっしゃい」

「行ってきます」

アルフと言葉を交わし、また閉じた扉に目をやり……。手で触る。

「……フェイト」

中で、動く気配を感じとれる。

side - out

side - フェイト

母さんは……。私のことなんか、一度も見てくれなかった。……。最後まで、微笑んでくれなかった。

母さんに認めてもらうこと……。それだけが生きていく理由だった。

だけど、ハッキリ捨てられた今でも、まだ母さんに縋っている。

近くのモニターには、アルフと、あの白い子が合流していた。

アルフ…いつも言うことを聞かずに、無茶をしていた私の傍にずっと居てくれた。

この白い子…。

ちゃんと名前を覚えてくれたのに…もう、忘れてしまった。

何度もぶつかって、酷いことしたのに。話しかけてくれて、名前を呼んでくれた。

何度も、何度も…。

モニターには映っていないけど…あの、体を変化させて戦う男の人…。

確か、一真が何回も名前を言っていた。

皇月…。

彼も、敵の筈の私を、何度も助けてくれた。

それに、あの言葉…。

『フェイト、お前が何だろうと構わない。だが、これだけは覚えておけ…ここに居るのは皆、アリシアのクローンのお前じゃなく、フェイト・テストロッサとの繋がりがあるということ…』

私の存在を知っても、彼は退かずにいた。

それに、一真…。

アルフと一緒に、私とずっと一緒に居てくれた。最初に会ったときに、攻撃してしまったのに…。

『…………別に、構わない』

この一言で流してしまつて、それだけじゃなく、ジュエルシールドの搜索も手伝つてくれた。

近くの台の上のバルディッシュが光つた。

そのバルディッシュを手取る。

「…私たちの全ては、まだ、始まつてもいない？」

不意に、あの白い子が言っていた言葉が脳裏をよぎる。

私の声に応えるかのように、バルディッシュがデバイスモードへと変わる。

《ゲット セット》

涙が、眼から溢れてくる。

「そうだよね…。バルディッシュも、ずっと私の傍に居てくれたんだもんね…」

その涙が、バルディッシュのボディーに落ちる。

「お前も、このまま終わるのなんて…嫌だよね…？」

《イエッサー》

バルディッシュを構える。

「うまく出来るか分からないけど…一緒に頑張ろう」

バルディッシュを握る手に魔力を流し、バルディッシュの装甲を復元する。

《リカバリー・コンプリート》

「私たちの全ては、まだ始まってもない」

もう一度その言葉を口にだし、バリアジャケットを着ける。

「だから…ほんとの自分を始めるために…」

「……行こう、フェイト」

不意に、一真が部屋に入ってくる。

「あ、待っていてくれたんだ…」

「……うん、護るって、言ったから」

「そうだね…ありがとう」

その言葉が自然と、心の底から出てきた。

「行こう…」

「……うん」

一真と頷き合い、時の庭園に転移する。

母さんに、私の気持ちを、しっかりと伝えるために。

side - out

side - 一真

転移した位置は、ちょうどなのは達の上。

「……フェイト」

「うん！バルディッシュ！」

《サンダーレイジ！》

なのはに攻撃しようとして居ていた機械兵を、すぐに魔法陣を展開し電撃の槍で貫く。

そして、その魔法陣にバルディッシュを突き刺す。

「サンダー……レイジ……！」

それにより、複数の電撃の槍が機械兵達を破壊していく。

「……『鉋切』！」

僕も『鉋切』を取り出し、残りの機械兵を斬り裂いていく。

「……フェイト……」

アルフが自分の主が帰還した姿を見て、最初呆然としていたが、顔がどんどん喜びに変わっていく。

フェイトはなのはの傍まで下りて行き、少し気マズそうところをなのはが言葉を掛けようとしたら、空気の読めない大型の機械兵が、壁を突き破って出てきた。

「……アルフ」

「一真！フェイトが！フェイトがっ！」

かなりはしゃいでいる。

「……あの大型、二人なら大丈夫かな」

「当り前さっ！」

僕の言葉に、アルフは元気に言い放つ。

「大型だ、防御が固い。……でも、二人でなら」

「っ！？…うん！うんうん！」

フェイトの言葉に、なのははかなり嬉しそうに勢いよく首を振る。その間にも、機械兵が砲撃を溜めているので…邪魔をしに行く。

「……二人が、頑張るんだ。……野暮は無し！」

機械兵に近付いていき、『鉋切』を振るい。一息に二つの砲門を斬り裂く。

シールドがあつたが、『鉋切』に掛かればバターの如く裂ける。

そして早々に退散する。

「……フェイト、高町。今っ」

僕の言葉に二人とも首を縦に振り、自分の砲撃を構える。

二人の足元に、それぞれの魔力光の桃色と金色の魔法陣が展開され、準備は整った。

「サンダー……スマッシュャー……！」

まずはフェイトが前に張った魔法陣にバルディッシュを付き込み、電撃の砲撃が放たれる。

機械兵は、それを再展開したバリアで受け止めるが、二射目のチャージが終わる。

「デイバイ……ン……バスター……ッ……！」

溜まった魔力を一気に放出し、桃色の槍が機械兵のバリアに突き刺さる。

少し拮抗したが、二人がフィニッシュを告げる。

「セーラーっの!」「」

その掛け声で、放出する魔力が一気に上がり。

大型の機械兵を吹き飛ばした。

「フェイトツ!フェイトツ!」

アルフが終わったと同時にフェイトに抱き着く。

「アルフ…心配かけてごめんね?」

フェイトはそんなアルフを優しく抱き留め、頭を撫でていた。

「……みんな、行こう。時間がない」

悪いけど声を掛ける。

「うんそうだね…行こう」

フェイトがそう言い。他の人もうなずいてくれた。

行こう、僕はリベンジの場に…。

S i d e - o u t

S i d e - 真耶

「ゲホツゴフツ！」

堰き込み血が床を汚す。

さっきの振動はたぶん二人の砲撃のもの。

俺も早く向かわねえと…迷ってる場合じゃ…。

「はは…。何だ…素直に歩いてく必要なんて…ねえんじゃねえかよ

…」

自分のバカさ加減に呆れて渴いた笑いが漏れる。

「プレシアの居場所は最下層…。なら…床を打ち抜いていけば…着くじゃねえか…」

ほんと、何やってたんだか…。

ま、そうと決まればとことんやるまで…。

「ハアーーーー…」

息を吐き、吸い込み、力を入れる。

それにより、背中の構成を変化させて『烏族の翼』を展開する。

「ウガッ!？」

さっきよりはマシだが激痛に変わりはない。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハッ！」

これ位の激痛で…俺は止まれねえよ…。

「シエルブリット…バースト…」

右の甲の円盤の回転がどんどん上がっていく。

更に、左腕にも魔力を注いでいく。

そして、両腕を床に叩き付ける！

「ラアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

轟音が響き渡り、俺の周りの床が崩れ、周りに居た木偶人形もろとも落ちる。

だが、俺は翼を使い上手く体を制御し…更に加速していく。

「まだまだあああああああ!!!」

次々に床を粉碎していき、それと同時に木偶どもも粉碎していく。

途中で、視界の端に見覚えのある黒いのが映ったので下の階に無理やり着地。

「え…！？な、なんだ今のは！？」

クロノ君混乱中だな。

「よおクロノ！」

とりあえず声を掛ける。

「な！？君は！…また無茶苦茶な…」

クロノも穴を通って下に降りて来た途端に呆れた。

「…と言うか…君は一番最初に乗り込んでいったのに、何でこんな所に居るんだ？」

「グッ…！」

い、痛いところを突いてくるな…。

素直に迷ってたなんて言えないしな。

何とかうまく言い訳を…っ！？

「っ…ゴハッ！」

「お、おい！何だこの出血は！？」

「グ…何でも…ねえよ」

吐血した俺を見てクロノが声を荒げるが、この位どつってことはない…。

「何でもない訳あるかつ！すぐにアースラに…っ！」

クロノが俺を連れて行こうとするが、それを払いのける。

「ハア…ハア…その必要は…ねえ！」

「しかしっ…！」

こいつは…しっかりしろや…。

「お前の今の仕事は…プレシアの確保だろうが…。目的を見失うな…」

「なっ!?!」

「そら、行くぞ…」

俺は無言を言わず拳を振り下ろし、最下層を目指す…。

途中から、プレシアとリンディさんの会話を聞きながら向かっている。

そして、話も終わるころ…プレシアが、あの言葉を言う。

「そうよ…取り戻すの…。こんな筈じゃなかった…世界の全てを…」

「…なんだと？」

一緒に落下しているクロノから怒気の混じった声が聞えてきた…。

そして、最後の床を打ち抜く。

「…っ!？」

プレシアが驚き、息を呑む。

俺たちは着地して、クロノが言い放つ。

「世界はっ!こんな筈じゃないこと、ばっかりだよっ!ずっと昔から、何時だって…誰だってそうなんだ!」

それは、自分が経験したから言える、力強い言葉。

「逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ!けどっ、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は…何処の誰にも、有りはしない!」

その言葉がちょうど終わった時に、フェイトとアルフ、そして幸坂が降り立つ。

フェイトとアルフは、俺たちとプレシアの間に、幸坂は何故か俺の横に…。

「…何でこっちくんだよ」

小声で幸坂に言ってみるが、何故か幸坂が首を捻る。

「……………何でだろ？」

「おい……」

何なんだよ一体…。

「……………それより、随分と、無茶したね？」

こいつの言ってるのは、この身体のことだろう…。

「ハッ、これのどこが…。俺の体なんていいから、フェイトの話を聞こっぜ」

そう言って、俺はプレシア達の方を見る。

プレシアが吐血して、フェイトが駆け寄る。

「母さん！」

「何を…しに来たの…」

その眼力によって立ち止まらされる。

「消えなさい…もう、あなたに用はないわ…」

どこまでも悪役を貫くために、何とかその言葉を絞り出す。

しかし、フェイトの決意は揺らがない。その眼に決意を宿し、プレシアを見る。

「貴女に、言いたい事があって来ました」

フェイトがプレシアに語りかける。

「私は、ただの失敗作で、偽物なのかもしれません…」

自分のことを捨てた、自分を根本から否定した相手に…。

「アリシアになれなくて…期待に応えられなくて…」

しかし、それでも…やはりフェイトにとっては…。

「…居なくなれって言うなら、遠くに行きます。だけど…生み出してもらってから、今までずっと…。今もきつと、母さんに笑って欲しい…幸せになって欲しいって気持ちは、本物です…」

プレシア・テストロッサは、ただ一人の…。母親だから…。

フェイトは手を差し伸べる。

「私の…フェイト・テストロッサの、本当の気持ちです」

「っ!？」

その言葉に、プレシアの顔が苦痛に歪む。

何かを堪えるかのように歯を食いしばり、俯く。

「……………く、だらないわ」

その言葉と共に、杖で床を叩き、魔法陣が展開される。

それにより再び次元震が発生する。

『艦長！庭園が崩れます！クロノ君たちも、早く帰還して！崩壊まで、もう時間がないよ！』

エイミイの焦った声が響く。

「了解した。…フェイト・テスタロッサ！フェイト！」

クロノが呼ぶが反応が無い。

「幸坂、行くぞ…」

「……………（コクッ）」

「あっ！おい！」

俺と幸坂がフェイトの、と言うかプレシアの方に行くところをクロノが止めようとする。

「…ただ、無視。スル。」

「…言ったでしょ？私はあなたが、大嫌いだって」

その言葉と共に、プレシアとアリシアのポッドがある地面が崩れる。

「母さん！アリシア！」

フェイトが助けようとするが、天井から岩が落ちてきて阻まれる。

更にフェイトにも降り注ぐが、それは全て幸坂が斬り払った。

「一真……」

「……フェイト、下がって」

「でもっ！」

フェイトはまだプレシアを助けようとするが、行けば虚数空間を真っ逆さまだろう……。魔力で飛んでいるやつらはな！

「……大丈夫。臯月が行った」

「へ……？」

その声を置き去りに翼を羽ばたかせ飛んで、落ちていくプレシア達に向かって降下していく。

俺を見たプレシアの眼が見開かれる。

はは、驚いていやがる。

「お、ラアアッ！」

一度通り過ぎて、下からポッドを担ぎ、プレシアの襟を捕まえる。

「うっ！…あなた！？何をしているの！」

「…何って…一応助けたんじゃないか」

何故かいきなりお叱りを受けた。

「そう言うことじゃなくて、ここは虚数空間か…何故飛んでいるの？」

なんだ、そこか…。

「この翼は、一応本物だからな。飛べるんだよ…そんな事より、早く上がるぞ」

くっ、かなりキツイ。翼の筋肉が吊る。

「はあ、ほんと、あなたは何なのよ…」

プレシアが何か愚痴っているが気にしない。

もうすぐ上に上がる。

そんな時、男の声が聞えた。

「詰らん…一人置いて往け」

「ゲッ!？」

その声と同時に、プレシアを掴んでいる右腕に焼けるような痛みが奔る。

「ガフツ!！」

その一瞬の隙に、プレシアの心臓に影の槍が突き刺さる。

「しまっ!！ガアツ!！」

もう一度右腕に激痛、こちらも影の槍の様だ。

シエルブリットを貫くほどのものか…!

そして、右肩を貫かれて上の壁に叩き付けられる。

その時に、離してしまった。

左のアリシアは、幸坂がキャッチしたが、プレシアは虚数空間に落ちて行った。

俺は何とか槍を外そうとするが、かなり固い。

それに、今までの付けが回ってきたのか、体がうまく動かない。

「……の……」

その間に、さっきの声と共に黒ずくめの男が姿を現す。

「ふっ、間抜けだなあ？」

「……あの男じゃ、ない？」

幸坂の言葉から、アイツが幸坂を倒した相手じゃない。

いや、確かにこいつも幸坂を倒したんだ……二対一で……。

幸坂の話を聞いてから予想していたことだったのに。

そんなことをグダグダ考えていたら、草履の音が聞こえてきた。

「テメエの捜してんのは、俺のことかあ？」

その男は、死神が纏う『死白装』を着て、右手に『斬魄刀』を握っている男。

「一真……？」

「……………」

幸坂はフェイトを背に庇いながら構える。

「何だお前たちは！」

クロノが食って掛かるが……。

「あああ？なんだ小僧お？」

死神の男の殺気に後ずさる。

その間にも外そうとするが固すぎだろ！？

そんなマジでやばい状況を一転させたのは…。

「え…？」

「な、何だいこれ！？」

「な、なんだ！」

メルが展開したと思われる転移魔法陣。

それにより、フェイトとアルフ、その近くに有ったアリシアのポッドとクロノが転移し、たぶんアースラに戻ったか…。

「なのはちゃん達も戻しといたよ…。」

「…すまん、助かった。」

少し不貞腐れた声のメルから念話があった。

「次元震も、今私が張った結界で抑えてある。タイムリミット付きだけど。」

「マジで助かる…。」

ほっと一息吐く。

そこで確認したいことがある。

『…プレシアは？』

『……ダメだった……』

メルはかなり落ちた声でそう言ってきた。

俺の力不足と油断が招いたことだ……。クソが……。

そして、黒い男の言葉で、既に沸点を超えていた俺のイライラゲ
ージが、振り切れた……。

「クツ、面白い。二体……いや、一人はすでに死んだも同然か……。
二体一でどうするんだ？」

……身体の中身が少し機能せず、右腕と肩に槍が突き刺さって動
けない。

だから如何した！

意識もある。

身体もまだ動く。

魔力も…奴ら如き倒すならこれ位で十分！

“右腕”と“左腕”をもとに戻す。

「……出来る？」

幸坂が、かなり不安そうな顔でこちらを見てくる。

「ハッ！これ位、どうって、こと、ねえ」

そう言っつて、安心させるために頭を撫でようとしたが、右腕は血まみれになっている。

なので、入れ替えて左手で撫でる。

「……ん」

それだけ声を漏らす。

「それでは、やりましょうか？」

黒い男は嘲笑の混じった顔と声で、こちらに話しかけてくる。

「だな……。やるぞ、幸坂……」

いや、もう何回も共闘と思わしきものをしてるんだし、いいか？

「いや、一真！」

「……！？……うん。……本気でいくよ、真耶……」

お互いに名前で呼び合い、同じタイミングで敵に向かって走り出す。

悲しむのも、詫びるのも、これが終わってからでいい。

後悔なんざ後でも出来る。

今は、面の前の敵を…。

「打ちのめすっ！…！」

side - out

舞台の上で、闘争は続く…。

第22話 終幕 じぶん（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

さて、今回ですが…。

真耶無茶しすぎですね…w。

まあ、書いたのは私なのですが…。

何故か書いていくにつれて真耶が出血していき、一真が可愛くなっ
ていく（マテ）。

メル（以下：メ）「それはいいの？」

あ、今回はメルさんをお呼びしました。

メ「どうも、初期設定ではヒロインだった。オーディンことメル
です（ニコッ）」

素晴らしい笑顔をありがとう。そして私に向けている殺気をなんと
かしてくれ…。

メ「あら、ごめんね？（ニコニコ）」

な、何にも改善されてないんですけど…。と言うか更にこの場所の
温度が下がったんだが…。

メ「気のせいよ。別に転移の時しか使われない待遇に腹が立ってる
訳じゃないよ？」

ちよ…！ほんとに怖いから！

こ、今回はこの辺で……ギャアアアアアッ！！！！

メ、作者さんが何所かに行ってしまったので、私が一人でやります。

次回 第23話 決着 ころかい。

その力は、戦うために…。デワデワ〜」

第23話 決着 ころかい (前書き)

二日連続投稿です！

クリスマスということので頑張ってみました。
ま、中身は相変わらずのグダグダなのですが…。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第23話 決着 こうかい

side - なのは

「いたた〜」

私はユーノ君と一緒に駆動炉の封印を終わらせて、フェイトちゃん達が居る所に向かおうとしたら、急に私たちの足元に魔法陣が現れて…。

「いつつ…なのは、大丈夫？」

ユーノ君が聞いてきてくれる。

「うん、大丈夫…だけど、ここは…」

私たちが居るのは、見たことのあるブリッチだった。

「なのはさん達も戻っていたのね…」

と、すぐ近くからリンディさんの声が聞えた。

そして、周りを見てみると、フェイトちゃん達とさつきモニター越しに見たアリシアちゃんのポッドもここに居た。

「一体、どうなっているのかしら？……っ！」

リンディさんが疑問を呟きながらモニターを見て驚愕の表情を浮かべる。

「え……？」

私もモニターを見たのだが…私はそこに映っているものが、最初は理解できなかった。

敵と思う人が二人…。

一人は、黒ずくめの男の人。

もう一人は、袴に胴着に羽織を着て…その手には刀が握られている。

もう一方の二人。

一真君は、今までで見たこともない刀を出していた。

鎧の部分に黄色い球がいくつも付いていて、何だか、見ているだけで気持ちが悪くなってくるモノ。

そして、私の眼は真耶おにいちゃんを捉えて離さない。

…いや、実際にはその右腕だ。

いつも私を撫でてくれていたあの腕から　　が流れ出ている。その量は酷く。傷が深いことがわかる。

だけど、その眼は前の二人を睨みつけている。

左腕を上げる。

するとその左腕が浅黒い色へと変わる。

それと同時に真耶おにいちゃんは を吐いた。

「お、にいちゃん…?」

ただ呆然とおにいちゃんのことを呼ぶことしか出来なかった。

S i d e - o u t

S i d e - 真耶

相手の二人と睨みあう。

一真は既に『童子切』を取り出している。
俺も左腕を『赤い弓兵の左腕』に変えた。

だがそのときにまた来た…。

「グ…………ガハッ！」

「…………真耶」

一真が心配そうに見てくる。

…………と言うか、いつの間にかこいつの表情がよめるようになってきたな。

「クツクツクツ…………既に满身創痕ではないか」

こんなこと考えられるならまだ大丈夫そうだな。…………つか。

「ハッ！誰が满身創痕だよ。まだまだ全然余裕だわ！これ位がテメエらには丁度いいハンデだろ！」

何とか強気の言葉が出るが、正直キツイ…。

だが、ここは退けない！

「フンッ…………！」

嗤っている膝を黙らすために思いつきり右足を踏み出す。

「トレス・オン
投影・開始！」

それと共に呪文を声に出す。

その時くる記憶の侵食は本当に微々たるものだ。

今投影する剣は、弓兵が一番多く使い愛用していたもの。故に浅いところから汲み上げることが出来る。

両手に雌雄一対の中華刀を握る。

それが戦闘開始の合図になり、死神の男が突っ込んで来て、黒い男は数十の影槍を放ってくる。

俺たちはそれを受けるべく走る。

一真が前に出て死神の男と切り結ぶ。

まだチカラを解放していないとは言え、その手に握るは最強の一振り…今のアイツが一体一で切り結べば勝てるだろう。

しかし、これはタッグ戦。

死神の男の後ろから黒い槍が迫る。

一真が一度下がるが、槍はそれを追う。

俺が間に割って入り数十の槍を双剣で捌いていく。

「クッ…！」

やはり右腕に焼けるような痛みが奔る。

出来るだけ正面から受けずに、受け流すようにしているがそれでも振動で痛む。

それを歯を食いしばり堪える。

槍の雨が止む。

それと同時に死神の男が視界一杯に映る。

「オラアアアアエエエエ!!!」

「こんっ!のおっ!!!」

振り下ろされる刀を、両の剣で刀の腹を叩くようにして躲す。

「ハアッ!!!」

そこから無理やりに横薙ぎがくる。

「チイツ!!」

「……させない」

俺の舌打ちと共に、一真が後ろから俺を飛び越えて斬りかかる。

死神の男の刀を上から叩き落とすように『童子切』を振るう。

甲高い音がこの空間に響く。

狙いが低くなったその刀を跳んで躲す。

そして、選手交代。

死神の男と一真が鏝迫り合いをしている。

俺は中距離の位置に居る黒い男に向けて駆け出す。

「ク、さあ、踊れ！」

短く笑い声を出し、百を超える影槍が俺を囲うようにとんでくる。

俺はそれを…。

「うをおおおおおおおつー！！」

真ん中を走り抜ける。

飛んできていた影槍は、俺の後方ギリギリの所に着弾していく。

「ククク…。面白い…」

男はそう言って、もう百本の影槍を出し、それを一つに纏め上げてこちらに放ってきた。

数は一。しかしその魔力の密度は先ほどの槍の、文字通り百倍！

「おつらあああああつー！！！」

俺は剣を交差させて、前にした『干将』の腹を滑らすように凌ぐ。

その槍はそのまま直進して、切り結んでいる一真たちに伸びていく。

「…………ふっ！」

「ああ？」

一真は横に跳んで避け、後ろ側からの死神の男は軽く足を横に出ただけ…。

そのせいで脇ギリギリを槍が通り、死白装を斬っていくが、まったく気にせず『斬魄刀』を振り上げ一真に振り下ろす。

一真はギリギリで受けるが力の差で吹き飛ばす。

「そら、余所見していいのか？」

「クツ…！」

また槍の雨が降る。

俺は右剣を握りなおし捌いていく。

その内に、さっきの槍の威力のせいか『干将』が碎ける。

だが、もともと頭の中にストックしておいた『干将』をすぐに投影し防ぐ。

「おらあああああああつー！」

「うを！？」

後ろから死神の男に、上段から斬りかかられる。

それを、頭上で剣をクロスして防ぐ。

しかし、それで俺の腕は両方上に上がっている。

「ほら、避けてみる」

黒い男の影槍が来る。

だが、それが俺に届くことなく斬り裂かれる。

俺の前には、『童子切』を振り抜いた状態の一真が居る。

「……忌剣、夜駆け」

静にその剣技の名を呟く。

一真が飛ばされた所からここまでは、軽く60mはある。それを瞬間的に移動してきた。

忌剣・夜駆け。

構えは居合だが、これは自分から動く。

だがその速度は、普通の人には消えたように見える速度である。

死神の男が後ろに跳ぶ。

そちらに体を向ける。

位置関係は、黒い男と死神の男が50mほど離れており、その間に背中合わせで俺たちは居る。

「……そろそろ、行くよ」

「そうか……了解した。投影・開始……」

トレス・オン

小声で話し合い、準備を始める。

「……………涅くろより生なじし万鬼ばんきの王」

一真の言霊で、『童子切』が脈動する。

「神毒鬼使しんどくきへんの緋あかき狂水を以って、その御霊を鎮めん」

「させるかっ」

黒い男が影槍を放ってくるが、俺がまた間に入り捌く。

「……………んっ」

『童子切』の柄から生えた棘が、一真の手を貫き血を吸う。

その状態で一真は、振り向き様に『童子切』を死神の男に振るう。

「……………忌剣、斬月！」

その声と共に斬撃が飛ぶ。

「あああ！？オリヤアア！」

死神の男はそれを受ける。

そこに、一真が連続で忌剣を使い、死神の男の横まで行きその刀を持った右腕を斬り裂く。

「ガッ！？」

「……………忌剣、夜駆け」

右腕と共に『斬魄刀』も飛ぶ。

だが、死神の男は意外に冷静で左手で刀を掴み跳ぶ。

着地したのは黒い男の横。

「クソガツ！いてえな…！」

その右腕は肘から先がなく、その断面から血ではなく黒い粒子が噴き出している。

「貴方が油断するからだ」

「誰がしてたつてえ！？」

何故か二人は喧嘩のようなことになっている。

「ふうー…」

今の内に息を整え、頭の中に『干将・莫耶』をストックしておく。

「……ごめん、仕留められなかった」

一真が俺の横に着地しながら言うてくる。

「ま、いいだろ。…次で決める」

「……………（コクッ）」

俺たちは再び剣を構える。

「だから……今はやめておくか」

「あああ？……ああ、そうだったな」

敵二人もこちらに向き直る。

お互い睨みあい、自分のすべきことを頭の中で何回もイメージする。

その全ては成功のイメージ。

相手二人とも滅するイメージ。

ここに来る前も何回もイメージしてきた。

その時には既に二対二の準備をしていたんだ。

唯一の不安は、右腕と肩がしっかりと動くかどうかだ。

出来るか……？

いや、違うな。

出来るか出来ないかじゃない……やるんだ！

「……………」

この左腕のときにイメージするは最強の自分。

左腕の記憶と深く繋がる。

『干将・莫耶』の性質を最大限活かした太刀筋を己がものとするために……。

「はあっ！」

俺は息を吐き出すと共に、敵に向かって走り出す。

俺に向かつて影槍が無数に飛んでくるが、体を無理やり捻りながら両手の剣で受けながら捌いていく。

「ハアアッ！！」

死神の男が俺に向かつて突っ込んでくる。

「鶴翼しんぎ、欠落むけつヲ不してばんじゃくラズ」

突っ込みながら、自分でも驚くほどに冷静にこの言葉が出てきた。左腕の経験のイドから水を汲む。

記憶しづんへの侵食は許さない。

自分の意識を強く持ち、左腕に所有者を分からせる。

そして、死神の男が射程に入る。

手に持つ双剣を左右から投げる。

その剣には魔力を過剰に籠めてある。

狙いは一撃で敵が潰れる首。

弧を描く二つの刃は、敵上で交差するように飛翔する。

鶴翼は美しい十字を象る。

それを男は後方に弾く。

奴の『斬魄刀』が宝具である『干将・莫耶』を防げたのは、その刀にロキの力が宿っているからだろう。

既にあの刀の強度は、俺の陰陽剣と同等だろう。

死神の男は、武器を手放した俺へ間合いを詰める。
自分から突っ込む。

「
フリーズ
凍結、
アウト
解除」

「あああ？何だそりゃあ？」

双剣が敵の刀を防ぐ。
予め準備しておいた『干将・莫耶』をもう一度作り上げる。

「だからっ…どうしたあっ！」

一閃が来る。
その直前に…。

「
ちから
心技、
ちまをひき
泰山二至り」

敵の意識外から奇襲があった。

「あああ……？」

一瞬だけそちらに意識が向く。

しかし、黒い男が影槍を放つ。
その密度は、先ほどの百の影槍よりも更に濃くなっている。

あれなら過剰に魔力を込めた『干将』を砕けるだろう。

俺だけなら。

その影槍に、一真が召喚した『鉋切』がぶつかり軌道をずらした。黒い男はどこまでも冷静。

影槍の影からもう一本同じ密度の影槍が放たれていた。

それが飛翔していた『干将』を砕く。

俺は死神の男に、その一瞬で『莫耶』を叩き付ける。

「はあっ！」

しかし、その一瞬を埋めるほどの速さの剣戟が来て…。

「っ、くっ！」

『莫耶』が砕かれる。

この男、伊達にこの刀を持っている訳ではないようだ。

それに、おそらくさっきの『莫耶』のイメージがずれていたのだらう。

そうでないとは簡単に砕けたりはしない。

だが。

「
心技、ちから黄河ヲ渡ル」

まだ止まらない！

二度背後から飛来する『莫耶^{いっとう}』

夫婦剣、『干将・莫耶』

その性質は言わずもがな、お互いに引き寄せあう磁石のような剣。故に、俺の手元に『干将』がある限り、『莫耶』も引き寄せられる。

「ハッ！」

敵は背後の『莫耶』を叩き落とす。

その無防備な背に『干将』を叩き付ける。

「ハアッ……！」

しかし、それは“下方”からの影槍によって碎かれる。

一瞬のうちに周りの情報を確認する。

敵、黒い男は右腕を地面？？？いや、自分の影に突き刺している。おそらく死神の男の影とを繋げて、手を突き出し槍を放ったのだろつ。

死神の男はこちらに向き直ろうとしている。

1秒もすればこちらに斬りかかって来るだろう。

俺は今無手、既に武器は碎かれた。

一真の今の位置からでは『夜駆け』を使っても間に合わないだろう。

だが、俺にはまだ手が残されている。

「
唯名、せいめい別天二納メ」

「なっ…！」

死神の男が初めて驚愕の表情を浮かべる。

カラの両手に再び双剣を作り上げる！

「
両雄、われら共二命ヲ別ツ！」

『鶴翼三連』

目の前の敵へ双剣を振り抜く。

これで死神の男を仕留める筈だった。

ここで俺のイメージがずれる。

肩の傷により振り被りが浅くなって威力が落ち、軌道がずれる。
右腕で振るった剣は、その傷により更に威力が下がる。

「ガッ…！」

「くうっ…！」

「チィ…！」

死神の男、黒い男、俺が同時に声を上げる。

左剣の軌道がズレ、幸いにも黒い男の右腕を斬り裂いた。
右剣は死神の男の体を斬りつけたのだが、威力不足でまだ動ける
だろう。

俺は今までの出血で一気に力が抜け、そのまま前のめりに倒れる。
これで終わり…。

俺一人なら…。

「… 鬼牙、絶刀オ！」

一真には似合わないほどに声を荒げて、その一閃は繰り出される。

さっきのことで完全に怯んでいた敵二人を、その青白い閃光は斬
り裂いていった…。

つか、今、俺の上ギリギリを斬撃が通り抜けて行き冷や汗が半端
じゃない。

もし倒れていなかったらと思うと……………考えたくない…。

首を動かし周りを見つめる。

既に敵は跡形もなく消滅していた。

聞くべきことがあったのに、しくじったな…。

「だあゝ……！」

一気に緊張の糸が緩み変な声を出してしまった。
体を無理やり動かして仰向けになる。

身体に痛みが奔る。

「はあゝ……」

今の俺の体の状態を考えると溜め息が出る。

無茶しすぎた…。

そんな俺に足音が近づいてくる。
見ずともわかる。一真だろう。

近くまで来ると、俺の横に座るのが分かる。

「…とりあえず終わったな」

「……ん」

俺の言葉に、最少の動きと言葉で返してきた。

そう、終わった。

プレシアを救えず、俺が油断した隙をつかれた。

最後の最後に詰めが甘すぎる。

「……………行く」

不意に一真の声が聞えた。

今のまま思考を続けていたら、多分後悔の底にどんどん嵌まって
いったらろう。

「…そうだな」

『メル、転移を頼む』

『うん……………』

俺が念話を繋げると、落ち込んだ声が返ってきた。

さっきプレシアを救えなかったのが悔しいのだろう。
だが、アレはこいつのせいじゃない。

このまま放つとくとまずそうだな…。

『おい、あんまり思いつめなくていい。アレは俺のミスだ』

『え…？け、けど…』

食い下げてくる。

こいつも変な所で頑固だな。

『はいはい、これは俺のミスと言いつつとで、こっちはお開き…ほら、
転移転移』

さっさと話を切り上げ転移を急かす。

『え…？え、あ、うん』

その声と共に、近くに魔法陣が展開される。

そこに一真は歩いていく。

俺も行く為に立ち上がるうとするが…。

「グッ…！？」

身体を激痛が襲う。

無茶のし過ぎで体が動かないほどに損傷している。

「……………だから、無茶し過ぎ……………」

呆れたように言って、近づいてくる。

そして、俺の腕を掴んで肩を貸す。

「悪いな……………」

「……………いい……………」

それだけ言い合い、魔法陣に乗り転移する。

何とか無理やりに“身体”の構成を『吸血鬼』のものにして、身体
の再生を早める。

それと同時に、俺の意識は落ちた…。

Side - out

こうして、後に『プレシアテスタロッサ事件』、『PT事件』の
一応の終着をみた。

真耶の心に棘を残したまま…。

第23話 決着 こうかい (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

先ずは、主人公二人のステータスの変更についてです。

二人の幸運値を変えました、気になる人は見てやってください。

さて、今回は一真に来て貰いました。

—「……どうも」

はい、それでは本編についてですが。

今回の戦闘シーンの途中から、あるゲームのあるシーンを元に、この駄作者がアレンジしたものです。

もし思い当たる方が居て、「こんなのは違い!」と言う方は感想の方に批判などをどうぞ。

作者は甘んじて受けましょう…。

—「……あるゲームって?」

それは言えない…。

ヒントを言うなら『スパークスライナーハイ』とだけ…。

—「……?」

はい、どちらかと言うと判って欲しくくないですね…。

受けるとは言ったけど、批判とかはやっぱ怖いんで。

—「……がんばる」

おう、ありがとう。

それでは、今回はこの辺で。

—「……次回 第24話 大切ナモノ なまえ」

その力は、戦うために…。

疑問、質問、批判などは感想の方にどうぞ。

第24話 蘇生 なぞ (前書き)

サブタイ変更で投下です。

はは、燃え尽きそうだよ…。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第24話 蘇生 なぞ

side - 一真

転移用の魔法陣に乗ったと同時に、肩をかしている真耶が吐血をした。

そして、僕に掛かる重みが一気に増える。
多分気絶したんだと思う。

転移が完了して、周りを見てみるとアースラのブリッジのようだ。
皆いる。
いや、今はそんな事より。

「…艦長！…直ぐに治療の準備を！…アルフは運ぶの手伝って！」

「真耶おにいちゃんっ！」

自分でも驚くほどに声を荒げて、焦っている。

真耶の傷は多くない。

確認できるものは四ヶ所だろう。…しかし、その一つ一つの傷はかなり深い。

今は既に出血は止まっているが、それでも血を失い過ぎている。それに、さっきの吐血は内臓のどこかが損傷しているときのものだ…。

高町が近づいてくる。

今“私”が呼んだのは“お前”ではない！

「速く準備して！」

「え、ええ！医療班！重傷が一人…！」

「アルフッ！」

「あ、ああ！」

二人とも“私”の剣幕にたじろぎながら返事を返してくる。

ああ、何故“私”はこんなにまで焦っているのだろうか。

真耶はおそらく死にはしない、それは何となくわかる。

それでも不安になるんだ。

近付いた人が離れて逝くんじゃないか…って。

真耶をアルフの背におぶらせる形で乗せる。

そして医務室に走っていく。

今分かった。

“私”は、既に彼との絆がかけがいの無いものになっていたんだ…。

side - out

side - 真耶

眼が開く…。

意識が覚醒していく。

頭が痛い…。右腕が少し痛む…。左手に温もりを感じる…。

「え……？」

眼が完全に開くと、見覚えのない白い天井が映る。

「俺、は……」

気絶する前のことを思い出す。

時の庭園に乗り込んだ。

と後。

転生者たちと戦って勝った。

クロノと最下層に。

だ？

違う、思い出すべきはもっ

違う、その前だ……。

何時まで眼を逸らすつもり

そう、あれから眼を逸らしてはいけない。

アレは俺の未熟が招いた……俺の罪。

この身に、この心に刻まなくてはいけない。

思い出す……明瞭に……。

俺の右腕を貫く影槍。

そして影槍は、プレシアを貫く。

手を、放してしまった……。

「クッ……！」

歯を砕くように食いしばる。

あの時貫かれた右腕は、今は『吸血鬼』の再生力で傷は既に塞がっている。

残るのは僅かな痛みと　　プレシアの服を掴んでいた感触。

右手を血が出るまで握りしめる。

痛みは感じない。

感じるのは、胸の内に沈殿した後悔のみ。

「　　うん…にゅ…」

左側から眠そうな声が聞えた。

そちらに顔を動かすと、そこには…椅子に座ったまま俺の手を握り眠ったいるのが居た。

さっきから左手にあった温もりはこいつか…。

握っていた拳を解く。

なのはの寝顔には、眼のあたりから一筋の跡が出来ていた。

「はは………」

渴いた笑いが出る。

いくら俺でも、これが俺のために泣いてくれたのだと理解できる。
右手がなのはの頭に伸びる。

本当に、こいつは…。
あと数センチで頭に触れる…。

“アイツ”に似ている…。

手が止まる。

「クツ…！」

また歯を食いしばり、右手を強く握る。

違う…なのはは“アイツ”じゃない。

右手を引き、天井を仰ぎ見る。

重ねるな…！それは二人への侮辱、もう前世へは帰れない。
ない。

眼を閉じて“アイツ”の顔を思い浮かべる。

違う…違う違う違う違う違う。

自分に言い聞かせるように繰り返す。

俺はもう、この世界の住人…カエルことは出来ないんだ…と。

『なのは、入るよ？』

そこに、ユーノの声が聞えてくる。

これは眼を逸らす行為なんだろう…けど、今の俺にはそうする以外にはない…。

「ユーノか…？」

『！真耶、起きたんだね。…入るよ』

「ああ…」

俺はなのはを起こさないように上半身を起こす。

「え…っ！…もう起きてても大丈夫なの？」

ユーノが入ってきて、その言葉を俺に言ってくる。
最初に大きな声が出そうになっていたが、寝ているなのは見て声のトーンを下げる。

「ああ、大したことじゃあない…もう治った」

俺はそう言って、口で右腕に巻かれている包帯を取る。

「ほんとだ…」

ユーノは少し呆然としている。

「あ…そう言えば、あれからどれ位経った？」

今俺の気になるのはこっちだ。

「え…？あ、うん。アレから丸一日経ってるよ」

「マジか…」

まさか丸一日寝ているとは…。

やっぱり能力発動した状態で寝ると、出来るだけ燃費を良くするために睡眠が長くなるのか。

「仕様がないうよ、あれだけの傷を受けてたんだから」

「なあ、そんなに酷かったのか？」

何となく気になっていたことを聞く。

「それはもう…。失血死ギリギリだったからね」

「そ、そうか」

そんなに血を垂れ流していたのか…。

「けど…ほんと、治るの速いね…」

ユーノがポツリと漏らす。

「んあ？…ああ、まあこれも俺の能力の内の一つだな」

「はあ、ほんと色々あるね…」

何故か呆れられた。
酷いなこいつは…。

「あ、そうだった」

ユーノはそう言うと機械をいじる。
すると、モニターが現れてそこにはリンディさんが映っていた。

「リンディさん、真耶が起きました」

『そう、ありがとう。今からそちらに行きます』

そう言って通信は切れた。

「なんだ？俺が起きたら呼ぶように言われてたのか？」

「うん、聞きたいこともあるって言ってたしね…」

はあく、メンドクせえな。

大方相手のことや、何故俺が“負傷した”かだろうな。

基本、魔導師は非殺傷設定を使って、相手を魔力ダメージで行動不能にする。

なので、多少の怪我はあるかもしれないが、死ぬほど血を流すのはあり得ない。ま、それはあくまで基本の魔導師だ。

俺たちにそんなもんはない。戦闘を始めればそれはもう殺し合い

になる。…ま、一真との戦闘は、アイツがデバイスの非殺傷設定を使っていたし、俺も相手が死ぬような攻撃はしてないから例外だ。

つか、普通の魔導師も犯罪者なら殺傷設定くらい使うだろうに…
やっぱりリンディさんは管理局に染まっているな。

「あ、ユーノ。アリシアの入ったポッドはどうした？」

今回、唯一救うことに成功した人が気になった。

「アリシアなら…ほら、そこ」

そう言ってユーノは俺の横のベットを指さす。

俺はそちらに首を向けると、病院で患者が着るような服を着せられ横たわっていた。

「はあ、よかった」

「？何が？」

俺の漏らした溜め息に疑問を感じたユーノが聞いてくる。

「いや、もし保管…とか、処分…とかされてたらどうしようかと…」

「いやいやいや、真耶は管理局を何だと思っているのさ。…処分て」

俺の言葉にまた呆れられた。

こいつ本当にヒドイな…。

そんなことを話していると…。

「うにゅう…あ、おはよう、真耶おにいちゃん…」

なのはが起きて、見事に寝ぼけている。

「…く」

そしてまた寝た。

「てっ！折角起きたんだから寝るんじゃないねえ！」

「にゃ！？」

俺は、また眠りに入ろうとしたなのはの額にデコピンをかます。

「へ…？はれ？え、っと…。……………真耶…おにいちゃん！？」

「ああ、真耶おにいちゃんだ！」

ようやく眠気が抜けたようで、結構デカい声で呼んできたので、こちらに乗ってみた。

「もう大丈夫なの！？」

身を乗り出して効いてくる。

俺はそんななのはの頭に、なのはが握っていた左手をほどき、頭に乗せる。

「大丈夫だ。だから、もう心配いらねえよ」

そう言って、乗せた手を動かし撫でる。

「け、けど…！」

それでもまだ心配そうな声を上げる。

ほんとに、こいつは心配性だな。

「大丈夫だって…ほら」

俺は、なのはの顔の前に右腕を持ってきて見せる。

「へ…？あ、ほんとだ…」

「だろ？」

俺の右腕に触れて、本当に大丈夫か確かめている。

「ふえ…よ、よかったよおっ！」

「お、おいっ！？」

「はは、僕は出てるね」

なのはが泣きながら俺に飛びついてくる。

そして何故かユーノが部屋を出て行った。

「あつ！おいこら！ユーノ！」

呼ぶが反応がない…ただの駄フェレットのようだ…。

つて、今はそんな事よりも。

「ふええええん！！！」

「あゝ、どうしたもんかな…」

なのははどうすれば泣き止むのだろうか…。

「あつ…その、ごめんなさい」

「いや、いいんだけどよ…」

今はお互い向き合っており、なのはは顔を俯けている。

なのはは今になって大声で泣いたことを恥ずかしている。

そこで、医務室にベル的なものが鳴る。

『お二人とも、もう入ってもいいかしら？』

その後にリンディさんの声が聞えた。

「ああ、構わない」

「あ、はい。どうぞ」

俺たちの返事を聞きドアが開く。

そこからリンディさんを先頭に、エイミィと頭に包帯を巻いたクロノ、そしてさっき出て行ったユーノが入ってきた。

「体の方は……大丈夫そうね……」

「ええ。…治療、ありがとうございます」

リンディさんは一度俺の身体を見て、ベットの上に置いてある包帯を見て、俺の右腕を見た。

「それで…ユーノから聞きましたけど、聞きたいことって言うのは…」

俺は早速本題に入った。

「そうね、マズは…何故貴方たちは、非殺傷設定の魔法を使用していないの？」

やはりそこからか…クロノも微妙な顔をしてこちらを見ている。

「使っていない…って言うのには、ちょっと語弊があるな」

「まさか、使えないの？」

俺の言葉に、先に答えを言ったリンディさんは、少し驚愕が顔に浮かぶ。

「ま、ここからは“俺の能力”ってことで詮索禁止をお願いします。各々、勝手に想像を膨らませてくれ」

「なっ…!?!」

俺の応えにクロノが喰いかかろうとしたが、リンディさんに腕で抑えられる。

「そうですか…。なら、これは説明してもらえるかしら？」

リンディさんは早々に話を切り替え、エイミイが映したモニターの一点を指さして聞いてくる。

そこには、黒い粒子となって消えたロキの転生者が映されていた。

「何を説明しろと？」

ここで態と惚けてみる。

おそらく、今回皆の前で俺と一真が倒した相手が、ヒトの形を執っていたからだろう。

前回この人たちが視たのは、ヒトから多少は離れたものだ。

だが、今回は完全にヒトの形をとり、言葉も発していたからだろう。

う。

「この人たちも、貴方が敵対している使い魔であるかどうかです」

当たっていたみたいだな。

「まあ、そうなります」

適当に答える。

この辺のことを一々全部話す気は無い。適当にはぐらかして終わらせる。

「そう。私からはそれだけよ……」

納得して居ないっぽいけど、俺の眼を見て引いた。

序に、俺は今「これ以上聞くんじゃねえ」という眼をしていた。

それから数個確認して、俺の用事を終わらせることにした。

「リンディさん、フェイト達をここに呼ぶことって出来ますか？」

「え？……うん、ごめんなさいね、今はダメなのよ」

俺の質問にそう答えるリンディさん。そうか、仕方ないな……。

「そうですか、仕方ない……なら無理やり（ボソッ）」

「今看過できない言葉が聞えたのだけど…?」

ボヤキが聞えたようで、リンディさんは少し焦った顔をする。

「え…? やだなリンディさん、まさか力づくでフェイト達を連れ出そうなんて考えてませんヨ?」

「まんま言葉にしてるし…」

「ユーノウツさいぞ…。」

「ちょっと待つて。何か用事でもあるのかしら?」

リンディさんは、おそらく俺の実力を冷静に判断しているから焦っているな。

「いえ、大した用事じゃないです…」

「じゃあ…」

「…ただ、アリシアを生き返らせるだけですから」

「そう…アリシアさんを生き返らせるだけ、な…のね…へ?」

生き返らせる発言でリンディさんだけじゃなく、ここに居る皆が固まっている。

そして…。

「ん〜…？なに、精々俺の左腕が数時間だけ使用不能になるだけだ」

「えー！？それってすごい危ないよっ！」

俺の適当な答えに、なのはが直ぐに声を上げた。

「危なくねえよ…。別に、実際に腕が吹っ飛んだりする訳じゃねえんだから」

「ふえ…？」

何だその反応は…。まさか、マジでそんな想像をしていたのか…？
この頃の小学生は恐ろしいな…。

「ただ、マヒするみたいに動かないだけだ」

「よ、よかった〜」

こいつ、俺の話をちゃんと聞いてたのか？

「なのはは…俺をゾンビか何かだと思ってるのか？」

「え…？なんで？」

「だって、俺は数時間だけって言ったのに、お前の考えたのは俺の腕が吹っ飛ぶこと…。どうなってんだよ」

「そ、それは…、おにいちゃんなら…あるかな〜っと」

眼を逸らしながら、まず無理なことを言いやる。

「いや…あなたが間違いないじゃねえな。
実際に腕再生させてるし…しかも数秒で…」

「え…っと。真耶っ！そう言えば、やるんじゃないの…!？」

軽くしょげていた俺に、ユーノが声を掛けてきてくれた。
そのフォローが俺の眼頭を熱くさせるとも知らずに…。

「ああ…やりますよ…?ええ…やりますとも…」

フラフラと敷物の上に寝かしてあるアリシアに近付いていく。

おっと、忘れていた。

「『ここから先を見るには、“管理局員”は有料になります』…っ
と」

俺は何処かから取り出した看板にそう書いて立てる。

「は…?ちよつと待て臯月!」

クロノがその看板を見て吠える。

序に、何故かクロノは俺のことを名字で呼びます。

どうでもイイな…。

「んあ？どうしたクロちゃん」

「クロちゃん言うな！…じゃなくて。何だ有料って！」

クロノ…有料の意味も知らないのか…。あはれ。

「クロちゃん、いややクロノ。有料って言うのはな、それをするのには現金が掛かるっていう意味で…」

「そこじゃない！何故お金を捕る必要があるのか、と聞いてるだっ！」

そんなに怒んなくてもいいのに、ちよっとしたジョークなのに…。

ま、いいか。

「いや、管理局員一人たりとも今からやることを見られたくないからさ…」

「……………確かに、人体の蘇生なんて、放っておく訳がない」

俺の理由に、一真が補足を足す。

てか、何で一真はちよっと離れた壁に寄り掛かってんだ？

「しかし…」

「しかしもカカシもねえよ……………さっさと出て行け。行かないんなら、さっさと管理局の有り金全部出せ」

リンディさんの言葉を遮り、少しドスの効いた声と殺気を放つ。

もちろん、リンディさんのみに。

「っ！……わかったわ。二人とも、行くわよ」

「え……？母さ……艦長！？」

「え〜と……それじゃあ、私も〜」

リンディさんは踵を返し、出口に向かっていく。

クロノは何が何だか分からないといった声を出す。

エイミイは、リンディさんの近くに居たから少し殺気に宛てられ
たんだろう。

「ふう〜……」

三人が出て行くのを見て、集中する。

「あの……」

「……フェイト」

フェイトが誰かに何か言おうとしてたけど、一真が止めた。

助かる。今から変化させる“左腕”はかなり集中しないとイケない……。

近くで話しかけられただけで乱れる可能性があるものだ。

ここからは自分との戦い。

頭の中に明瞭にイメージする。
この場に相応しき“左腕”を…。

眼を閉じる。

イメージをもっと濃く。

もっと強くイメージする。

もうすぐ届く。

「くっ…!？」

左腕に、電流が流れたかのような痛みが奔る。

黒い雪がチラつき、イメージを隠していく。

おかしい。さっき確認したが…もう黒い粒子はなかった筈だ。

黒い雪が、吹雪のようになり、イメージを塗りつぶしていく。

いや、今はそんなの関係ない。

左手をイメージに伸ばす。
吹雪が強くなる。

今は、やるべきことをやるだけ。

伸ばす伸ばす伸ばす伸ばす伸ばす。

吹雪の中を駆け抜ける。

そう、これは…俺がやらなきゃいけないこと！

届いた…。

吹雪を抜けた…。

眼を開くと、いつの間にか左手を天井に伸ばして仰ぎ見ている。

「ふあ…」

誰かが声を漏らす。

俺の今の“左腕”は、真っ白、血が通っていないかのような色。そして、その掌に一つ、腕に三つの赤い球が埋め込まれている。

その“左腕”が放つ魔力は、どこまでも清廉で、何処までも神々しい。

この腕は、元々は枷を付けられて能力が抑えられていた。抑えられている状態が…『アブラクサスの左腕』。

その状態でも、どんな重傷も跡形もなく治すことが出来る。

だが、今はリミッターが外れている。

つまりは、人知を超えた力を使える…。

死者蘇生。

正に、神の左腕。

その名を…『デミウルゴスの左腕』。

「はあ…はあ…はあ…」

伸ばしていた左腕を下ろし力を抜く。

真っ白な腕に紅い筋が一筋流れる。

「え…！？真耶おにいちゃん！それ…！」

「問題、ない」

俺はそう言って、上着を脱ぎ左肩に巻き、腕を伝っていた血を振り払う。

「少し、静かにしている」

アリシアに歩み寄り、片膝を付き、左手を胸の上に翳す。

そして、左腕に魔力を流し込む。

「あ、ぐっ……」

また左腕に激痛が奔り抜ける。

左腕を右手で押さえつけ、歯を食いしばる。

そうして、数秒後。

アリシアの身体に光が灯っていく。

皆がその光に見惚れていた…そんな時。

俺の左腕に、引っ張られるような感覚がして…。

「え……？」

それは誰の漏らした声か…。いや、この場に居る皆全ての物だろう。

と言うか、この光景を見て混乱しない人が居たら。その人の心臓にはかなりの量の剛毛が、モッサモッサ生えていることだろう。

いや、今はこれを如何にかしないとイケない。

何故なら…。

俺の、『デミウルゴスの左腕』になっている腕が…アリシアの“胸の中”に沈み込んだのだから。

これはひじょーーーーーっつっつによろしくない。

傍から見たら、俺がアリシアの胸を触っているように見えるだろ…っ。

拙い、どどどどどどどどどどスレバインダー。

真耶 混乱

ざわ…ざわ…。

この部屋の空気はかなり張りつめている。

と、とりあえず抜いてみよう…。(未だ真耶混乱中)

ゆっくり左腕を引き抜く…。

そして、完全に抜いたとき、真耶に電流奔る…

「ふえ…え…今…え……だつて…え…？」

「（ユーノのキャパを超えて機能停止中）」

「えつと…今のは…？」

「な、ななななな何だい！？今のは！？」

「……皆…落ち着きなよ…」

唯一冷静なのは一真だけ……いや、一真も冷や汗があり得ない量
出ている…。

この部屋は、今かなり混沌としていた。

そんな所に…。

「何があつた！」

我らが、突撃KY執務官が来てくれた。

「あ…これは一体どういう状況だ…？」

だが、そのクロノもこのカオス空間には勝てないようで…一番冷静な一真に話を振っていた。

アレから十数分後…。

「な、なるほど…」

皆何とか混乱から脱して、俺を抜いた皆がクロノを中心に話し合っていた。

「
」

俺はさっきから確かめていたところだ…。

そう、能力が使えるかどうか…。

普通に能力は使えたのだが…一つ、いや…一括り使えないものがあつた。

「
やっぱり…『アブラクサス』も『デミウルゴス』も遣えない…」

どうしてもそれだけ使えない…。

おそらくさっきの関係しているんだろう。

「メル…何かわかるか？」

俺は何も分からないので、後はメル頼りになる。

「
うん、私にも…何とも」

『　　そうか…』

一体どうなってんだよ…。

いや、一つ可能性がある…だが、親子二人ともな
んてあるのか？

『それは俺から話した方が良さそうだな』

俺が思考の海に沈んでいたら、念話にトールの声が混ざってきた。

『なんだ、知ってるのか？』

『ああ、一真。お前も一応聞いておけ』

『……ん』

トールが話してくれるらしいが…俺の推測が当たっていたらどう
しようか…。

『あゝ、一言で終わらしちまうと…アリシア、あの子も適正がある
んだよ』

『　　はあ！？』

『………』

ははは…。見事にどんぴしゃじゃねえかよ…。

『だがな、あの子の適正値は、そこまで高くないんだよ』

『 何ですと…? 』

高くない?

『 ……どれくらい? 』

お、聞きたいことを一真が先に聞いてくれた。

『 ん? そうだな… お前らが一般人の約5万倍で、ロキの転生者の平均がその三割だから… お前らの二割位だ 』

『 ……なるほど… で、それと、真耶の能力が発動しない関連は? 』

一真が本題を切り出す。

『 ああ。あの子が、お前のあの力の部分だけ取り込んだんだ 』

『 ……取り、込んだ…? 』

一真が少し同様している。

だが、俺は少し予想していた… しかし、適正が低いんなら…。

『 アリシアはどうなるんだ? 』

そう、一応一般人よりも適正が高いと言っても、あくまで一般人よりだ。

そうになると、アリシアは人の形なんて保てないんじゃない? …。

『ああ。その辺は大丈夫みたいだぞ？何か、お前の力を体に馴染ませつつある』

『は……？』

適正が低いのに馴染んでいる？

『……なんで？』

流石は一真だ。俺が聞く前に質問してくれる。

『さあ？そこは俺にもわからん』

こいつは大丈夫なのか？

『ま、馴染ませるのには時間が掛かる。最長で2年、最短で半年と
いったところだ』

『うん、何とも納得し難い説明だったな』

『……これは、仕方ない』

俺と一真は、トールの説明に辛口評価をする。

『んじゃ、教えたから…あとガンバ！』

それで念話が切れた。

『はは…うん、がんばって』

メルとの念話も切れる。

まゝとにかく、蘇生は成功したようだ。
起きるのは先になるが、仕方ないだろう。

さて、どうやってアリシアを引き取るのかな…。

第24話 蘇生 なぞ (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

真「今回は、一応アリシア蘇生の話か？」

そうなんです…。

本当は今回で無印を終わらせる気だったのに…ダラダラと書いていたらここまでしか…。

真「あはれ…。ま、今回はこれでノビノビ書けるだろ」

確かにそうなんだけど…余りにも今回駄文過ぎて…立ち直れるかどうか…。

真「お、おい…大丈夫かよ…」

H A H A H A 大丈夫だ。大丈夫だから新しい小説だつて書けるZE！

真「完全にダメじゃねえか！あゝ…今回は作者が壊れているので俺だけで次回予告を…」

今度こそ 次回 第25話 大切な物 ナマエ」

その力は、戦うために…。

第25話 大切ナ物 なまえ (前書き)

新年開けまして予約投稿です。

まあ、新たな年になっても、変わらず生温い眼で見守っていてください。

それでは、転生者の闘争をお楽しみください。

第25話 大切ナ物 なまえ

アリシア蘇生から数日。

口八丁手八丁でアリシアをこちらで引き取ることに成功した。

海鳴に帰ったら、知り合いの医者に頼んで置いてもらうつもりだ。

そして、何かどうでもいい賞状を貰ったり、ユーノがまた高町家で世話になることが決まったりした。

食堂で、リンディさんがなのはとユーノとアルハザードについて話をしていたので、俺は退散した。

「ふあ〜…あ

眠い、眠すぎる…。

アリシアを蘇生させてからやけに眠気が強い。

「これも力を取り込まれた副作用なのだろうか？」

「……大きな、欠伸」

「うあ……？」

横の通路から一真がそう言いながら歩いてきた。後ろには、フェイトとアルフも一緒だ。

「うるへえ…仕方ねえだろ」

悪態をついておく。

何故フェイト達が自由にアースラ内を歩いていられるのかと言うと…まあ、それもアリシアのこの序に承諾させたことだ。

部屋は通常の部屋で、制限ありで外には出られるようにしてもらった。

俺たち四人で話しながら歩き、休憩所のような所で座って話し続けた。

「アリシアを助けてくれて、本当に、ありがとう」

「え………」

それは不意打ちだった。

確かに、俺の能力の話になっていたが、そっちの話に行くとは…。

「 いや、礼を言われることじゃない…それに、俺は…プレシアを助けられなかった…」

逆に、罵られても仕方ないことだと思っていた。

何故！？…どうして！？…と、詰め寄られ、どんなことをされようとも甘んじてその罪を背負うつもりだった。

なのに目の前の金色の少女は、目の前の咎人に感謝の言葉を告げてきた。

「うっん…貴方のせいじゃない。あれは、仕方なかったんだよ…」

「 違う…っ」

仕方ないこと、何かじゃない…。

如何にかできた筈なんだ…。

俺の油断…力不足…判断力…。

「 誰にも、如何することも出来なかったんだ…」

「 違うっ…！」

そう、何とか出来るだけの行動をとれた筈なんだ。

なのに…俺は…。

「 だから……」

「違つっ
！」

俺はソファァーから勢いよく立ち上がり声を荒げる。

「違つ違つ違つ！俺は何とかできた筈なんだ！プレシアを助けることが…できた筈なんだ！なのに…俺は…それを…しないで…」

顔を俯ける。

視界には、向かい合っているフェイトとアルフの靴と床だけ。

足の力が抜けて、またソファァーに座り、頭が頂垂れる。

また歯を食いしばる…。この後悔を忘れないために…。
膝の上で、血が出るほど拳を強く握る…。この後悔を刻むために…。

そんな俺の頭に、熱を感じて、視界に黒い服と金色の束が二つ。

「…そんなに、自分を責めないで…貴方一人で抱えることはないよ…」

たぶん、フェイトに頭を抱えられている風になっているんだろう。

小学生にこんなことされて…情けない…。

でも、落ち着く…。

そう、これは俺がなのはに言ったことと同じだ。

一人で抱え込んでいる。

周りの奴に頼らないでいる。

そういうことだろう。

人に行つといて自分で出来なきゃ説得力がねえな…。

「はは…」

軽く笑い、フェイトの腕の中から離れて、その眼を見る。

「俺の方こそ、ありがとう…だな」

そして、俺は“笑顔”を顔に浮かべる。

「え……あつっ……」

フェイトは今していたことを思い出して、顔を真っ赤にしていた。

「あっはははははっ!!」

「うつ…笑わなくなつて…」

俺は笑いながらフェイトの頭を撫でる。

「フェイト、顔真つ赤だよ？」

「……トマト」

「ふ、二人まで！」

アルフと一真もフェイトをからかっている。

そう、一人で抱え込む必要はねえ…。

一人では重すぎるものもある。

けれど、俺は誰にも頼れない…頼らない。

どうしても、他人ひとに頼ろうとすることができないんだ。

だから、前世と同じやり方で進んでいく…。

そう、ずっとそれでやってきた…。だから、大丈夫だ。

unnecessaryなものを切り捨てていく…。

それが、俺の進む道…。

その次の日の朝。

俺となのはと、淫獣モードのユーノは地球に戻るために転送ポイントに来ていた。

見送りは、いつもの三人。

俺はアリシアを背負っている状態だ。

「協力に感謝する」

クロノが俺に手を差し出してくる。

だが…なあ…。

「クロノ、俺の今の格好で握手を求めるのは、どうなんだ？」

「あ…そうか…」

クロノは気付いて手を引っ込めようとするが、俺は背負うのを片手に変えて、空いた手でクロノの手を掴む。

「ま、感謝は受け取っておこう」

「はあゝ。君は…」

クロノは呆れたように溜め息をつく……。
いや、本当に呆れているのか？

「それじゃあ、そろそろいいかな？」

準備が完了したのか、エイミィが声を掛けてくる。

「「はい！」」

「おう」

俺たち三人はそれぞれ返事を返す。

「またね！クロノ君、リンディさん、エイミィさん」

なのははそれぞれに挨拶をしている。

そして、転移が発動して、俺たちは元の世界に帰った。

次の日。

俺はアリシアを知り合いの医者、フィリス・矢沢さんに預けてから学校へ登校。

「よっ、久しぶりだな」

「よっ……」

校門の所で恭介と鈴が声を掛けてきた。

「よお。まあな……」

それに振り返り返事を返す。

そんな俺に、恭介は俺の顔を窺うようにして聞いてきた。

「終わったのか？」

内容は聞かない。

こいつは、俺の顔を見て何かを感じたのだろう。

ほんと、何でもこいつは俺の表情一つで色々わかるのやら。

「まあな、終わったよ」

「そっか……」

俺たちはそれだけ話して昇降口に向かった。

その日の夕方、俺は鍛錬場にいる。

「ふっ！…はあ！はっ！」

身体を限界まで動かしていく。

ダメだ。

このままでは、半年後にリインフォースも救えない。

それでは、俺の居る意味がない。

もっと強くならなないと…。

こんな俺では…“俺”の意味はない…。

数日後の早朝。

自室でトレーニングの支度をしていたら携帯がなった。

電話で、相手がクロノだった。

『朝早くにすまない…』

「いや、もう起きていたから別にいい」

『そうか。それで話なんだが……』

内容は、フェイトの本局行きのことと、少しの間だけど会えるのだそうだ。

「そうか、なら今から行くっ」

『ああ、わかった』

そう言っって携帯を閉じる。

多分なのはにはリンディさんが伝えているだろう。

俺は服を制服に着替えて外に出た。

出た所で、急いで出てきたのはと合流してから臨海公園に向かった。

向かう途中のなのはのテンションは、かなりのものだった。

「フェイトちゃーん！ん！」

そして、四人の姿を見つけると勢いよく走って行った。

俺は普通に歩いている。

「僕たちは向こうに居るから……」

「ありがとう！」

「……ありがとう」

クロノとアルフ、ユーノは近くのベンチに向かった。

そして、一真が何故か歩いている俺に近付いてきて、俺の腕を掴み、二人から少し離れた所に来させられる。

「ちょっ！おい……なんだよ……」

「……いいから、こっちはこっちで、話がある」

そう切り出してくる一真の眼は真剣だ。

「わあっ たよ……」

「……時間はかからない、二人のを見てよ」

「ならクロノ達の方に行こうぜ……」

「……いや」

「いやて……」

「一体どうしたのやら……」

ま、あのシーンが生で見られるのは嬉しい…かな。

「にはやは、一杯話したいことあったのに…変だね。フェイトちゃん顔見たら、忘れちゃった…」

最初に話し出したのはなのは。

「私は……そうだね、私も上手く、言葉にできない…」

それに続くようにフェイトも言葉を出す。

「…ただ…嬉しかった…」

「え…？」

「真つすぐに、向き合ってくれて」

フェイトはなのはの方に顔を向ける。

「うんっ！…友達になれたらいいなって、思ったの」

フェイトの言葉に、なのはは笑顔で返す。

だが、その笑顔も直ぐに引つ込む。

「でも…今日、もうこれから出かけちゃうんだよね…」

その声色には悲しみが出ている。

「そうだね…少し長い旅になる」

「また…会えるんだよね？」

「うん…」

なのはの問いに、強くうなずく。

「少し寂しいけど…やっとほんとの自分を始められるから」

それは、きつと決闘のときになのはが言った言葉…。

「来てもらったのは…返事をするため…」

フェイトの頬に、少しだけ朱が差す。

「君が言ってくれた言葉…友達に成りたいって…」

今度は、海上のジュエルシードの時の言葉。

「うんっ…うんうん！」

「私に出来るなら…私でいいなら、って」

フェイトが顔を少し俯けてしまう。

「だから、教えて欲しいんだ…どうした、友達になれるのか

…」

今まで友達のいなかった少女の、純粋な願い。

それを、星の光を灯す少女が叶える。

「簡単だよ……。友達になるの、すごく簡単」

「え……」

フェイトは、少し驚きなのはの方を向く。

そのなのはは、笑顔で告げる。

「名前を呼んで……」

魔法の言葉を……。

「最初は、それだけでいいの……。『君』とか、『アナタ』とか、そう言うのじゃなくて……ちゃんと相手の眼を見て、ハッキリ相手の名前を呼ぶの」

なのはは、フェイトに向き直り自分の名前を言う。

「わたし、高町なのは……なのはだよ……?」

「なのは……」

「うんっ、そうっ……!」

フェイトは、初めての友達の名を刻むように、ゆっくり口に出す。

「なのはっ……」

「うんっ!」

「なのは」

「うん」

何度も、何度もその名前を言葉にする。

もう、忘れないように…。

なのはがフェイトの手を包み込む。

そして、優しく風が吹く。

「ありがとう…なのは…」

「うん………」

「なのは…」

「っ!……うんっ!」

なのはの眼尻に涙が溜まる。

約一ヶ月の間すれ違っていた心が、今、ようやく触れ合った。

「君の手は、温かいね…なのは」

「っ……!」

溜まった涙を、なのはは拭う。

「…一つ、分かったことがある……。友達が泣いていると、自分も同じように悲しいんだ…」

「っ！フェイトちゃんっ！」

フェイトのその言葉で、なのはの涙腺は決壊し、フェイトに抱き着いた。

その体を優しく、フェイトは受け止める。

「……そろそろ、こっちも」

「ああ」

ようやく一真が話し出す。

「……これから、敵のこと、よろしくね」

「ああ、判ってるよ」

一真はこれから、フェイトと一緒にいけなげやいけなげ。

もしもの時に居なかつたりしたら大変、と言うことで半年後…闇の書事件までロキの方の対応は俺が一人ですることにした。

「……でも、ほんとに…よかった？…少しなら…僕も…」

一真がそんなことを言うが…。

「別にかまやしない…。お前は気にしなくていいんだよ」

「……………ん」

俺は笑ってそう言ってやる。

どっちかって言うと、俺一人の方が助かる。

そっちの方が修業には丁度いい。

半年の間にもっと力をつけて…もう、後悔しないようにしなきゃ
いけねえ…。

なのは達の方を見たら、もう時間のようで…クロノがこっちを見ていた。

「…そろそろ時間みたいだぞ？」

「……………あ…そうだね…」

一真は時計を…と言うか『クサカベ』を見て、少し落ち込んだようにそう言った。

そんな一真を見ていた俺の視界に、リボンの交換をしている二人の姿が映る。

俺はそれで思いついたことをやってみる。

「なあ一真…」

「……なに？」

一真が顔を上げた所に、俺が髪を縛っていた紐を解き、それを顔の前に持つてくる。

「これ…もってけ」

「……え…？」

「その長い髪、邪魔になるだろ…？だから、戦闘とかの時には縛っとけ」

そう言っつて、一真の手に握らせる。

「……わかった」

一回なのは達の方を見て、俺の意図を察したようで、すぐに和服の袖に入れた。

「……あ……」

そして、一真は少し間抜けな声を出した。

「どうした…？」

「……僕、何も、持ってない……」

……あぁ……。なるほど……。

「まあ、いいだろ別に……」

「……僕はよくない……。……あ」

長い沈黙の後、何かを思いついたような声を漏らし……。

「……僕の……秘密。君になら……いいかな」

そんなことを呟いた。

「秘密……？」

俺の紐と交換するようなものなのだろうか？

「……そう……僕の秘密……今のところ知っているのは、フェイトと、アルフ、だけ」

「おいおい、そんなもの俺に教えていいのか？」

友人として、秘密を共有することは確かに嬉しいが……あんな粗末な紐と交換って、どうなのだろうか……。

「……いい……いや、どっちかって言うと、知っていて欲しい……かな……」

ま、本人がいいなら、いいのかな？

「なら、聞くよ……」

俺は、一真の方に向き直り、その眼を見る。

「……………ん」

一真も俺を見かえしてくる。

「……………僕の、名前…実は偽名なんだ…」

「はぁ？…そうなのか？」

「……………ん。本当の名前は

茜（あかね）、って言

うんだ…」

茜…。

こいつが偽名を使った理由がわかった気がする。

こいつの、この美少女な顔に、この名前を出されたら…大半の人は女だろうと思うからな……………。

……………あれ？いつもならこの辺で、俺の思考を読んで、斬撃がとんでくるはずなのに…いっこうに来ない。

一真の顔を覗いてみると…少し複雑そうな顔をしていた…。

はて…？なぜだろうか…。

ま、まあ、平和なのはいいことだ…うん。

「何だ…。いい名前じゃねえかよ…。隠す必要なんてねえだろ」

俺はそう言って、一真の……………改め、茜の頭を撫でる。

「え…？いや、だって…おま…お前の“気”……………へ！？」

俺の頭は今、絶賛混乱中だ…。

「……………」

信じがたいことだ…。

こいつが本当に女なのだとしたら……………前世でどれだけ修業をした
のだろうか…。

女の身である“気”にたどり着くのに、どれだけの苦痛を耐えた
のか…。

なら、俺はそのことを肯定してやらないとな…。

「……………はは、まさか…本当に女とは…ビックリだ…」

「……………隠してたのは、謝る…。でも…」

茜は、その表情が乏しい顔に、苦痛のようなものが浮かべている。

こいつも色々あるのだろう。

なら、さっさと次の言葉を言って楽にしてやるか…。

「ま、別にお前が、男でも女でも関係ない…。お前が俺のダチなの
に変わりねえんだから…！」

「……………あ…ん……………ありがとう」

俺は言葉と共に、茜の頭を撫で続ける。

俺の言葉で、その表情に喜びが浮かび、朱が差す。

「それじゃ、行きますか」

「……………ん」

俺たちはそう言い合い、クロノ達の方に歩いていく。

「クロノ、フェイト、アルフ……………一真、元気でな」

俺は、これから別れる友人たちに声を掛ける。

茜もなのはと話をしている。

「ああ、そちらも元気でな」

「うん、色々ありがとう臯月」

「ほんとに、助かったよシンヤ」

三人からそれぞれ言葉がくる。

……………「…訂正させよう」。

「フェイト、俺のことは名前でもいいぞ…もう、俺たちも友達…だろ？」

「……あ、うん…そうだね」

俺の言葉に、嬉しそうに頷く。

「…じゃあね、真耶」

「…ああ」

また会えると判っていても、やはりちょっとシンミリしちゃうな…。

四人の足元の魔法陣が展開される。

ついに別れの時がきた…。

各々の思いは、既に繋がった。

約束はせずとも、また逢うことは出来る。

それが判るから、今はほんの少しの別れ。

光が溢れ、収まると、既に四人の姿はなかった。

「……帰ろうか…ユーノ君、おにいちゃん」

「ああ、さつさと帰るか」

俺たちは家に足を向ける。

これで、この話は一旦終わりだ。

次は、約半年後…。

そこが、約束の時だろう…。

今度は救ってみせる。

そのためには、もっと、力を付けなくてはいけない…。

もっと、強くなるんだ…。救えるように…護れるように…。

S i d e - o u t

真耶達は、一旦の休息を迎える。

その休息は短いものだろう。

しかし、真耶は止まらない。

彼は、止まれないのだから……。

T o b e c o n t i n u e d

第25話 大切な物 なまえ (後書き)

無印完結です！

25話にしてようやくですよ…。

そして、今回はまたノリと思いつきと迸るパトスのせいで、一真…
改め茜を女の子にしてしまいました…。

女の子にしか見えない…と前から言われていたので、もういつその
事女の子にしちゃおうと思いつきました…。

しかし、反省はしているが後悔は(r y

まあそんな訳で、今回は短めに後書きを閉めさせてもらいます。

今回は幕間になります。

それでは皆さん、2011年も頑張つて逝きましょうー!!! (マテ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547p/>

魔法少女リリカルなのは?転生者の闘争?

2011年3月17日19時53分発行